



アクセル・ワールド編

白雪姫の微睡

戻されたのニコを必ず取り出すと約束したハルヒキは、大天使メタロンの加護を受け、タケム、チヌリ、そしてブラッド・レバードとともに基礎研究会の本拠地に突入、機体の被害を生り癒えて、バイス、アルゴンと接触した。

「ついに激突する瞬間か——」と思われた瞬間、突然性から降り止んだ雪の静けさによって、〈世界の間〉マークIIが露出する。

〈世界の間〉の力を持つ〈龍〉によって、世界融合の野へと追い詰められるハルヒキたち。しかしその時、メタロンと完全にシンクロしたハルヒキは、時間の停止した世界へと導かれる。全てを知覚することが可能なその世界において、メタロンは語りはじめる。

ブレイン・バーストが作られた理由。そしてバーストリンカーが存在する意味を——。



16

白雪姫の微睡

川原 礫

イラスト by HIMA

16

16

電撃文庫

アクセル・ワールド16
—白雪姫の微笑—

川原 礫

電撃文庫
2691



アクセル・ワールド 16 白雪姫の微睡

川原 礫
イラスト/HIMA
デザイン/ピキピキ





「ま、ここまで来たら
行くと、まで
行くつぎやねーよな」

ニコ

赤のレギオン《プロミネンス》の
レギオンマスター
ブラックバースに拉致されたが、
クロウによって救われた。
デュエルアバターは
《スカーレット・レイン》。

『ティール……
ルルルルル……』

《災禍の鎧》マークII

スカーレット・レインの
強化外装《インビンシブル》を
依代にして造られた
最凶最悪のデュエルアバター。

ハルユキ

中学内格差最底辺の少年。
黒髪郎率いる
新生《ネガ・ネビュラス》の
メンバー。
デュエルアバターは《シルバー・クロウ》。

「……戦うしかない」

ヨ
テイル……………
ル
ルルルル……………」

《災禍の鎧》マークII

スカーレット・レインの
強化外装《インビンシブル》を
依代にして造られた
最凶最悪のデュエルアバター。

「……戦うしかない」

ハルユキ

中学内格差最底辺の少年。
黒雪姫率いる
新生《ネガ・ネビュラス》の
メンバー。
デュエルアバターは《シルバー・クロウ》。

「ま、ここまで来たら
行くところまで
行くっきゃねーよな」

ニコ

赤のレギオン《プロミネンス》の
レギオンマスター。
ブラック・バイスに拉致されたが、
クロウによって救われた。
デュエルアバターは
《スカーレット・レイン》。



「ハル……」

あんたこれ……

どういふこと……?」

チュリ

《ネガ・ネビュラス》所属。
デュエルアバターは
《ライム・ペル》。
ハルユキの幼なじみ。

黒雪姫

黒のレギオン《ネガ・ネビュラス》の
レギオンマスター。
梅郷中学副生徒会長。
デュエルアバターは
《ブラック・ロータス》。

「……これは……か」

「ハル……

あんたこれ……

どういづかと……」

「う、これは……!?」





チュリ

《ネガ・ネビュラス》所属。
デュエルアバターは
《ライム・ベル》。
ハルユキの幼なじみ。

黒雪姫

黒のレギオン《ネガ・ネビュラス》の
レギオンマスター。
梅郷中学副生徒会長。
デュエルアバターは
《ブラック・ロータス》。

「お前がいかに軽んじ、弄び、踏みにじろうとも、
我々の……全バーストリンカーの希望は
決して消えない」

「私は、いましばし蝶夢に
微睡みましよう。」

さようなら、
バーストリンカーたち」

「……まさか……
あなたは……」

???

突然現れた
謎の機戦用ダミーアバター。

「お前がいかに軽んじ、弄び、踏みにじろうとも、
我々の……全パーストリンカーの希望は、
決して消えない」



「私は、いましばし蝶夢に
微睡^{ちようむ}みましょう。」

さようなら、
バーストリンカーたち」

「……まさか……
あなたは……」

???

突然現れた
謎の戦用ダミーアバター。



災禍の鎧 マークII

加速研究会が新生させた〈災禍の鎧〉マークIIは、三つの構成要素からなる。

まず装着者は、アルゴン・アレイが〈心傷殺理論〉に基づいて誕生させたのであろう謎多きメタルカラー、ウルフラム・サーベラス。

そのサーベラスを支配しているのは、空から降ってきてコクピットに入り込み、マークIIの操作権を奪った出所不明の赤い光。

そして、実体としてのマークIIの依代となったのは、赤の王スカーレット・レインが長い時間と膨大な努力を注ぎ込んで育ててきた強化外装（インピンシブル）。

これは、初代〈災禍の鎧〉の構成パターンとはほぼ同様である。

オリジナルであるクロム・ディザスターは、まず鎧を育ててきた歴代の装着者、次に鎧に蓄積された負の心意の暗闇から生み出された疑似知性体（獣）、そして最後に、依代となった強化外装、〈七の神器（セブン・アークス）〉の

六番星（ゼータ）たる白銀の鎧〈ザ・ディスティニー〉から構成されていた。

ただしマークIと異なる点として、両手から発射する〈ワイヤー・フック〉、喰らったアバターの体力ゲージを我が物とする〈エネルギー・ドレイン〉など歴代の装着者が持っていた技は無い。

マークIIの頭頂高は六メートルを超える巨獣（ビースト）級エネミーに肩を並べるサイズだが、外見から確認できる武装は、両腕に装着された太口径レーザー砲のみである。

胴体の中に取り込まれているウルフラム・サーベラスの意識は確認できず、操作権を持っていたサーベラスIIことタスク・テイカー・能美征二の複製人格も失われたままのようである。

ISSシャット本体が発した赤い光によって注入されたエネルギーそのものが、マークIIの意識を司っていると考えられる。

アクセル・ワールド 16

白雪姫の微睡

川原 礫
イラスト/HIMA
デザイン/ビィビィ



- 黒田剛也(クロユキヒト)＝海城中学の副校長。前髪は短くお茶髪。その素性は謎に包まれている。学内アバターは自作プログラムの「黒田剛也」。デュエルアバターは「黒の王」ブラック・ロータス(レベル9)。
- ハルユキ＝有田雪宮(アリタ・ハルユキ)。海城中学二年。いじめられて予てより気味。ゲームは得意だが、内面的。学内アバターはピンクのブタ。デュエルアバターは「シルバー・クロウ」(レベル5)。
- チユリ＝直嶋千百合(クラシマ・チユリ)。ハルユキの幼馴染。お節介気な元気娘。学内アバターは「藍色の猫」。デュエルアバターは「ライム・ベル」(レベル4)。
- タカム＝黒沼武(マユズミ・タカム)。ハルユキ、チユリとは幼少期からの知り合い。剣道が得意。デュエルアバターは「シアン・バイル」(レベル5)。
- スーゴ＝白崎樹子(クラサキ・フウコ)。旧「ネガ・ネビュラス」に所属していたバーストリンカー。④元素(エレメンツ)の一人。心臓を司る。とある事情により暗黒生活をおくっていたが、黒田剛とハルユキの説得により戦線に復帰する。ハルユキに「心臓」システムを授けた。デュエルアバターは「スカイ・レイカー」(レベル8)。
- というい＝四神宮蓮(シノミヤ・ウタ)。旧「ネガ・ネビュラス」に所属していたバーストリンカー。④元素(エレメンツ)の一人。心臓を司る。阪乃本字学園等部4年生。高度な魔法コマンド「浄化」を執るだけでなく、遠距離攻撃も得意とする。デュエルアバターは「ゾーダー・メイデン」(レベル7)。
- カレントさん＝正式名称はアクア・カレント。本名は泉見(ヒミ)あきら。旧「ネガ・ネビュラス」に所属していたバーストリンカー。④元素(エレメンツ)の一人。心臓を司る。④唯一の「ザ・ワン」と呼ばれる。新米リンカーの通称を掛け合う用心棒(バウンサー)。
- グラファイト・エッジ＝本名は不明。旧「ネガ・ネビュラス」に所属していたバーストリンカー。④元素(エレメンツ)の一人。いまだその素性は謎に包まれている。

- ニューロリンカー＝顔と髪型無関係。映像や音声など、あらゆる五感をサポートする携帯端末。
- ブレイン・バースト＝黒田剛からハルユキに転送されたニューロリンカー内のアプリケーション。
- デュエルアバター＝ブレイン・バースト内で対戦する際に操るプレイヤーの仮想体。
- 対戦＝レゾナンス。複数のデュエルアバターで形成される。占領エリア拡大と利権確保を目的とする集団のこと。主要なレゾナンスは7つあり、それぞれ④属性の七王がレゾナンスマスターを創っている。
- 通常対戦フィールド＝ブレイン・バーストのノーマルバトル(1対1戦闘)を行うフィールドのこと。現実さながらのスペックを持つが、システムはあくまで一般的な格闘ゲームレベルのもの。
- 無限対戦フィールド＝レベル4以上のデュエルアバターのみが許可されるハイ・プレイヤー向けのフィールド。④属性対戦フィールドとは異なるのゲームシステムが構築されており、その自由度は次世代VRMMOにも全くひけを取らない。

- 運動命令系＝アバターを制御するために使うシステム。通常はすべてこのシステムによってアバターは操作される。
- イメージ制御系＝自身が強く想像(イメージ)することによってアバターを操作するシステム。通常は(運動命令系)とはメカニズムが大きく異なり、使えるものはごく少数。④心臓システムの発達。
- 心臓(インカー・ネイト)システム＝ブレイン・バースト・プログラムのイメージ制御系に下移し、ゲームの特を起した現象を引き起こす技術。《事象の上書き(オーバーライド)》とも言う。

- 知識研究会＝旧のバーストリンカー集団。ブレイン・バーストをただの対戦ゲームとしては考えておらず、何事かを企て。《ブラック・バイス》《ラスト・ジグソー》が所属している。
- 異領域の間＝クロム・ディザスターと呼ばれる強化外装。実質すると、対象アバターのHPを食い取る《体力吸収(ドレイン)》や、敵の攻撃を事前に洞察・回避する《未来予知》など強力なアビリティが使用可能となる。しかしその所有者は、クロム・ディザスターに精神を汚染され、完全に支配される。
- スターキャスター＝クロム・ディザスターが持つ大剣のこと。凄々しい形状をしているが、本来の姿は、その名の通り、星のように輝く麗かな名剣である。

- ISSキット＝ISSモード練習(スタディ)キットの略。ISSモードとは《インカー・ネイト・システム・モード》のこと。このキットを使えば、どんなデュエルアバターでも④心臓システムの使用可能となる。使用中は、アバターのいづれかの部位に赤い顔が張り付き、④心臓の象徴である《通称光(オーバーレイ)》が、見えないオーラとして放出される。

- 《七の神獣(セブン・アークス)》＝《知識世界》に7つある、星像の強化外装のこと。内訳は、大剣《ジ・インパルス》、短剣《ザ・テンペスト》、大盾《ザ・ストライフ》、形状不明《ザ・ロギン》、長刀《ジ・インフィニティ》、全身鎧《ザ・ディスティニティ》、形状不明《ザ・フラクチュエーティング・ライト》。

- 《心臓》＝デュエルアバターの礎となる④属性の根。その心の根を包む魂のこと。その根が生まれれば魂で包みこいずれば、メタルカラーのデュエルアバターを生み出すという。

- 《人造メタルカラー》＝対象者の心の根から自然に生まれる特性ではなく、第三者によって《心臓》をより深くさせ、人為的に誕生させたメタルカラーアバターのこと。

- 《無限E.K.》＝無限エネミーの略。無限対戦フィールドに於いて、強力なエネミーによって対象のアバターが死亡し、一定時間経過後再び復活してもまたそのエネミーに殺される、その無限地獄に陥ってしまうこと。

accel World 16

加速世界 16

加速世界 16

加速世界 16

永遠の天空が、一直線に引き裂かれた。

東京ミッドタウン・タワー上層階から発射された漆黒の虚無属性ビームは、地面と平行する角度を保ったまま伸び続ける。パワーをまったく衰えさせずに頭上を通過し、遠く北東の空へと消えていく。

もしあのビームが加速世界の果てまで到達したら、そこで何が起きるのだろうか。音もなく消えるのか、大爆発を起こすのか……それとも世界の壁にすら大穴を開けるのか。

そんなことを考えながら、バーストリンカー《マゼンタ・シザー》こと小田切累は、視線をビームの発生源へと戻した。

累が腰を下ろしている場所は、港区第一戦域の大型商業施設、赤坂サカスの中央部にある広場だ。南西に八百メートル離れたミッドタウン・タワーでは、現在、黒のレギオンの面々が《ISSキット本体》と戦っている。現場を直接見たわけではないが、累の胸部装甲内に寄生するキット端末を通して、本体の怒りの波動が伝わってくる。

……いや。本体が発する怒りや憎しみは、累たちキット・ユーザーが自分の心から生み出し、少しずつ蓄積させたものだ。だからこの黒い波動の何パーセントかは、もともと累自身の怒り

であり憎しみだったと言える。

古代ギリシアの哲学者アリストテレスは、怒りと憎しみの違いについてこう説いた。

怒りは、自分または自分を含むものに対する仕打ちから生まれる。怒りは苦痛を伴い、時を経てばいつか癒される。

しかし憎しみは、自分と直接のかかわりがない原因からも生まれる。それゆえ憎しみに苦痛は伴わず、それゆえ時によっては癒されない。

累は、力で弱者を虐げるバーストリンカーに対して怒り、それを許す加速世界のシステムを憎んだ。

デュエルアバターは、心の傷を鋳型として生まれてくると言われる。だから姿かたちや能力は千差万別、しかしポテンシャルは皆おなじなのだとも。

たわごとだ。デュエルアバターの強さや見た目に絶対的な不平等が存在することは、あらゆるバーストリンカーが知っている。多くの者は、その不平等が見えないふりをしているだけなのだ。

黒のレギオン《ネガ・ネビュラス》のメンバー、ことに黒の王ブラック・ロータスと幹部である四元素は、累にとつては加速世界の不公平性を象徴する者たちだった。雄々しく、美しく、清らかな外見。幾つもの二つ名を献ぜられるほどの戦闘力。六大レギオンに叛旗を翻し、難攻不落の帝城に挑み、一度はレギオンを壊滅させるも再び甦ったという物語性すらも、彼女たち

が《選ばれし者たち》である印だと思えた。

累は、これまで黒の王や四元素と戦った経験はなかった。だから、アリストテレスの言葉に従えば、彼女たちに感じているものは怒りではなく憎しみだということになるのだろう。時がどれほど流れようと癒されない、呪いにも似た感情。

しかし今日、累はとうとう黒のレギオンと相まみえた。同志である十三人のISSキット・ユーザーとともに無制限中立フィールドで彼らを待ち受け、持てる力の全てを振り絞って戦いを挑んだ。

そして、負けた。正直なところ、勝負にすらならなかった。

ISSキットは、装着した者に、近接技《ダーク・ブロウ》と遠隔技《ダーク・ショット》を与える。どちらもオールマイティな虚無属性攻撃であるうえに、尋常な手段では防衛不能の心意技だ。

この二つの力を会得すれば、少なくとも戦闘力に於ける不平等は消滅する。強者の餌食になるために生まれてきたような非力なデュエルアバターが、純色の七王たちのレギオンメンバーとも対等以上に戦えるようになる。そのはずだった。

けれど、黒の王と四元素の力は、累の予想を遥かに超えていた。ダーク・ブロウは躲かれ、ダーク・ショットは弾かれ、ただの一撃もまともに当てることができなかった。

幹部たちだけではない。ネガ・ネビュラスの若手メンバーであるシルバー・クロウ、ライ

ム・ベル、そしてシアン・パイルの三人も、数で勝るキット・ユーザーを相手に一歩も引かず、全身ぼろぼろになりながら奮戦した。ISSキットの支配から脱したシアン・パイルに至っては、自ら編み出したのであろう心意の剣で、累が近接型相手なら絶対の自信を持っていたアビリティ《遠隔裁断》を正面から打ち破ってみせたほどだ。

そして、累に更なる衝撃を与えたのは、突如として戦場に乱入してきた超大型神獣級エネミー《大天使メタトロン》のレーザー攻撃を、シルバー・クロウがその身を盾にして防ごうとしたことだった。黒のレギオンだけではなく、累たち十四人までも庇って。

気がついた時、累はレーザーの余波が作り出した炎の海に踏み込み、クロウの両肩を支えていた。

胸に寄生するISSキットから、目の前の小柄なデュエルアバターを破壊せよという命令が止めどなく流れ込んできて体が二つに割り砕かれそうだったが、それでも累はクロウを支え続けた。あの瞬間、累は自分の負けを悟った。

——いや。

本当は、こうなることを数日前から予感していたのかもしれない。世田谷エリアで、領土も持たない泡沫レギオンの《プチ・パケ》を護ろうとするシルバー・クロウと戦って敗れた、あの時から。

数秒前に頭上を横切っていった漆黒のビームは、ミッドタウン・タワー上層部に潜むISS

キット本体が発射したオリジナルのダーク・ショットだ。威力は、端末ユーザーが撃つその数十倍にも達する。直撃されればどんなデュエルアバターだろうと瞬時に消滅する、加速世界最強最悪と言っている攻撃。

しかし、黒の王たちは負けないだろう。胸に寄生する端末を通して、累はキット本体の怒りや憎しみのみならず、深い恐怖をも感じている。魂なき悪意の塊だと思っていた本体が、恐れ、怯え、震えているのだ。

——結局、私のしたことに意味はなかったのだろうか。ただ加速世界に混乱を招き、憎しみや悲しみを広げただけだったのだろうか……。

そんなふうに自問しながら、累はもう一度後ろを見た。そこには、累がキットを分け与えた、いや寄生させた十三人ものバーストリンカーたちが、力尽きたように座り込んでいる。

サカス広場後方にそびえる放送局ビルにはポータルが設置されているが、ミッドタウンからここまで一キロほど歩いてきたあと、すぐには離脱せずに黒のレギオンの戦いを見守ることにしたのだ。

と言っても、仲間たちのアイレンズは虚ろに光を失い、真上を通過したビームにもほとんど反応しなかった。

ISSキットは、大きすぎる力を与える代償として、心を奪う。装着者は感情の動きが鈍くなり、機械的な怒りと憎しみだけに衝き動かされるようになる。恐ろしいのは、キットの影響

が生身の体（わらわ）にまで及ぶことだ。加速中ほどではないが、現実世界で怒りっぽくなったり気鬱（きふつ）になったりという症状が確認されている。

もともと情動の希薄（きはく）な累（つみ）はキットの干渉（かんしょう）に耐性（たいせい）があったようだが、仲間たちは周囲（きゆう）に隠（かく）せなレベルで人格（じんかく）が変化（へんか）したはずだ。そのせいで友情（ゆうじょう）を失（う）ってしまった者（もの）もいるかもしれない。彼（かれ）らの大部分（たいてい）は、自ら望（み）んでISSキットを受け入れたが、中には累（つみ）がハサミでアバターの装甲（さうこう）を切り開（ひら）き、むりやりキットを寄生（かじ）させた例（れい）もある。

そうしてやる（や）ることが彼（かれ）らのためなのだ、と累（つみ）は自分に信じ込（こ）ませてきた。強者（きやうしや）にポイントを搾取（さくしゆ）され、単なる餌食（えきじき）として加速世界（かすくせかい）から消（き）えるくらいなら、キットの干渉（かんしょう）など大（おほ）した問題（もんだい）ではない、と。

だが――。

今日の戦（いくさ）いで、累（つみ）はISSキットの……《与（よ）えられた力（ちから）》の絶対的（ぜったてき）限界点（げんがいてん）を思い知らされた。ダーク・プロウとダーク・ショットは強力（きやうりき）な技（わざ）だ。しかし、それを使う者（もの）の心（こ）までは強くしてくれない。むしろ、心の力（ちから）は、キットを受け入れる前（ま）よりも削（く）がれてしまうのかもしれない。だから、累（つみ）たちはネガ・ネビュラスに勝（か）てなかった。

黒（くろ）の王（わう）や四元素（よんもん）も、最初（さいしょ）から強（きやう）かったわけではないのだ。彼女（かのう）たちは敗北（ばいへく）から学（まな）び、膨大（ぼうだい）な努力（effort）を積み重ね、自分（おのれ）の中（うち）にあった力（ちから）を見出（みだ）し磨（ひ）き上げた。

もちろん、ランダム性（ランダムせい）という名の不平等（ふびんどう）に愛（あい）された者（もの）たちではあるだろう。しかしそれは、

ハイランカーとなった今では些細な要素なのだ。逆に言えば、どんなバーストリンカーにも、どこまでも強くなる機会は与えられている。まさにいま、その途上にいるシルバー・クロウのように。

加速世界唯一の完全飛行型と言われる彼は、最も運命に——BBシステムに愛された者だと思っていた。けれど、恐らくそうではなかった。

クロウは、飛ぶこと以外には何もできない、重なデュエルアバターなのだ。飛行能力の様々な攻略法が編み出されてからは、数多の挫折を味わったはずだ。

なのに彼は挫けなかった。自分の心が生み出したアバターを信じ、たった一つの力を磨き抜き、神獣級エネミーとすら正面から向き合えるほどの強さを得た。

シアン・パイルもそうだった。中距離貫通武器を持つ近接重量型という矛盾を抱えて生まれ、多くの壁に突き当たりながらも挫けずに乗り越え続け、ついには己が心の深奥から堂々たる剣を引き抜いて見せた。累のハサミは、パイルの剣を百回以上も切り刻んだが、とうとう砕くことはできなかった。

彼らの強さは、黒の王たちが彼らを正しく導いた証だ。そしてそれはまた、黒の王たち自身の強さをも証明している。ISSキットという借り物の力で仲間を増やし、望みを実現しようとした累とは根本的に違う。

もしISSキット本体が破壊され、全てのキット・ユーザーの持つ端末も消滅すれば、累

がバーストリンカーになってから今日までの間にしてきたこと、見てきたもの、考えたことは、あらゆる意味を失ってしまうのだろうか。加速世界にかりそめの公平性を望んだことすらも、愚かな妄想でしかなくなってしまうのだろうか。

……否。

それを決めるのは、自分自身だ。敗北、失敗、過ちの中にさえ、何か価値あるものを見つけ
ることはできる。あの銀色の鴉なら、きっとそう言うだろう。

「……………アボ」

累が小声で呼びかけると、すぐ隣に転がる小さな球体——《アボカド・アボイタ》の本体が、
「ころろ」とかすかな声で応じた。累とは違う理由だろうが、十三人の仲間の中では最も自我
を残している異形のアバターを両手で抱え上げ、膝に乗せて呟く。

「いつか、もう一度、アイツらに会いに行こう。ワタシたちがしてきたコト……しようとした
コトの意味を、知るタメに」

そして累は、ISSキット本体が破壊されるその瞬間を、静かに待った。

「あれは……いったい……」

黒雪姫は、力の抜けた両腕で懸命に体を起こしながら、掠れた声を響かせた。

東京ミッドタウン・タワー四十五階。広大なフロアの南端では、直径十メートルにわたって大理石の床が真っ赤に溶解し、マグマの沼を作り出している。

盛んに炎と熱気を噴き上げる沼に半ば沈むのは、漆黒の地球塊。マグマの高熱で焼け焦げ、ひび割れるそれこそが、加速世界に大いなる混乱を招いた元凶——ISSキット本体だ。

いまだ多くの謎を残す眼球型オブジェクトは、恐るべき威力のダーク・ブロウ、ダーク・ショットを連発し、黒雪姫たちを全滅の際まで追い込んだ。しかし、四禁宮謡／アーダー・メイデンの《破壊の心意》が生み出したマグマに灼かれ、ようやく力尽きようとしている。半ば以上閉じられた瞳孔はすでに光を失い、眼球を護っていた肉質装甲も全て焼け落ちて、仮に体力ゲージが見えれば残量数ドットというところだろう。

だが、黒雪姫も、すぐ近くで同じように体を横たえたままの倉崎楓子／スカイ・レイカーと氷見あきら／アクア・カレントも、キット本体からは視線を外していた。見ているのは、フロア左側の、何の変哲もない白亜の壁。その一箇所が、すすけたように黒くなっている。

ほんの数秒前、キット本体から細い光線が発射され、壁を貫いて——正確にはすり抜けて、南の方角へと消えたのだ。

攻撃ではなく、単なる情報伝達のための通信ビームだったように思えた。にもかかわらず、赤い光のラインを見た瞬間、黒雪姫の全身は氷よりも冷たく痺れ、感覚を失った。

ブラック・ロータスとして加速世界に生を受け、はや七年が経つ。その間に、理解を遥かに超える現象や身が疎むほど恐ろしい存在に再三ならず遭遇した。しかしISSキット本体からわずかに三秒足らず照射された通信ビームは、かつて眼にしたいかなるモノよりも黒雪姫を深く戦慄させた。

悪意。

あの光線がいくさへか伝えたのは、ISSキット本体の中に溜め込まれていた、膨大な量の悪意そのものだった。全てのバーストリンカーを傷つけ、虐げ、破壊するために精製された、純粹なる負の心意エネルギー。

心意システムは、対戦格闘ゲーム《ブレイン・バースト》に於ける最強の力だ。限界まで研ぎ澄まされたイマジネーションがあらゆる事象を上書きし、多種多様な奇跡を引き起こす。しかし、システムと名付けられている以上、そこにも理による制限は存在する。

曰く、アバターの属性と相反する心意技は習得できない。

曰く、技が強力になるほど激しい消耗をもたらす。

曰く、濫用すれば増大する心の闇に引き込まれ、自分を失う――。

つまり、ひとりのバーストリンカーが生み出せる心意エネルギーには限界があるのだ。加速世界全体を破壊するほどの力を求めても、個人の心の容量では、そこまでのエネルギーに耐えられない。

黒雪姫が知るなかで最強の《破壊の心意》使いは《儚き永遠》こと白の王ホワイ・コスモスだが、彼女でさえ対戦ステージの三分の一を破壊するために、三十秒をかけて十数回の攻撃を行わねばならなかった。同じ面積をたった一撃で焼き尽くした大天使メタトロンのレーザー攻撃には遠く及ばない。すなわちそれが、個人の心意技の限界というわけだ。

加速研究会は、その限界を、ISSキットという新たなシステムによって打ち砕いた。

何十人ものバーストリンカーに同一の心意技を与え、ひとりひとりが心に抱く怒りや憎しみをキット本体に集積、融合させることで、かつて加速世界に存在したことのない規模の《破壊の心意エネルギー》を生み出したのだ。その恐るべき威力は、キット本体との戦いで黒雪姫、楓子、あきらが行動不能にまで追い込まれた事実が証明している。もういちど先刻のダーク・シヨットを中和しろと言われても、絶対に不可能だ。

幸い、三人は後方の謡を辛くも守り抜き、謡の《炎の舞》によってキット本体はほぼ完全に破壊された。

だが、研究会の策謀は、ここで終わりではなかったのだ。瀕死の本体から発射された、赤い

光線。あれこそ、本体に溜め込まれた破壊の心意そのものだった。つまり、ISSキットすらも手段に過ぎなかったということだ。眼球の中で精錬された純粹かつ膨大な闇のエネルギーは、加速世界のどこかに転送され——そこでまた、何かが起きる。より悪く、より恐ろしい、何かか。

「……………ハルユキ君……………」

黒雪姫は、我知らずたったひとりの《子》の名を呼んでいた。

有田春雪／シルバー・クロウは、加速研究会副会長を名乗るブラック・バイスに拉致された赤の王スカーレット・レインを追ってこのミッドタウンから飛び去った。彼ならば必ずニコを取り戻し、無事に帰ってくると確信しているが、ブラック・バイスもいまだ底が見えない敵だ。キット本体から光線が発射された方角と、バイスが逃亡した方角がともに港区エリアの南側だったことも気にかかる。

クロウを追いかけたシアン・パイル及びライム・ベル、そしてアルゴン・アレイを追撃したブラッド・レパードと合流できていればいいのだが——。

黒雪姫がそこまで考えた時、後方で軽い衝撃音が響いた。

素早く振り向くと、白亜の床に膝を突く小柄な姿が眼に入った。《劫火の巫女》アーダー・メイデンだ。黒雪姫の隣に倒れ込んでいた楓子が、か細い声で名前を呼ぶ。

「ういうい！」

空色のアバターは懸命に立ち上がろうとするが、ダーク・シヨットに直撃された両足は膝下から欠損し、愛用の車椅子も遠く離れた場所で横倒しになっている。黒雪姫も、同様に両足両足の先端を砕かれ、容易に体を起こせない。

「私か」

と短く言ったのは、三人の中では比較的傷の浅いあきらだった。ふらつきつつも立ち上がると、全身にまとう流水装甲を両足に集め、フロアの後方へ滑走していく。力尽きた様子の巫女アバターを抱き上げ、車椅子のところに寄り道してそれも引き起こすと、帰りは歩いて戻ってくる。

ようやく立つことに成功した黒雪姫は、ぼろぼろに刃毀れた右手で楓子を助け起こすと、あきらが運んできた車椅子に座らせた。

「ありがとう、ロータス、カレン」

礼を言った楓子は、あきらから謡を受け取り、膝の上でしっかりと抱いた。巫女フェイスマスクを覆っていた能面型の追加装甲はすでに解除されているが、つぶらなアイレンズに光はない。大技を——しかも第四象限に属する大規模な破壊の心意技を発動させた影響で、擬似的な《零化現象》に見舞われたのだろう。

零化だけならいざれ回復するはずだが、ここから負の心意の《逆流現象》を引き起こす危険もある。同じことを考えたのか、楓子は謡の顔をそっと撫でると、優しく囁きかけた。

「……頑張ったわね、ういうい。いまはゆっくり休んで……。大丈夫、あなたが眼を覚ますまで、わたしたちがずっと傍にいますからね……」

その声が聞こえたのか、巫女の白いフェイスマスクが、仄かに和らいだ気がした。黒雪姫はあきらと顔を見合わせ、微笑みを交わすと、視線をフロアの南端に向けた。

謎の心意技が停止しても、マグマは高熱を保ったまま鈍い赤色に輝いている。その中央に埋まるISSキット本体——肉質装甲が全て燃え尽きたので本体の本体、ということになろうかは、黒真珠のようだった光沢を失い、今や消し炭の塊だ。

実際、本質である負の心意エネルギーを全てどこかに転送してしまったので、あの黒い球体はもはや単なる抜け殻でしかないのだろう。気になるのは、本体に寄生させられていた赤の王レッド・ライダーの複製体が口にした言葉だ。

エネミーでも、強化外装でもない。あれは恐らくデュエルアバターだ。

赤の王は、確かにそう告げた。

ISSキット本体とだけ呼ばれていた漆黒の巨大眼球がもし真にデュエルアバターであるのなら、あれ……いや《彼》または《彼女》は本当の名前を持っているはず。そして、あの巨大なアバターを分身とするバーストリンカーが、現実世界のどこかにいるはずなのだ。

「……無制限フィールドで、アバターネームを確認する方法が、何かなかったかな……」

黒雪姫が呟くと、傍らに立つあきらがそっとかぶりを振った。

「ない……はずなの。……それに、私もまだ信じられないの。あれが、私たちと同じデュエルアバターだなんて……」

「うむ……。——だが、それを確かめる方法なら、一つだけある」

言い切ると、今度はあきらまもなく、車椅子に座る楓子も頷く。

潮死の様相であるISSキット本体を完全に破壊した時、もしそれがエネミーでもオブジェクトでもなくデュエルアバターならば、消滅したのちに《死亡》マーカーが出現するはずだ。また、加算されるバーストポイントの数値も判別の一助となる。

仮にマーカーが現れ、キット本体がデュエルアバターだと確定した場合、無制限フィールドのルールが適用されて六十分後に蘇生してしまうことになるが、本質である心意エネルギーはいずれこへか転送されたあとなので、復活するのは無力な抜け殻でしかないのだろう。

「……本当なら、あれをここまで追い込んだメイデンがとどめを刺し、ポイントを得るべきだろうが……」

そう言いながら、楓子に抱かれる謡に眼を向けたが、まだ意識が戻る様子はない。楓子は顔を上げると、淡い微笑みとともに応じた。

「あなたが終わらせて、ロータス。メイデンも、きつとそう言うわ」

「私もそう思うの」

あきらまも同意を示すので、黒雪姫はやむなく頷いた。ようやくアバターの四肢に力が戻って

きたし、これ以上話し続ける時間的猶予もない。四人がミッドタウン・タワーに突入したのは、ISSキット本体を破壊するためではなく、本体に呑み込まれているポータルから現実世界に戻ってニコのニューロリンカーの直結ケーブルを引き抜くためなのだから。

尖端が砕けた右足で、黒雪姫が一步前へと踏み出した――

その時。

幾つかのことが、立て続けに起きた。

最初に、強烈極まるブレッシャーが、半ば物理的な衝撃波となつて南方向から襲いかかってきた。反射的にISSキット本体を見たが、発生源はそこではない。フロアを取り囲む壁の向こう、本体から赤い光線が照射された、まさにその方向だ。

「っ……………!?」

新たな強敵が現れたのか、と身構えかけてから気付く。ブレッシャーの源は、黒雪姫たちがいるミッドタウン・タワーではない。遙か遠くで何者かが解き放った爆発的な心意エネルギーが、あたかも空振現象のように伝わってきたのだ。

しかし、だとすれば、いったい誰がこれほどの……火山の噴火にも匹敵するであろう圧力波を発生させたのか。

黒雪姫たちは、一瞬ではあったが思考停止状態に陥り、ただ呆然と南の壁を見やった。それゆえに、気付くのが遅れた。

死に瀕し、もはや何もできないとばかり思っていたISSキット本体が、突如、カッと眼を開いた。露出した血の色の瞳孔が内側から破裂し、飛び散るどす黒い粘液の中から、何か小さなものが猛烈なスピードで黒雪姫に飛びかかってきた。

極細の触手を、鋼鉄の探針のように何本も突き出す、小型の球体。

ISSキット端末。

「サッチャン!!」

楓子が掠れた悲鳴を上げ、あきらが右手を振りかぶり、黒雪姫も反射的に左手の剣を振り抜いた。

だが、先端が十五センチも欠け落ちた剣は、キットの触手をほんの一本断ち切ることにしかできず。

次の瞬間、ブラック・ロータスのひび割れた胸部装甲の各所に、漆黒の針が次々に突き刺さった。

「災禍の鎧……マークⅡ……」

自分の口から零れ落ちたその言葉を打ち消そうとするかのように、ハルユキは何度もかぶり



を振り続けた。

加速研究会による幾つもの策謀——ISSキットの感染拡大、人造メタルカラー計画、赤の王スカーレット・レインの拉致、それらの最終的な目的は新たな（鎧）の創造。数日前に、アクア・カレントこと氷見あきらが推察したことではある。

しかしそれはハルユキにとって、あまりにも現実感の希薄な話だった。最初の（鎧）である《クロム・ディザスター》は、加速世界の黎明期に誕生し、六人ものバーストリンカーに受け継がれることで——その六人目はハルユキ自身なのだが——力を増してきた、呪いの強化外装だ。積み上がった伝説の数だけなら、もしかしたら帝城の超級エネミー《四神》にすら並ぶかもしれない。

そのような代物をわずか数週間という短期間で作り出すなど、いかに加速研究会といえども不可能だとハルユキは感じた。いや、不可能であって欲しいと願ったのだろうか。加速世界に新たな脅威が生まれることを恐れただけではなく、いつときは六代目ディザスターであった者の、いわば矜持として。

だが――。

いま、ほんの十数メートル離れた場所に屹立し、異様な雄叫びを曇天に向かって放ち続ける鋼鉄の巨人は、機械と生物が融合したフォルムといい、全身にまとう禍々しいオーラといい、それがクロム・ディザスターに酷似する存在であることはもう否定できなかった。

ハルユキの左右に並ぶタクム、チュリ、パドさん、そしてニコも、あまりの出来事に言葉もないようだ。逃げるか攻めるかをすぐにでも決断するべき場面のはずだが、誰もが身動き一つできずに立ち尽くしている。

と、不意に。巨人が猛々しい咆哮を停止させ、高々と突き上げていた両腕をゆっくりと下ろした。

『ディルルル……』

前世紀の内燃機関を思わせる唸り声を漏らしながら、体の向きを変えていく。流線型をした胴体の上部では、巨大な単眼が血の色の光をぎらぎらと放射している。ISSキットの眼光を思わせる、底無しに飢えた冷たい輝き。

「……ど、どうするの……」

ハルユキのすぐ左側で、チュリが呟いた。

震え声ではあったがそのひと言で金縛りが破れ、ハルユキは深く息を吸った。黄昏ステージの冷たい空気が仮想の肺を満たし、わずかながら思考力を回復させる。

「……戦うしかない」

ハルユキが掠れた声で宣言すると、チュリは細身のアバターを強張らせたが、彼女からも他の三人からも反論の言葉はない。皆、ハルユキがそう決断したわけを理解しているのだ。

災禍の鎧のオリジナルであるクロム・ディザスターは、三つの要素から成り立っていた。

まず、鎧を装着し、力を得ると同時に鎧を育ててきた歴代の装着者たち。

次に、鎧に蓄積された負の心意の暗闇から生み出された疑似知性体、《獣》。

そして最後に、依代となった強化外装、《七の神器》の六番星たる白銀の鎧《ザ・ディステイニー》。

加速研究会が新生させたマークⅡも、同様に構成要素は三つだ。

まず装着者は、アルゴン・アレイが《心傷殻理論》に基づいて誕生させたのであろう謎多きメタルカラー、ウルフラム・サーベラス。

そのサーベラスを支配しているのは、空から降ってきてコクピットに入り込み、マークⅡの操作権を奪った出所不明の赤い光。

そして、実体としてのマークⅡの依代となったのは、赤の王スカーレット・レインが長い時間と膨大な努力を注ぎ込んで育ててきた強化外装《インビンシブル》——。

万全を期すならば、ここはいちど撤退し、ミッドタウン・タワーにいるはずの黒雪姫たちと合流してから総力戦を挑むべきだろう。しかし残念ながら、その余裕はない。なぜなら時間を空ければ、ニコの分身にも等しい強化外装をこのまま失ってしまう可能性が高いのだ。

インビンシブルだけは、何かなんでも取り戻さねばならない。ニコは、知り合ったばかりのアッシュ・ローラー／目下部輪と、ネガ・ネビュラスの四元素であるアクア・カレント／氷見あきらのために、友達として今日の作戦に協力してくれたのだから。

ハルユキは、ちらりと右を見た。すると、同時に顔をこちらに向けたニコと眼が合った。赤の王が何かを言おうとする前に、自分からもう一度、きっぱりと宣言する。

「今ならまだ、インビンシブルを取り返すチャンスはある。いや、必ず取り返す。そのために、あいつと戦って、勝つ！」

するとニコは、その向こうにいるパドさんと同時に、灰かな苦笑の気配を漂わせた。小さな肩をすくめ、頷く。

「ま、ここまで来たら行くとこまで行くっきやねーよな。いいぜ、今日のシメにあのデカブツぶっとばして、でっけー花火打ち上げようぜ」

「K」

という声は、もちろんパドさんのものだ。ハルユキの左側で、タクムとチユリも意を決したように応じる。

「解ったよ、ハル。確かに、あれが災禍の鎧とよく似たものなら、時間が経てば経つほど強くなってしまうかもしれない……戦うなら、いまだね」

「よおーし！ あたしが一発、ガツーンとぶちかまして……」

「いや、チーちゃんには大事な役目があるから、それまで後ろに下がって」

「ま、またあ!? あたし、そんなのばかりじゃない！」

幼馴染たちの息の合ったやり取りに、ハルユキは鏡面ゴーグルの下ではんの少しだけ口許

を緩めた。

六代目クロム・ディザスターとして、自分の内的世界でひとり《鏡》の支配に抗おうとした時とは違う。いまは、周りに信頼できる仲間たちがいる。それに、現在位置こそ南北に三キロメートル以上も離れてしまっているが、黒雪姫、楓子、謡、あきらの四人とも心は繋がっている。必ず。

ハルユキが、強く両拳を握り締めた、その闘志に感応したかのように。

いままで、あたかも初めて電源を入られたロボットのように、如く単眼をきよろきよろと動かしていたマークⅡが、ぴたりと動きを止めた。

巨体を更に三十度ほど回頭させ、ハルユキたち五人と正対する。装甲の各所にあるエラ状のスリットからどす黒い蒸気を排出しつつ、低い唸り声を轟かせる。

『デイル……………ルルルル……………』

無機質な動きや気配からして、胴体の中に取り込まれているはずのウルフラム・サーベラスの意識は失われたままだしい。そもそも、災禍の鎧マークⅡが覚醒する数分前に、ハルユキの知るサーベラスⅠは強制的な人格交代によって、サーベラスⅢにアバターの操作権を奪われていたのだ。

Ⅲことダスク・テイカー／能美征二の複製人格は、必殺技《魔王徵発令》によってニコから強化外装の五つのパーツのうち四つまでを奪ったものの、その直後に北の空から降り注いだ

赤い光に撃たれ、異様な悲鳴を発してからいきなり沈黙……あるいは消滅してしまった。

そのままサーベラスⅠの意識も戻っていないのだとすれば、いま鐘マークⅡを動かしているのは、赤い光によって注入されたエネルギーそのものだということになる。

クロム・ディザスターに宿っていた《獣》ですら、単体でアバターを操作することはできなかったのだから、マークⅡに注がれたエネルギーは総量も、またその性質に於いても、端倪すべからざる代物なのだろう。

だが、いかに内包するパワーが大きくとも、それがイコール強さとはならない。生まれたてで動きがぎこちない今ならば、勝機はある。

「……インピンシブルが元になってるんだから、あいつも遠隔型のはずだ。思い切って足許に貼り付いて、まずは動きを封じよう。チュは、オレたちがあいつを惹き付けてるあいだに、南のゲートから建物内に退避してくれ」

ハルユキが早口に言うのと、四人はすかさず頷いた。チュリももう文句は言わない。ライム・ベルの持つ能力が、インピンシブルを取り戻すうえで最も重要な役割を果たすことを、彼女もちゃんと理解しているのだろう。

いや。そんな推察はおこがましいというものだ。かつてダスク・テイカーに飛行アビリティを奪われた時、ハルユキには思いもよらぬ機知と頑張りによって翼を取り戻してくれたのは、チュリなのだから。

頼りにしてるぞ、という意思を伝えるべくライム・ベルの右腕に軽く指先を触れさせてから、ハルユキはありったけの精神力を奮い立たせ、鋼鉄の巨人の単眼を睨み返した。

マークⅡの頭頂高は六メートルを超える。巨獣級エネミーにも等しいサイズだが、外見から確認できる武装は、両腕に装着された大口徑レーザー砲だけだ。もとはインピンシブルの主砲だっただけに威力は侮れないものだろうが、発射前に一秒ほどのチャージ時間があるうえに、連射も苦手なはず。敵が攻撃態勢に入った瞬間にダッシュして巨体の真下を取り、まずは脚を潰す。

地の利もハルユキたちにある。現在地は、無制限フィールドの旧東京タワーから南西方向に約二キロ離れた場所に建つ、学校ふうの建物の中庭部分だ。

白亜の神殿と化した校舎に四方を囲まれ、戦場は短辺三十メートル長辺五十メートルに制限されている。巨体かつ遠隔型のマークⅡには窮屈なサイズだろう。敵に密着して主砲の発射を妨げると同時に攻撃し続ければ、勝機を見出すことは可能。

勝つのだ。必ず。現実世界に戻ってから、みんなと笑ってハイタッチするために。

マークⅡの巨大な単眼レンズが、内部の暗闇に赤黒い光を瞬かせた。

「……来る！」

タクムが叫ぶと同時に、ハルユキは低く身構え、突進のタイミングを計った。

巨人が、だらりとぶら下げていた両腕をゆるゆると持ち上げる。同時に、口径十五センチは

あろうかという主砲の基部で無数のスリットが口を開け、どこか生物的なエネルギーチャージ音を響かせ始める。

その時。

ハルユキは、マークⅡの両腕の周囲で、背景の校舎や夕空が陽炎のように揺れるのを見た。スリットから排出される熱気のせいかな。

違う。あれは空間そのものが不安定になっているのだ。あまりに高密度なエネルギーの集中が、加速世界にひずみを生じさせている。四神スザクの火焰プレスや、メタトロン第一形態の即死級レーザーが発射される寸前にも見た……しかし、より大規模な時空の歪み。

まさか、あれらを超える威力の攻撃が。

ハルユキがそこまで考えたのと同時に、背中に装着された新たな翼、強化外装（メタトロ・ウイング）が電撃にも似た激しさでピリッと震えた。

「……みんな！」

ハルユキは、両腕を左右に広げながら、無我夢中で叫んだ。

「綱（ツナ）まって!!」

少し前に口にしたばかりの作戦とまったく矛盾する言葉だったが、仲間たちの反応に躊躇いはなかった。瞬時に、タクムが右腕、バドさんが左腕でがっちりとはるユキの胴をホールドし、更に空いた手でチュリとニコを抱え込む。ハルユキも、自分の両腕で仲間たちを強く引き

寄せる。

マークⅡが構える主砲のバレルに満ちる闇が、赤黒く輝いた。

背中の翼をX字に展開させながら、ハルユキは大理石の地面を思い切り蹴り飛ばした。

体がわずかに浮いた瞬間、発生可能な推力の全てを解放する。アバターの金属装甲を軋ませるほどのパワーが、五人ぶんの質量をロケットの如く垂直上昇させる。

直後、マークⅡの二門の主砲から、ギエアアアア！という悲鳴じみた大音響とともに、濁った血の色の火柱が発射された。

二条のエネルギー流は、一瞬前まで五人が立っていた場所に突き刺さり。

そして、世界からあらゆる色彩が消えた。

永遠の夕焼けに染まる空も、加速研究会の本拠地であろう学校も、白い背景に黒で描かれた線画に変わる。その真ん中で、不吉な暗赤色に輝く半球だけが、どこまでも膨れ上がっていく。発射した鋼鉄の巨人をも呑み込み、一辺五十メートルの中庭からも溢れ出し、全力で上昇するハルユキたちの足許にまで迫る。

高熱や圧力は感じなかった。むしろ、凍えるような冷たさと、エネルギー球に引き込まれようとする強烈な重力をハルユキは意識した。少しでも推力を途切れさせたら喰われるという確信のもと、白黒のデッサン画に変じた空に向かって飛び続ける。

「が……学校が……！」



と叫んだのはタクムだった。ハルユキにはもう下を見る余裕はないが、恐らく、中庭を囲む校舎が崩壊したのだろう。

常識的には起こり得ないことだ。ハルユキたちがブラック・パイプ及びアルゴン・アレイと戦った学校は、これも信じがたいことではあるが全体がブレイヤーホームに指定されていて、すなわち破壊不能属性を持っている。教室と中庭を隔てる壁に小さな穴を開けるためにすら、ハルユキとタクムが全力の心意攻撃を何秒も連続させ、チュリの援護まで受ける必要があったのだ。

そんな構造物を粉碎するからには、マークⅡが発射したのは通常のエネルギー弾ではない。虚無属性の心意弾——つまり、ISSキット装着者たちが放つダーク・ショットと同種かつ、何十倍、何百倍も強力な攻撃だ。

「うお……おおおっ!!」

叫び声を振り絞りながら、ハルユキは必死の飛翔を続けた。

シルバー・クロウ本来の翼だけだったら、四人を抱えての全速上昇であつという間に必殺技ゲージを使い果たし、とうに虚無の爆発に捕まっていただろう。しかし、大天使メタトロンの本体を名乗る女性型エネミー——そんなものが存在するとは今日まで知らなかったが——から与えられた新たな翼の力もまた凄まじく、加速世界の重力と虚無属性エネルギーの吸引力に抗って、みるみる高度を上げていく。

高さ五十メートル、百メートル……百五十メートルを超えたところで、ついに冷氣と轟音、そして引力が遠ざかり、消えた。

「……もう大丈夫そうだが、クロウ」

ニコが囁き、

「THX」

パドさんも呟いたので、上昇スピードを緩める。念のため更に二十メートルほど飛んでからホバリングに移行し、おそろおそろ下方を眺める。

「う……………あ……………」

ハルユキの喉から漏れた声は、自分のものとは思えないほど囁れていた。

ようやく色彩が戻ったフィールドには、港区エリア南部の光景が広がっている。視界左、東側には国道一号線桜田通り。右の西側には首都高二号線の高架。それらに挟まれて建っていたはずの、加速研究会の本拠地と目された学校は——もはや存在しなかった。

代わりにそこには、直径百五十メートルに達しようというクレーター状の大穴が口を開けていた。かつて六本木ヒルズタワーから目撃したメタトロン第一形態のレーザーも同様の破壊を引き起こしたが、規模は更に大きく、しかも一筋の煙も立ち上っていない。地面はまるで神が大匙で抉ったかの如くゆるい曲面を描いて削り取られ、周囲から流れ込んだ空気が重々しい音を立てて渦巻いている。学校の一階部分にはティムされた騎士型エネミーが少なくとも一匹い

たはずだが、それすらも瞬時に消し飛んでしまったらしい、

クレーター周囲の道や建物といった地形を見た時、ちくりと記憶が刺激されるのを意識したが、その感覚も、灰色のクレーターのほぼ中央にまるで傷ついた様子もなく屹立する赤銅色の巨人を見つけた瞬間に消し飛んでしまった。

「手前エをあんだけの威力の攻撃に巻き込んで……ノードメなのかよ……」

ニコが、さすがに驚愕を隠せない声音で呟く。

仮に、砲撃の寸前に足許に潜り込むという最初の作戦を実行していたら、巨人は躊躇いなく自分の真下へ主砲を撃ち込み、いまごろハルユキたちは学校と一緒に塵にまで分解されていただろう。六十分後に蘇生した時、まだマークⅡが学校跡地に留まっていれば、再びの砲撃を受けて即死するという無限E・K状態に陥っていた可能性すらある。

そう、あれはもはやエネミーと呼ぶべき代物だ。しかも、巨獣級どころか神獣級、下手をするとその上の超級エネミー《四神》にすら匹敵するほどの。

「無茶苦茶じゃない……あんなの、どうやって……」

タクムに抱えられるチュリも、緑色の三角帽子を左右に振り動かしながらそんな言葉を漏らした。

いままで、数々の窮地で思わぬ機転を発揮してハルユキとタクムを驚かせてきた彼女だが、今回ばかりは破壊の凄まじさに吞まれてしまったようだ。ハルユキとても、翼を通して繋がる

メタトロンからの警告もあって咄嗟に離脱はできたが、ここからどう動いていいのかはまるで思いつけない。頭の芯が、完全に痺れきってしまったている。

だが、いつまでも上空に留まってもいられない。メタトロン・ウイングは相当に燃費がいいらしく、四人を抱えてホバリングしていても必殺技ゲージの減少は緩やかだが、それもいずれ尽きる。その前に作戦を立て直し、どこかに着地せねばならない。

戦慄に満ちた沈黙を破ったのは、ハルユキの右半身に密着するパドさんだった。

「まずは、あの主砲のリチャージ間隔を掴まないと」

「……そうですね」

すぐに、左側のタクムが応じた。

「あいつの武器は、見たところ両腕の主砲だけだ。リチャージに時間がかかるなら、発射した直後に貼り付けば……」

その提案に、ニコも力強く頷く。

「空に撃たせれば、爆発にも巻き込まれないしな。つうワケで……クロウ、次のレーザーを、何とか空中で躲してくれ」

「がんばって、ハル！」

とチユリにまで励まされれば、いつまでも怖じ気づいてはいられない。大きく息を吸い込み、答える。

「解った。ゆっくり近づくから、みんな、あいつの様子をよく見てて」

「任せろ！」

ビシッ、ビシッ、ビシッ

《視覚拡張》アビリティを持つニコが叫び、アイレンズをいっぱいに見開いた。意を決し、ハルユキはゆるやかな降下を開始した。きちんと秒数をかぞえていたらしいパドさんが、落ち着いた声でカウントする。

「さっきの主砲発射から、いま四十八秒……四十九、五十……」

ほぼ垂直に舞い降りるハルユキたちの高度が百メートルを切った、その時。

クレーターの中央に陣取るマークⅡが鋼鉄の巨体を大きく反らせ、深紅の単眼から発せられる飢えた視線で五人を射貫いた。

「五十七、五十八、五十九……」

——六十。

のタイムカウントと同時に、巨人は両腕を持ち上げ、致死の二連装砲でハルユキたちを照準した。

「ぐっ……！」

体の芯までも凍り付くような冷たい痛みにも、黒雪姫は喘いだ。

飛びかかってきたISSキット端末は、辛くも右手の剣でアバターへの接触を阻んでいるが、端末から伸びる十本以上の触手が、装甲のひび割れを貫いて内部に入り込みつつある。すでに何本かはアバター素体にも潜り込んでいるようだ。

《絶対切断》なる二つ名の由来となった剣が万全の状態ならば、たかが端末如き触れた瞬間に断ち切っているが、いまは本体との激戦でぼろぼろに刃毀れして本来の切れ味の半分も發揮できない。しかも小型の眼球はゴムのような弾力を持ち、どれほど刃を押しつけてもぐにやりと垂むばかりでとらえどころがない。

「ロータス！」

もう一度叫んだ楓子が、車椅子の上から左手を伸ばし、キット端末を引き剥がそうとした。少し離れたところにいたあきらも、駆け寄るべく水音を立てる。

しかし、二人に向けて、黒雪姫は鋭く叫んだ。

「待て！」

「えっ……!?」

びたりと動きを止めた楓子とあきらの顔に、まさかもう精神汚染が、と危惧するような表情が浮かぶので、すぐさま否定する。

「違う、私は大丈夫だ。ただ……こいつを通して、何かが聞こえる……いや、見えるんだ

「……」
 掠れ声でそう告げると、黒雪姫はゴーグルの下でアイレンズの下を閉じた。

音。でいる、でいる、でいる、という何とも名状しがたい、生物の呼吸音のような、機械の駆動音のような重低音がずっと遠くから届いてくる。

そして……光景も。窓のたくさんある白い壁に囲まれた、どこか学校を思わせる四角い空間が、ぼんやりと脳裏に映し出される。一瞬、懐かしさにも似た不思議な感覚を覚える。

梅郷中学校の中庭か、と思ったが前後左右が全て壁になっているのでどうやら違う。こんな場所は見たことも、行ったこともない……と考えた、その刹那――。

「……………!!」

黒雪姫は、驚愕のあまり、臉を閉じたまま思い切り奥歯を食い縛った。
 知っている。

四方を校舎の壁に囲まれた中庭。その中央に設けられた、祭壇型の噴水。加速世界の黄昏ステージに変貌してはいるが、このスケール感、この空気感は間違えようもない。

……………ここは……あの学校の。

愕然としながら、二階の窓ほどの高さにある視点から足許を見下ろした時、新たな衝撃が黒雪姫を見舞った。

横一列に並び、こちらを見上げる五つの小さな人影たち。その中の一人は、ひとときわ小柄な

真紅のデュエルアバターだ。そして隣に立つアバターの背中には、夕陽を受けて煌めく白銀の翼が――。

「――ロータス!!」

再び張り詰めた悲鳴が響き、黒雪姫はハッと両眼を見開いた。

幻の光景が消え去ると同時に、いつの間にか十センチの距離まで近づいているISSキット端末と目が合う。眼球に食い込んでいたはずの右手の剣は、わずか三本ばかりの触手を引っかけているに過ぎない。慌てて押しやろうとするが、触手がただ伸びるばかりで、漆黒の眼球は着実に接近してくる。

手を伸ばした楓子とあきらが、それぞれ数本の触手を握んで強く引つ張った。だが、キット端末は、まるで己が最後の一つでもあるかのような生存本能を見せて、じりじりと黒雪姫の顔に近付き続ける。限界まで開かれた深紅の瞳が、数センチ先で飢えた光を放つ。

その、虚ろな闇に満たされた瞳孔の奥に――。

黒雪姫は見た。銃身をXの形に重ね合わせる、二丁の拳銃の形をした光を。交差拳銃――赤の王、《銃匠》レッド・ライダーの紋章。

眼球が、ブラック・ロータスのゴーグルに触れようとする、まさにその瞬間。

瞳孔の奥で、二丁の拳銃が、ガシャッ! という決然とした金属音とともに角度を変えた。

銃身が水平に重なり合い、Xから一に変化する。直後、キット端末の深紅の虹彩が、灰色に光

を失う。

張り詰めていた十数本の触手がだらりと垂れ下がり、ブラック・ロータスの装甲から全て抜け落ちた。楓子とあきららが手を離すと、眼球はそのまま床に落下し、一メートルほど転がってから動かなくなつた。

「……危なかったわね」

楓子の言葉に、あきらも頷きながら少し責めるような声を出す。

「ちよつと心配したの。いつたい、何が見えたの？」

「あ、ああ……どう説明したものか……」

呟きながら、白雪姫は詰めていた長く息を吐き出した。顔を上げ、まずは床に転がる小型眼球を右足で粉砕してから、少し離れたところに鎮座するISSキット本体を見やる。

床のマグマはようやく冷えたようだが、元の大理石には戻らず、灰色のコンクリート状に固まっている。そこに下半分を埋めるキット本体は、焼け焦げた表面に無数の細かいひび割れが走り、小さな欠片を止めどなく零し続けている。

先刻、キット端末が飛び出した瞳孔の穴も広がり続けていて、その奥には周期的に脈動する清らかな青い光が見える。本体の内部に取り込まれている、ミッドタウン・タワーのポータルの輝きだ。

「……さつき私に寄生しようとしたキット端末は、『何か』とリンクしていたようだ。だがそ

れは、あの本体ではなかった……。ミッドタウン・タワーからずっと離れたところにいる何か……そして同じ場所に、ハルユキ君たちも……」

「えっ……!?」

驚きの声を上げると、楓子は車椅子の車輪を強く握った。

「つまり、鴉さんたちは、その何かと戦っているということ……? なら、早く助けに行かないと!」

「その前に、ISSキット本体を完全に破壊して、中のポータルから誰かが向こうに戻って赤の王のケーブルを抜かないとな」

あきらの指摘に、黒雪姫は少し考え、かぶりを振った。

「いや……その必要はなさそうさ。先刻、ハルユキ君の隣に、ニコの姿も見えた。無事にブラック・バイスから取り戻したんだ」

「そう……。よかった、さすが鴉さんですね」

楓子が、ほっとしたように微笑む。黒雪姫も頷き返したが、気にかかる点もある。

シルバー・クロウたち五人は、ISSキット端末とリンクする《何か》、恐らくはキット本体から転送された膨大な負の心意エネルギーが生み出した何かと対峙していた。その状況で、赤の王が強化外装《インピンシブル》を展開していなかったのはなぜだろうか。

どうあれ、あの場所に駆けつければ解ることだ。一瞬かいま見ただけだが、黒雪姫は正確な

座標を知っている。

「急いでハルキ君たちと合流しよう。だが、その前に……」

黒雪姫は、右手の剣を高く振りかぶりながら、ISSキット本体を見据えた。

心の中で、瀕死の巨大眼球に宿っているはずの古き友に語りかける。

——ライダー。

——さっき、交差拳銃のセーフティを発動させて、私を助けてくれたのはお前だな。我々が本体を破壊したら、全てのキット端末を無力化するという約束を守ってくれたんだな。

答える声はなかった。だが黒雪姫は、右手の二本指をキザな仕草で振りながら、愛馬に跨がっていずこへか去りゆく初代赤の王の後ろ姿を見た気がした。

——さらばだ、《BBK》……レッド・ライダー。

掲げた剣を後方に引き絞り、叫ぶ。

「《デス・パイ・ピアーシング》!!」

切っ先が折れていても必殺技は問題なく発動し、放たれた光の剣はISSキット本体を軽々と貫いた。

漆黒の眼球は、一瞬だけ内側に収縮してから、無数の欠片となって爆散した。天井まで届く開色の柱が屹立し、徐々に細くなって消える。ここまではデュエルアバターの死亡エフェクトに見えるが、まだ断定はできない。死亡マーカーが現れるか、否か。それでISSキット本体

の真実が明らかとなる。

しかし――。

続けて引き起こされた現象は、黒雪姫たちの予想とはかけ離れたものだった。

飛び散る黒い欠片の一つ一つが、空中にあるうちに赤色のリボンとなって解け、空気に溶けるように消えていく。リボンを織り成すのは、微細なパイナリコードの糸。

これは、デュエルアバターの――。

「……最終消滅現象……!?」

楓子^{フウコ}が押し殺した声を出し、あきらかに「……なの」と首肯した。

マーカールは現れなかったが、もはや疑う余地はない。ISSキット本体はデュエルアバター、いやバーストリンカーであり、黒雪姫の最終撃^げでバーストポイントがゼロになって、加速世界から永遠に消えた。すなわち、理由は不明ながら、本体が保有していたポイントは枯渇寸前の数値だったということになる。

赤いリボンの最後の一本が空気に溶けると同時に、澄み切ったブルーの輝^{かがや}きがあふれ出し、フロア全体を染め上げた。キット本体の内部に閉じ込められていたポータルが姿を現したのだ。脈動する青い光は、まるでこの場所に満ちていた瘴^{しやう}気を浄化する霊光^{れいこう}のようだ。

これで――。

先ほど黒雪姫に寄生しようとした最後の一つのみならず、マゼンタ・シザーやアボカド・ア

ボイダたち既存の装着者全てのISSキットが無力化され、精神干渉も断たれたはずだ。もちろん、現実世界の保健室に横たわる、アッシュ・ローラー／日下部輪からも。

キット本体がいったい何者だったのか、ポイントがどうして枯渴しかけていたのかという謎は残ってしまったが、疑問はひとまず措くことにして、黒雪姫は振り向くと言った。

「……レイカー、今すぐ《子》のところに駆けつけたいだろうが……」

すると、皆まで言うなとばかりに楓子がかぶりを振った。

「解ってるわ。まだ、わたしたちにはすべきことがあるものね。早く鴉さんたちの所に行って、なんだか解らないけど敵を倒して、みんなと一緒に帰りましょう」

決然としたその言葉に応えたのは、黒雪姫でもあきらまでもなかった。

「その通り……なのです。私もまだまだ、戦えるのです」

か細くはあるが、強い芯を感じさせる声の主は、楓子の両腕に抱かれる謡だった。黒雪姫が鋭く息を吸い込みつつ視線を向けると、巫女型アバターは再び光を灯したアイレンズでしっかりと見返してきた。

「大丈夫なのか、メイデン」

「はい。心意技を長く使ったせいで、少しだけ引きずりましたが……ローねえと、レンねえと、そしてフーねえが私を守ってくれたのです」

微笑むと、謡はゆっくりと両手を持ち上げ、自分を抱える楓子の体に回した。まさしく姉を

慕う妹の風情で、空色のアバターの胸に顔をすり寄せながら囁く。

「ありがとうです、フーねえ」

四楚宮謡は、多くのバーストリンカー同様、現実世界と加速世界で仲間への呼び方を変えている。たとえば黒雪姫は《サツちん》と《ローねえ》、有田春雪は《有田さん》と《クーさん》。しかし楓子に関しては、いつの頃からか、デュエルアバターでも生身でも《フーねえ》と呼ぶことが多くなった。

フーは楓子のフウなのだから、リアル割れに繋がるわずかなリスクは存在する。実際、レギオンに加入してからしばらくは《レイカーさん》だったはずだ。慎重しやかで、なかなか心の奥底までを見せてくれない——それに関しては黒雪姫も人のことは言えないが——謡が、マナー違反と言えなくもない《フーねえ》呼びに固執するのは、それだけ楓子との繋がりを、本当の絆を欲しているという証だろう。

楓子のほうも、いつもなら「ういうい！」と腕力全開で抱き締めるところが、いまは無言で謡の背中を優しく撫で続けている。しばしの触れ合いによって精神力を回復したのか、やがて謡はそつと上体を起こすと、もう一度「ありがとうなのです」と囁いてから床に降り立った。ほんの一瞬ふらついたが、すぐにびんと背筋を伸ばし、落ち着いた声で言う。

「さあ、急ぎましょう。クーさんたちが待っているのです」

「ああ。行こう」

力を込めて頷くと、黒雪姫は体の向きを変えた。

すぐ近くにポータルがあるのだから、いったん現実世界に戻ってから再加速すれば、受けたダメージは完全に回復させられる。しかしそれをする、またしても遠く離れた杉並エリアの梅郷中生徒会室からのスタートになってしまう。いまはそんな時間の余裕はない。一刻も早くシルバー・クロウたちと合流し、残された力の全てを振り絞って、加速世界に生まれた巨大な《何か》と戦うのだ。

不安定なホバー移動で前進しながら、黒雪姫は最後にもう一度だけ、フロアの南端で輝くポータル周辺を見やった。そこにはもう、ISSキット本体と呼ばれたデュエルアバター（痕跡）も、そして無理やり遠い過去から呼び覚まされ、キット端末を作らされていたレッド・ライダーの気配も、まるで存在しなかった。

本物の初代赤の王からムーブコピーされ、ブレイン・バースト中央サーバーのどこかに保管されていたと思われるライダーの記憶が、今日の戦いで完全に消滅したのかどうかは解らない。ライダーを擬似的に蘇生させた《死霊術師》が健在な以上、また同じことが起きる可能性はある。

しかし、もう二度とあんな真似を許してはならない。

対決するのだ。今回の戦いが終わったら、加速世界のいずくにか身を潜める死霊術師と。その時、ISSキット本体が残した謎も全て解明されるだろう。

視線をポータルから外し、更に十数メートル前進した黒雪姫は、フロア南東の壁際の一角で立ち止まった。眼前の大理石には、黒く煤けたような小さな跡が残っている。本体から発射された赤いビームが通過した、まさにその場所だ。

背後で、謡、あきら、車椅子に乗る楓子が停まるまで待って、両手の剣を高く振りかざす。刃の損傷は激しいが、黄昏ステージの建物の壁を斬るくらいの切れ味は残っている。

両手を斜め下に斬り下ろし、すかさず右足で水平斬りを放つと、壁に正三角形のラインが刻まれた。最後に剣先で軽く押すと、切り離された大理石のブロックが外側に落下し、大きな穴が出現する。

ミッドタウン・タワー四十五階から眺める港区エリア南部は、一見したところ平和な静けさに包まれていた。

首都高三号線の高架を挟んで、目と鼻の先には六本木ヒルズ・タワー。その西側に、麻布の大使館密集地域。だが、この光景のどこかで、今まさにシルバー・クロウたちが最後の戦いに臨まんとしている。

楓子にゲイルスラスタで飛べるか訊ねるべく、黒雪姫が振り向きかけた、その瞬間。

ヒルズ・タワーの遙か後方で、『黒い光』としか言いようのない現象が、音もなく膨れ上がった。

夕陽に照らされる白亜の街並みを、血の色のスパークを帯びた漆黒の半球が呑み込んでいく。

少し遅れて、雷鳴の如き轟音がミッドタウン・タワーまで届き、巨大なビル全体をびりびりと震わせる。

あれは——ダーク・ショットの爆発だ。しかも、ISSキット本体が発射したものをすら上回る規模の。

「……………ハルユキ君!!」

我知らず、白雪姫は悲鳴にも似た声で叫んでいた。

自分を狙う巨大な砲口から、ハルユキは懸命に視線の焦点を引き戻そうとした。

砲口だけを見ていては、空中での回避など覚束ない。全体を……底知れない飢えを照射し続ける、災禍の鎧マークⅡの巨体全てを観るのだ。たとえ相手が人の心を持たない怪物だろうと、そこに敵意がある限り、今の自分ならばその高まりを感じ取れるはずだ。

「デイルル……………」

精神を張り詰めさせるハルユキを嘲笑うかのように、巨人が低い唸り声を漏らした。主砲の奥で、高密度のエネルギーが赤黒く渦巻き始める。虚無属性の攻撃ではあるが、ISSキット装着者たちのダーク・ショットが持っていた無機質さは感じない。より生々しい、何もかもを

壊し、砕き、消し去りたいという欲望に満ち満ちている。

まるで、マークⅡそのものは魂なき鋼鉄のロボットなのに、発射されるダーク・ショットにだけは何者かの意思が宿っている、とでも言うかのような。

ならばいったい、誰の意思なのか。

取り込まれているウルフラム・サーベラスではあるまい。彼に寄生するサーベラスⅡでも、すでに消滅したはずのダスク・テイカーことサーベラスⅢでもないだろう。恐らくは、空から降り注いで鎧を乗った赤い光それ自体の意思なのだ。

あの光が降ってきた時、加速研究会のアルゴン・アレイは驚愕したように叫んだ。「早すぎるやろ、幾らなんでも。まさか連中、アレをやりよったんか」と。

アレという代名詞だけでは、示すものを断言はできない。だが、推測することはできる。恐らくは……ミッドタウン・タワーのどこかに隠されていたはずの――。

意識を集中しながらも、頭のごく一部でハルユキがそこまで考えた時。まるで思考を続けさせまいとするかの如く、マークⅡの敵意が数倍に膨れ上がった。二門の主砲の先端に、漆黒の十字光が宿る。それを視認した瞬間にはもう、ハルユキは背中の翼に蓄えられたエネルギーを解き放っていた。

「うお……おおっ!!」

左右でも前でも後ろでもなく、下へ。両腕に抱えた四人ぶんの重量を武器に変え、急角度の

ダイブ。もちろん、このままでは加速世界最大級の破壊力を秘めたビームに直撃され、欠片も残さず消える。黒と赤の螺旋を描く大砲が砲口から放たれた瞬間、翼を思い切り羽ばたかせ、落下の軌道を奥にスライドさせる。

二条のビームはハルユキたちからわずか一メートルの距離を通過し、天地が逆転した視界の中、遙かな夕空へと落ちていく。ダメージは無かったが、空間すら揺さぶるほどのエネルギーの余波を受け、体勢が乱れる。

振動に逆らわず、ハルユキはぐると体の向きを変え、一瞬だけブレーキをかけながら叫んだ。

「みんな、離すぞ！」

「いいぜ！」

代表してニコが叫ぶや否や、パドさんとタクムの胴をホルドしていた両腕を広げる。二人も同時にチュリとニコを解放し、五人は自由落下状態に入る。

「オオオッ！」

真っ先に雄叫びを上げたのはタクムだった。右手の杭打ち機に左手を添え、

「《ライトニング・シアン・スパイク》!!」

最大の貫通力を持つレベル4必殺技を発射。青白くプラズマ化した鉄杭は、マークⅡの巨体でそこだけ金属装甲のない単眼レンズ目掛けて突き進む。

次に、ニコがこの戦いで初めて、左腰に装着されていたハンドガンを抜いた。両足を広げ、どこか可愛らしいデザインの手銃を両手で構えて、

「《紅の炸裂弾》!!」

心意技であろう技名発声とともに引き金を絞る。鮮やかに赤い光弾が、甲高い唸りを上げて飛ぶ。

続けて、ビーストモードにチェンジしたパドさんが、空中で両腕両脚を小さく折り畳みながらハルユキの知らない技名を叫んだ。

「《ブラッドシエッド・カノン》!!」

パドさんを包むように半透明のチューブが形成され、その尾部で凄まじい爆発が起きる。パドさんは、巨大な砲弾の如く真下へと撃ち出される。

もちろんハルユキも、皆の攻撃を黙って見ていたわけではなかった。背中の《メタトロン・ウイング》から、まるで促すようにビリッという振動が伝わった瞬間、握り締めた両腕をクロスさせながらありったけの声で呼ぶ。

「《エクテナ》——ッ!!」

あるいは技名は必要なかったのかもしれないが、ハルユキの意思に呼応して、二枚の白翼が伸び上がった。交差させた両腕を持ち上げ、前に振り下ろすと同時に、翼は純白の槍となってマークIIの頭部に襲いかかる。

四人の攻撃は、実際には一秒のラグもなく行われた。まず、タクムのプラズマ槍が暗赤色のレンズの中央を見事に捉え、眩いスパークを散らす。直後に、同じ場所をニコの心意弾が直撃し、レンズに一筋のヒビを走らせる。

更に、自らを砲弾と化したバドさんが、巨人の単眼に激突した。体当たりの域を遥かに超えた大爆発が引き起こされ、その奥でレンズのヒビが蜘蛛の巣状に広がる。

空中で一回転して射線から外れるバドさんとすれ違うように、ハルユキの《羽根攻撃》が二撃同時に命中。教会の鐘を思わせる大音響が高らかに轟き、レンズは無数のクラックに覆われて真っ白に曇る。

「ル……デイ、ルッ……」

マークⅡは、上体を大きく仰け反らせながら苦しげに呻いた。だが、四人による最大級の攻撃を集中されても単眼レンズは割れるには至らず、巨人も倒れずに踏み留まっている。

「……っ！」

ハルユキは、食い縛った歯の間から鋭く息を吸い込んだ。

仲間たちの攻撃もそれぞれに強力だったが、ハルユキが放ったエクテナアは、加速研究会のアジトの地下フロアで、騎士型エネミーを支配していた冠型オブジェクトを一撃で破壊したほどの技だ。マークⅡ唯一の弱点だと思われる単眼レンズがこれほどの強度を持っているなら、金属装甲部分はほぼ破壊不能だろう。もう一押しすればとも思うが、地上に着地してからでは、

眼を狙おうにも角度が取れない。

タクム、ニコ、バドさんの三人はすでに着地体勢に入っていて、追撃が可能なのはハルユキだけだ。しかし、伸ばした羽根が背中に戻ってくるまで身動きが取れない。速く！と心の中で念じた、その時。

「うお……りやああああ——っ!!」

勇ましい雄叫びが、クレイターいっばいに響き渡った。声の主は、後方で降下中だとばかり思っていたチユリだ。ハルユキの右肩を踏み台にして前に出ると、左手の大型ベルヘクワイアー・チャイムを高々と振りかぶる。

小柄なアバターを限界まで反り返らせたチユリは、大きく反動をつけると一気にベルを振り下ろした。

りごお——ん!! という重厚な衝撃音とともに、ベルはマークIIのレンズの中心部を痛撃し——。

一瞬の静寂ののち、巨大な単眼は無数の紅玉となって飛び散った。

『ルオオオオ——ッ!!』

苦悶の咆哮を放ちながら、巨人はゆっくりと後方に仰け反っていき、やがて地響きを上げて倒れ込んだ。

「チユ、ナイス！」



叫びながら、ハルユキはようやく背中に戻ってきた白翼を震わせ、落下するチュリの右腕を掴んだ。最低限のブレーキをかけ、先に着地している三人の傍に降り立つ。

すかさず、パドさんが鋭い声で叫んだ。

「二十秒！」

もちろん、マークⅡが空中のハルユキたちに主砲を発射してからの経過時間だ。リチャージに六十秒かかることは確認済みなので、あと四十秒の猶予がある。

問題は、地面に倒れたマークⅡの行動不能状態がそれだけの時間続いてくれるかどうかだ。単眼のレンズを碎かれ、大ダメージを負ったことは確かだが、全身から立ち上る妖氣じみたオーラはまったく薄れていない。

——いざとなれば、強引に動きを止める！

そう決意したハルユキは、矢継ぎ早に指示した。

「ニコとタクはあいつが動きそうになったら遠距離攻撃で止めて！　パドさんは必殺技ゲージの回復を！」

青色の大型アバターと赤色の小型アバターが返事代わりに火器を構え、ビースト・モードのままの豹頭アバターは無言でクレーターの外にダッシュしていく。ハルユキは大きく息を吸うと、四人目の仲間に向けて、ただひと言だけ叫んだ。

「チュ……頼む!!」

「任せて!!」

力強く答え、チユリは一步前に出た。

先刻は打撃武器として活躍した《クワイアー・チャイム》を、再び空にかざす。反時計回りに大きく回転させると、澄んだ鐘の音がクレーターいっぱい響き渡る。

一回、二回、三回……四回。

「《シトロン》……………」

左腕を包む大型ベルから、鮮やかなライムグリーンの輝きが零れる。それを、仰臥したまま緩慢に手足を動かしているマークⅡめがけて振り下ろしながら、

「……………《コ——ル》!!」

気合いの籠もった技名発声と同時に、ベルの開口部から光の奔流が解放された。一直線に飛翔した光線は、マークⅡの左足に命中すると、たちまち全身を包み込む。多重の鐘声を思わせるサウンドが、遥かな夜空から降り注ぐ。

《時計の魔女》の二つ名を持つライム・ベルの必殺技《シトロン・コール・モードⅡ》は、対象の恒常的ステータス変化を巻き戻すという凄まじい力を持っている。遡及できる変化は、現状で四段階まで。つまり、サーベラスⅢことダスク・テイカーのコピーが赤の王から奪った四つの強化外装を、全て取り返すことが可能なのだ。

しかし、驚異的な力を持つ技の常として、制約もまた大きい。必殺技ゲージはフル状態か

ら全て消費してしまうし、巻き戻しが発動するまでに時間もかかる。

しかも光線にホーミング性能はないので、対象が動いたり物陰に隠れたりすれば簡単に中断させられてしまう。かつて、ハルユキが本物のダスク・テイカーに飛行アビリティを奪われた時、チュリはテイカーにシトロン・コールの光を受け続けさせるために、ハルユキやタクムにも何も告げずに能美の仲間になったフリをし通したほどだ。

災禍の鎧マークⅡに能美のコピーが宿り続けていれば、今度こそシトロン・コールを回避しようとしただろう。しかしコピーはすでに消滅し、いまのマークⅡを動かしているのは空から照射された《赤い光》だ。バーストリンカーですらないモノに、ライム・ベルの力に匹敵する知識などあるまい。敵の攻撃を回避しようとする本能は存在するかもしれないが、シトロン・コールの光線そのものにダメージ力はないので、単なる無害な光と判断して受け続けてくれれば――。

ハルユキが超高速で思考を巡らせるいつぼう、時間は遅々として進まない。ステータス巻き戻し効果が発動するまで、あと七秒……六秒……。

突然、ガキエン！ と耳障りな金属音が鳴り響いた。仰向けに倒れるマークⅡの両脚が隙間無く揃えられ、一つに融合したのだ。

続けて、上半身がバネ仕掛けのような勢いで起き上がり、そのまま脚の上に倒れ込むとギシギシ音を立てながら装甲を結合させる。左右の腕も、体の両脇に折り畳まれ一体化する。

ハルユキたちも、その動きをばんやり見ていたわけではなかった。敵が動き始めた時点で、タクムとニコがそれぞれの武器の狙いをつける。ハルユキも両拳を握り、「エクテニア」の発射姿勢を取る。

マークⅡの上半身が前に折り畳まれたため、頭部の単眼が格好の的としてハルユキたちの目の前に出現した。レンズは砕けたままで、直径六十センチはある穴の内部には濃密な闇が満たされている。

激しい前屈姿勢で各部の装甲を融合させていく巨人の意図は、まったく不明だ。手足のない塊になってしまえば、それ以上動けまい。シトロン・コールはダメージを与える技ではないので、いくら守りを固めても意味はない。

しかし、何かをしようとしていることだけは確かだ。ならば、それを漫然と待っている場合ではない。

「撃つよッ！」

タクムの声を合図に、唯一の弱点であろう頭部の大穴目掛けてハルユキたちは一斉に攻撃を加えた。タクムの《ライトニング・シアン・スパイク》と、ニコのハンドガン連射、そしてハルユキの《エクテニア》が漆黒の闇を貫く――

その寸前。穴を、旧式カメラのシャッター羽根の如く、周囲から迫り出した六枚の装甲板が完全に塞いだ。三人の攻撃は、赤銅色の金属装甲にあえなく跳ね返される。同時に、マーク

Ⅱの下側から大量の土煙が噴き出す。

シトロン・コールの効果発動まで、あと四秒……三秒……。

「まさか……あいつ！」

ニコが叫び、

『デイルルルル!!』

エンジン音にも似た咆哮が轟いた。前屈姿勢のまま四肢を融合させ、全長五メートルに及ぶ棒状の金属塊に変化したマークⅡは、いかなる推進力によってか、猛烈な勢いで五人めがけて突進してきた。

「チュッ！」

ハルユキは反射的に両手を伸ばすと、尚も必殺技を放ち続けようとするチュリの体を抱きかかえ、全力でジャンプした。爪先の先端を、マークⅡの背中から伸びる鋭い突起が掠めたが、辛くも回避に成功。ニコとタクムも左右に跳んでダメージはない。

しかしシトロン・コールは、残り二秒というところで対象を失い、たちまち減衰して消えてしまった。再発射するには、もう一度必殺技ゲージをフルチャージしなくてはならない。

だが、いまは、それよりも――。

ハルユキは、空中でホバリングしながら体の向きを変え、走り去っていく金属の塊を視界に捉えた。

ほんの十秒前までは人型をしていたはずの災禍の鎧マークⅡは、まったく異なる形態に変化している。生物的な曲線を描く装甲の下部には、いつの間にか尖った金属片に覆われた回転体すなわちタイヤが片側三つずつ生成され、地面を猛然と蹴飛ばす。更に後部のスラスタからはどす黒い噴射炎が迸り、巨体に更なる加速力を与えている。

「あの形は……!?」

呻いたハルユキに、地上のニコが怒りに満ちた声で応じた。

「あんにやろう……《ドレッドノート》に変身しやがった!!」

赤の王スカーレット・レインの強化外装《インビンシブル》は、左右の腕と四本の脚を持つ重厚な人型フォルムが特徴だ。《不動要塞》の名に相応しい大火力で敵を圧倒するが、反面、機動力は低い。

その弱点を解消するべくニコが苦勞の末に開発したのが、人型形状からトレーラー形状への変形、すなわち《ドレッドノート》モードである。上にハルユキたちを乗せて四神セイリユウの果に突撃したり、梅郷中から旧東京タワーまで一同を運んだりと大活躍したのだが、よもやマークⅡにもその変身能力が備わっているようななどは想像もしなかった。全長は約五メートルと本物のドレッドノートの半分程度だが、そのぶんスピードは増しているだろう。

「……あと二秒だったのに……」

腕の中で、チユリが悔しげな声を漏らす。ハルユキは頷きかけた顔を止め、大きくかぶりを

振った。

「いや、あのまま続けてたらあいつに轢かれてたよ。お前が最後の切り札なんだ、チュ。生き残っていきえくれば、チャンスは何度でもオレたちが作ってやる」

「……解った。あたしも、建物壊して必殺技ゲージ貯めてくる」

「頼む！」

今度こそ深く頷き、ハルユキは地上に降りると、チュリをタクムに預けながら言った。

「タク、チュがゲージを貯めるまで護衛してくれ！ クレーターのすぐ南に、壊せそうなビルがあった！ あいつは、オレとニコが引きつけておく！」

「了解！ ハル、赤の王、無茶はしないで！」

「一分で戻るからね！」

タクムとチュリが駆けていくと同時に、クレーターの北側へと突進していったマークⅡが、六個のタイヤから土煙を上げつつスピン・ターンした。前面をハルユキたちに向けて停止すると、六枚のシャッターで守られた眼を少しだけ開ける。どうやら、人ならぬモノによって動かされる強化外装の塊であっても、外部を覗く必要はあるようだ。

五十メートル足らずの距離で、マークⅡとハルユキ、ニコはしばし睨み合った。

不意に、すぐ右に立つニコが、小声で囁いた。

「……クロウ。いまのうちに言っとく。あたしを助けに来てくれて、サンキューな」

小さく息を呑んでから、ハルユキは押し殺した声で応じた。

「当たり前だろ。ニコは、僕たちを助けるために一緒に来てくれたんだから」

「でも、あの板切れ野郎に拘束されたのは、完全にあたしの油断だ。強化外装を四つも獲られちまったのも、あたしが自力で拘束から抜け出せなかったからだ。だから、今の状況を招いた責任は、全部あたしにある」

「……………」

何を言うつもりなのか、とハルユキは一瞬だけ隣を見た。小柄な赤系アバターは、アイレンズを彼方のマークⅡに向けたまま、毅然とした声を響かせた。

「——だから、あいつとのケリは、あたしがつける。あんたは、バイルとベルを連れてミッドタウンに戻れ。心配すんな、あいつを片付けて強化外装取り戻したら、あたしとバドもすぐ……………」

それ以上言わせるつもりはなかった。ハルユキは右手を動かし、ニコの左手首を強く握った。戻る時は一緒だ、ニコ。僕は、約束したんだ」

——きみを、守るって。

その言葉は口に出さなかったが、触れ合うアバターの装甲越しに、確かに伝わったとハルユキは信じた。

ニコは、すぐには答えなかった。だが、返事の代わりに左手を持ち上げると、ハルユキの手

をしっかりと握り返した。

「……………」

ハルユキにも聞き取れないほどかすかな声で何かを呟き、すぐに大声で叫ぶ。

「相変わらず聞き分けねーな、ヒヨッコのくせに！　しゃーねえ、一緒にアイツをぶっ飛ばすぞ!!」

「了解!!」

二人が進らせた闘志に刺激されたかのように、装甲トレーラーも各所のエラ状スリットからどす黒い瘴気を噴出させた。眼のシャッターが更に開かれ、内部の暗闇で赤い光が明滅する。

あの闇の奥底に、ウルフラム・サーベラスが囚われている。

かつて、ハルユキとの対戦中に出現した左肩のサーベラスⅡが言っていた。自分は、とある目的のためにチューニングされた存在だ。その目的とは、お前が封印した《アレ》を装備することだ、と。

アレとはもちろん、オリジナル災禍の鎧と強化外装《ザ・ディザスター》だろう。しかし鎧はアーダー・メイデンの浄化能力によって本来の姿に分離され、もう誰も触れられぬ場所、永遠の眠りに就いた。

恐らく、七王会議に出席していたアルゴン・アレイを通してその事実を知った加速研究会は、予備の作戦を起動したのだ。ISSキットと赤の王の強化外装、そしてサーベラスⅢことダス

ク・テイカーの強奪能力を使って、新たな《鎧》を作り出す、という。

加速研究会がそうまでして災禍の鎧にこだわる理由は不明だ。ただ加速世界に破壊と混乱を振り撒きたいだけなのかもしれないし、それすらもより大きな企ての一要素に過ぎないのかもしれない。

だが、いまそれを思い悩む必要はない。チュリのシトロン・コールによってマークⅡを巻き戻し、本来の《インビンシブル》に還元すれば、研究会の目論見は潰える。用途のなくなったサーベラスも、望まぬ宿命から解放されるはずだ。

——待ってろ、サーベラス。もうすぐ君を、僕と同じ普通のバーストリンカーに戻してやる。——そうしたら、また対戦しよう。勝ったり負けたり、喜んだり悔しがったりしよう。何度でも。

ハルユキが強く念じた、その言葉を嘲笑うかのよう。

装甲トレーラーが、車体の左右に装着された主砲を動かした。

六十秒のリチャージ時間はどうに経過し、あの恐るべき虚無属性レーザーがいつ発射されても不思議はない。もう一度だけあれを回避し、トレーラーに肉薄しなくてはならない。

いまはマークⅡと呼ぶべきであろう災禍の鎧クロム・ディザスターは、数多くの力を持っていた。主武装の大剣は言うに及ばず、両手から発射する《ワイヤー・フック》、炎プレス攻撃《フレイム・ブリーズ》、短距離レポート《フラッシュ・ブリンク》、そして喰らったアパタ

「の体力ゲージを我が物とする《エネルギー・ドレイン》。

しかしそれらは、歴代の装着者たちが鎧に残した技だ。生まれたばかりのマークIIは、サーベラス由来の装甲強度と、インビンシブルの主砲二門しか持っていないはず。車体に取り付いてしまえば、あとは何とかなる。

ハルユキは、ニコの左手を握ったまま低く囁いた。

「発射の寸前に飛ぶよ」

「任せた」

レーザーを地上で避けたのでは、いま二人が立っているクレーターを作り出した一撃と同規模の爆発に巻き込まれてしまう。二回目の時のように、空へ撃たせた上で躲す必要がある。

トレイラーの眼が、いっそう大きく開いた。その中に満ちる赤い悪意が、ひととき強い光を放った瞬間、ハルユキは本能的に地面を蹴り飛ばしていた。

ニコの体を引き寄せながら、四枚の翼を思い切り震わせる。急上昇する二人を追って、二門の主砲も角度を上向ける。

ずしゅうっ！ と重い振動音とともに、赤黒い光の槍が発射された。ハルユキは体を左に倒し、捻り込みながら回避。いかに途轍もない威力を秘めているようにも、ホーミング能力を持たない直線軌道の遠距離攻撃ならば、いまのハルユキは容易には撃ち落とされない……

「クロウ、まだだ！」

いきなりニコが叫び、その声をかき消すように、再度の振動音が響いた。

マークⅡは、二門の主砲を、時間差をつけて発射したのだ。

「つ……………!!」

歯を食い縛り、ハルユキは左ロール機動を強引に右ロールへと切り替えた。全身がばらばらになりそうな圧力に耐えながら、懸命に旋回する。地上から伸び上がってくる虚無の大槍が、左下の翼の先端を掠め、黒いスパークを散らす。何とか離れようとするものの、レーザーそのものがある種の引力を発しているのか、体が有無を言わず引き寄せられる――。

「お…………おおッ!!」

ハルユキの雄叫びに呼応して、メタトロン・ウイングが力強く羽ばたいた。発生した瞬間的な推力がレーザーの引力を断ち切り、ハルユキとニコは右下方へと転げ落ちるように急降下を開始した。

上下逆さまになった視界の中央には、装甲トレーラーの巨体がしっかりと捉えられている。ハルユキたちの突撃を避けるつもりか、無数のタイヤが激しく逆回転すると同時に、眼のシャッターも閉じ始める。

「させるかッ!」

ニコが右手のハンドガン突き出し、乱射した。シャッター周辺に次々と弾着の花が咲き、閉じるスピードが遅くなる。続けてハルユキも、左手に光のイメージを集中させながら、喉も

裂けよとばかりに叫んだ。

「――《光線……槍》!!」

急降下のスピードも加えて突き下ろした左手から、銀色の輝きが迸り、シャッターが完全に閉じる寸前のマークⅡの眼を直撃した。

強烈な反動が左腕を襲い、手首と肘の関節から火花が飛び散る。残り五割の体力ゲージが幾らか減少したが、敵の眼を守るシャッターも損傷し、直径五センチほどの穴を残して動かない。

「ニコ、あそこに!」

四枚の翼を広げて減速しながら、ハルユキがそう言いかけた時にはもう、ニコは赤いハンドガン握る右手をいっばいに伸ばしながら引き金を絞っていた。

がきゅきゅきゅん! と発射音が轟き、穴の奥の暗闇に六発の光弾が叩き込まれた。

装甲トレーラーの巨体が激しく震え、苦しそうな異音を発した。

『デイル……ルルデイルル……!!』

——このまま、押し切る!

ハルユキは、トレーラー前面に激突せんばかりの勢いで取り付くと、左手でエラ状スリットの隙間をしっかりとホルドした。ニコが同様に体を支えるのを確認するや、右手を解いて高々と掲げる。

「光線」……………」

限界まで振り絞ったイメージネーションが、右手に強烈な光を宿す。これで眼を貫けば、さしものマークⅡといえども動きが止まるはずだ。虚無属性レーザーの威力や、《ドレッドノート》への変身には戦慄させられたが、今度こそ終わらせる。加速研究会の野望を、今日、ここで永遠に断ち切る。

そんな決意とともに、ハルユキは光の剣を突き下ろそうとした。

だが、ハルユキは気付いていなかった。三回目の射撃で、二門の主砲に時間差をつけた事実、取りも直さずマークⅡの学習能力……戦い方の進化を示しているということを。

剣、という叫び声が喉から放たれる、その寸前。車体の両側から霞むほどの速度で襲いかかってきた黒い影が、ハルユキとニコの体を捕獲した。

「なっ……!?」

「しまった……!!」

同時に声を上げた時にはもう、有無を言わさぬ力でトレーラーの前面から引き剝がされている。二人を掴んだのは、車体の側面に融合していたはずの、マークⅡの両腕。三本の巨大な鉤爪がアバターを凄まじい圧力で締め上げ、装甲を軋ませる。体力ゲージが更に減少し、濃いイエローに染まる。

「に……ニコ……」

目も眩むような激痛の中、ハルユキは心意の光が失せた右手を懸命に伸ばした。

だが、トレーラーの左側面から生える腕に捕獲されたニコには到底届かない。視線の先で、すでに多くの損傷を受けている真紅の装甲が重ねて割り砕かれ、細かな破片が血のように輝きながら落下していく。

いかにレベル9の《王》といっても、純粹な遠隔型であるスカーレット・レインの装甲強度はメタルカラーのシルバー・クロウより低いはずだ。しかしニコは悲鳴の一つも漏らそうとせず、代わりに気丈な言葉を発した。

「チッ、しくじったぜ……あたしのドレッドノートと違って、コイツの腕には手がついてんのを忘れちゃった」

「待ってて、すぐ……解放する！」

トレーラーの上部に掴まっていたのが幸いしたか、巨大な拳に腕ごとすっぽり包み込まれているニコとは異なり、ハルユキが掴まれたのは腹から下だけで両腕と翼はフリーな状態だ。

苦痛を堪えながら再度右手を振りかざし、心意の光を呼び戻す。十メートル以上の射程がある光線槍なら届くはず、そう信じて技を放とうとしたが、それより早くニコが鋭い声で叫んだ。

「あたしはいい！ こいつの眼を撃て!!」

「で……でも！」



「こんくらいでやられたりしねーよ！ 早く撃て、クロウ!!」

赤の王の声は、苦痛を上回る焦慮を感じさせた。ニコも感じているのだ。マークⅡの戦い方が、恐るべき速さで進化していることを。

「……解った!」

やむなく、ハルユキは視線をニコから装甲トレーラーに移した。シャッターが損傷したとはいえ、唯一の弱点であろう単眼に続く穴の直径は五センチに満たない。メタトロン・ウイングの《エクテナ》では穴を抜けれない可能性がある。光線銃を使うしかないが、体の下半分を締め付ける圧力に耐えながら、正確にそのピンホールを射貫けるだろうか。

いや、できるできないの問題ではない。やるしかないのだ。

右手に宿る心意の槍の穂先を、マークⅡの単眼に向ける。銀色の過剰光は出力が安定せず、不規則に震えている。強敵との連戦が、イマジネーションをも消耗させているのだ。

——もつと、もつと光を……!!

残されたエネルギーの全てを引き出すべく念じた、わずかにコンマ一秒の停滞を、マークⅡは見逃さなかった。

ニコとハルユキを握り潰そうとするのを止め、いきなり両腕をいっぱいに広げると——左右から、二人を驚愕みにしたままの拳どうしを、思い切り激突させたのだ。

「ぐあつ……!!」

アバターから魂が弾き出されそうなほどの衝撃に、ハルユキは大きく呻いた。視力も聴力も失われ、薄暗い世界にキーンと甲高い音だけが響く。視界左上の体力ゲージが一気に二割以上も減少し、赤の危険域に突入する。

『ディール……………』

腕付きトレーラーから、低い囁い声が漏れた。両の拳がまたしても左右に広げられ、再度の激突。ズガアン！ という大砲めいた大音響とともに、ゲージが更に二割奪われる。残り一割、つまりあと一度同じ攻撃を喰らったら、死ぬ。

痛みなどとうに超越した、体がばらばらになりそうな極限の苦しみの中、ハルユキは懸命に声を絞り出した。

『に……………ニコ……………』

すると、少し離れたところから、同じく弱々しいいらえが返った。

『い……………生きてるぜ、まだ……………』

続けて、少しだけ勢いを増した声で、

「クロウ。今から、あたしが一瞬だけこいつにスキを作る。その間に、なんとかして脱出するんだ」

「えっ……………でも、スキなんて、どうやって……………」

必死に両眼を見開くと、わずかに回復した視力が、赤の王の小さな姿を捉えた。

重機の如く巨大な三本爪に肩から腰下までをがちり掴まれ、右手のハンドガンを撃てる状況ではない。それどころか、露出している部分の装甲すらも酷く損傷し、血の色のダメージ・エフェクトを止めどなく零している。拳の中では、ダメージがアバター素体にまで及んでいるだろう。

限界まで傷つけられた小柄な姿が、少しずつ遠ざかっていく。マークⅡが、みたび両腕を広げ始めたのだ。次に拳を打ち付けられたら、ニコもハルユキも死ぬ。

突然。ニコを捉える鉤爪の隙間から、ステージに降り注ぐ夕陽の何倍も鮮やかな真紅の輝きが迸った。過剰光……心意システム発動の証。

だが、ニコが強化外装なしで使える攻撃型心意技は、拳から火焰弾を放つ《輻射拳》と、それを連発する《輻射連拳》だけだったはずだ。マークⅡの拳に捕獲された状態から技を発動させれば、炎は敵のみならずニコ自身をも灼くだろう。

つまり、それがニコの意図、いや覚悟なのだ。自分を犠牲にして、ハルユキが拘束から脱出する隙を作ろうとしているのだ。

——だめだ。そんなこと。絶対に。

——僕は、ニコを、守るって、

「約束………したんだ!!」

ハルユキは、絶叫しながら、無我夢中で四枚の翼を広げた。

マークⅡの鉤爪は、アバターの腰や脚に万力の如く食い込んでいた。ただ飛ばうとしても、振り解くことはできないだろう。

しかし、いまハルユキにできることはそれだけだ。

二度の激突で意識が半ば混濁し、とても心意技を発動させられるだけのイメージーションは生み出せない。でも、飛ぶことならば——デュエルアバター、シルバー・クロウの存在証明である翼を震わせ、空を目指すことならば。

「ニコ！ 僕を……信じて!!」

もう一度、喉も裂けよとばかりに叫び、ハルユキは純白と白銀の翼たちに、残された全ての意思力を注ぎ込んだ。

『デイルオオツ!!』

怒りの雄叫びを放ったマークⅡが、ハルユキを握る右拳とニコを握る左拳をまたしても激突させようとした。

次の瞬間。

二つの拳の間隙を、深い赤に輝く流星が貫いた。

光の塊は、装甲トレーラーの前面に衝突し、凄まじい爆発を引き起こした。拳に包まれていたのが幸いして、ハルユキとニコは削りダメージ程度の傷しか負わなかったが、完全に閉鎖されている単眼を直撃されたマークⅡは苦しい咆哮とともに車体を後ろに傾けた。

——遠距離砲撃!? いったい、誰が……!?

両眼を見開いたハルユキは、薄れ始めた爆炎の中に、その姿を見た。体を仰け反らせながら地面に落下していく、深紅の豹。

砲撃ではない。プロミネンス三獣士の一人、《血まみれ仔猫》ブラッド・レパードの、自らの体を砲弾に変えて突撃する必殺技《ブラッドシエッド・カノン》だ。必殺技ゲージを回復するためにクレーターの外に出ていた彼女が、ニコとハルユキを助けるために、捨て身の攻撃を敢行したのだ。

ウルフラム・サーベラスのタングステン装甲と同等の強度を持つマークⅡのフロント部分に体当たりしたレパードは、全身から無数の破片を散らしながら地面に叩き付けられた。

その姿は、ハルユキの心の中に、新たな炎を呼び起こした。

パドさんが作ってくれたこのラストチャンスで、無駄にはできない。飛ぶのだ。ここで飛ばなければ——

何のための、翼なのか。

「お……おとおとおとおお——ッ!!」

吼えたハルユキの背中から、眩い銀光が十重二十重に解き放たれた。メタトロン・ウィングと本来の翼が奏でる共鳴音が高らかに鳴り響き、黄昏ステージを震わせた。

ハルユキを綱む巨大な腕が、火花を放ちながらまっすぐに伸びる。パドさんの砲撃によって

フロントを数十センチ浮かせていた装甲トレイラーが、そのままの角度で空中に停止する。

全身が引きちぎれそうな張力に耐えながら、ハルユキは全力で翼を振動させ続けた。肩や胸、腹の装甲の継ぎ目から大量のスパークが飛び散る。残り一割を切っている体力ゲージが、ドット、またドットと削られていく。

重い。

解っていたことだが、災禍の鎧マークⅡの質量は、バーストリンカーの範疇を遥かに超えている。本来のインピンシブルと比べればパーツが一つ足りないはずだが、あたかもステージに溶接されているかのように、ぴくりとも動こうとしない。

二度の大ダメージと引き替えにチャージした必殺技ゲージが、恐ろしい勢いで消費される。これがゼロになれば、最後のチャンスも潰える。ハルユキとニコは瞬時に殺され、地面に倒れるパドさんも止めを刺されるだろう。

両手をまっすぐ空へと伸ばし、ハルユキは白く焼き付けた意識の中で、自分という存在そのものを最後の燃料とすべく叫んだ。

「光速………翼———ッ!!」

もう、イメージションを集中させて事象をオーバーライドするという心意システムの理屈すらも頭から消し飛んでいた。仮に発動させようとしたのが攻撃技だったら、ハルユキの技名発声にシステムは応えなかっただろう。

しかし、ハルユキの第二段階心意技（光速翼）は、発動の可否が精神状態に強く依存する不安定な技だ。その不安定さが、極限状況でハルユキの意思に呼応した。

翼から放たれる光が、まるで超新星爆発の如く、数十倍の輝きを迸らせた。銀色の過剰光で世界を真っ白に染め上げながら、ハルユキは、空がほんの数センチだけ近づくのを意識した。凶悪なスパイクを備えた装甲トレイラーのタイヤが、一つ、また一つと地面から引き剥がされる。全長五メートルに達する巨体が、少しずつリフトの角度を増していく。

「う……おぉ……オオオオオ——ッ!!」

焼き尽くされる寸前の意思力を振り絞って叫びながら、ハルユキは心の片隅で呼びかけた。

——メタトロン。

——もう一度……さいごにもういちどだけ、僕に力を貸してくれ。

答える声は、聞こえなかった。

だが、ハルユキは、見ずとも感じた。背中の上から伸びる純白の双翼——強化外装（メタトロン・ウイング）が、更にもう一枚ずつの翼を発現させるのを。

もともとの金属翼と合わせて六枚となった翼から、天使の歌声にも似た多重のハーモニーが放たれた。

二つのゲージすらもかき消すほどの光の爆発の中心で、ハルユキは飛んだ。

空が近づく。大地が遠ざかる。しかし、巨大な鉤爪はアパターの下半身を捕らえ続けている。

災禍の鎧マークⅡの巨体を丸ごとぶら下げながら、ハルユキは上昇しているのだ。

……もつと……もつと、高く………!!

マークⅡに飛行能力はないはずだ。つまり、このまま超高空まで持ち上げれば、たとえそこでハルユキが死のうとも、落下ダメージによって鎧にも深手を与えられる。自分の手でニコを守り通すことはできなくなるが、地上に残るパドさんがきつと救出してくれるはずだ。

だから、もつと、空へ。

六枚の翼を、最後にもういちど、思い切り羽ばたかせようとした——その刹那。

ハルユキを万力の如く捕らえていた拘束が、突如消滅した。

マークⅡが、自ら手を離れたのだ。反動で急上昇しかけるが、翼をいっぱい広げて辛くも制動し、下方へと向き直る。

高度は五百メートル程度だろうか。夕焼け色に染まる黄昏ステージを背景に、巨大な装甲トレーラーがたちまち慣性力を失い、落下し始める。ハルユキと同時にニコも解放されたらしく、少し離れた位置で浮遊する真紅のアバターが見える。

ハルユキは、あらん限りの精神力を注ぎ込んだ飛行の反動でいまにも途切れそうになる意識を懸命につなぎ止めながら、数メートル横移動してニコの右手を掴んだ。こちらは意識を半ば失っているようだが、繋いだ手が弱々しく握り返してくる。

「……ニコ」

駆きながら、まだ体力ゲージが残っているのが不思議なほど徹底的に傷つけられた小さなアバターを、そっと抱き締めた。

もう、この手は絶対に離さない。無制限フィールドから現実世界に戻る、その時まで。

そんな決意を固めながら、落下していく装甲トレーラーを見守る。

この高さから墜落すれば、消滅はしないまでも行動不能には陥るはずだ。そのあいだに、ライム・ベルのシトロン・コールで、今度こそ鎧を元の強化外装に還元する。それで、全てが終わる……………

『ディル……ルロオオオオオ——ッ』

突如、雷鳴にも似た咆哮が、空いっばいに轟いた。

トレーラーが、ばっ！ と異様な音を発して上下に剥がれた。

金属装甲が、激しく蠕動しながら形を変えていく。上半分は胴体に。下半分は二本の脚に。わずかに数秒で、もとの人型に戻った災禍の鎧マークⅡが——頭部の単眼を覆うシャッターを、いっばいに開いた。

直径五十センチの穴の奥で、赤黒い光が強烈に瞬いた。憎悪と憤怒、その他あらゆる負の感情が混じり合った濃密なオーラが、マークⅡの巨体を包み込む。

両腕が、猛烈な勢いで前に伸ばされた。

二門の砲口が、漆黒のパーティクルで二重の十字を描いた。

……しまった……もう、リチャージされて。

ハルユキが愕然とそう考えた時には、二条の虚無属性レーザーが、轟音とともに発射されていた。

必殺技ゲージ、ゼロ。心意エネルギー、ゼロ。

空中でホバリングするのがやっとのハルユキを狙って、血と闇の色に輝く大槍たちが、一つに溶け合いながら猛然たるスピードで迫る。万物を消滅させる力を秘めた激流を、ただ凝視すること以外にできることは……。

違う。諦めるな。飛ぶんだ。たとえエネルギーが尽きていようと、翼が動かかぎり少しでも前へ、少しでも高く、少しでも速く。

速く、もっと速く、もっともっともっと速く——！

刹那。

バシイイイイッ!! という、乾いた雷鳴にも似た音が、ハルユキの意識いっぱいに響いた。

これは、
加速音。

3

何もない。

光も、音も、体の感覚すらも消え失せた無限の暗闇に、意識だけが浮遊している。

死んでしまったのか。災禍の鎧マークⅡの主砲を回避できず、ニコともども蒸発してしまっただろうか。

否。仮に死んだとしても、無制限フィールドであれば六十分の蘇生待機状態に移行するだけで、色彩はなくなるものの周囲の光景もちゃんと見えるはずだ。

しかし、どれほど両眼を——眼が開いているのなら、だが——凝らそうと、無明の闇以外に見えるものは何もない。自分のアバターはもちろん、視界左上に表示されていた体力ゲージと必殺技ゲージすら消滅している。

「……ニコ」

そっと名前を呼ぶが、応える声はない。周囲を探ろうにも、自分の腕が存在するのかどうか解らない。

「タク、チュ……パドさん……」

膨れ上がる心細さに耐えながら、仲間たちに呼びかける。

「先輩……師匠……メイさん……カレンさん………」

しかし、世界は冷たい静寂に包まれたままだ。いや、温度も、空気の流れも感じられない。この場所を満たすのは《無》、ただそれのみ。

ブレイン・バースト・プログラムに何らかの異常が起きて、魂が世界の狭間のような場所に落ち込んでしまったのだろうか？ このままだこにも行けず、誰とも会えず、無限の暗闇の中で無限の孤独を過ごすことになるのだろうか……？

「……………誰か……誰か、返事をしてよ」

無の空間を認識している自分の心すらこのまま消えてしまうのではないかという恐れにとらわれ、ハルユキは必死に声を上げた。

「チュ……………ニコ……………繪さん……………黒雪姫先輩……………」

だが、呼びかけは空しく闇に吸収され、まったく反響せずに消えてしまう。存在しない両腕で、存在しない体をぎゅっと抱え込みながら、か細い声で――。

「……………メタトロン……………」

と、不意に。

目の前に、極小の光点が一つ、音もなく出現した。

重さも、大ききさえもなさそうな、素粒子一つ。だが、それは確かにそこに存在している。仄かに輝く白いドットに、意識の全てを集中させながら、おそろおそろ囁きかける。

「……メタトロン……？ きみなのか……？」

すると、ドットがふわりと広がって、小さなリングへと変化した。白い光の環は、よくよく見ると小刻みに振動しているようだ。他にも何かが出現しているかと思つて視線を外しかけると、リングの振動が増し、見えにくくなる。慌てて凝視し直すと、再びリングは安定する。どうやら、意識をフォーカスさせていないと、リングとの言わばチューニングが外れてしまうようだ。

——頼む、メタトロン。もしきみなら、僕の声に伝えてくれ。

ハルユキは、直径一ミリ足らず（あくまで感覚的なサイズだが）の輪っかに、自分の全存在を同調させつつ語りかけた。

リングが、ゆっくりと大きくなっていく——あるいは、ハルユキが縮んでいく。やがて拡大は止まり、リングの下に、淡く輝くもやのようなものが出現する。何かの形を取ろうとしては、また臍に拡散してしまう粒子の集合体に、ハルユキはおそろおそろ不可視の手を伸ばし——触れた。

ひゅん、と粒子が凝集し、人の形を描き出す。半ば透き通る、女性の姿。瞼を閉じた高貴な顔立ちには、以前に一度だけ見たことがある。ミッドタウン・タワーでの激闘の後に姿を現した、神獣級エネミー《大天使メタトロン》の本体に間違いない。薄いドレスの背中から伸びる、以前見た時には四枚あったはずの翼が二枚しかないのは、半分をハルユキに貸し与えているか

らだろうか。

「……メタ……トロン……？」

ハルユキの囁き声に、応えるかのように。人ならぬ美貌が、そつと両の頬を持ち上げた。

金色に輝く二つの瞳がハルユキの意識を射た、その瞬間。女性——メタトロン本体の頭上のリングから、眩い光の輪が拡散し、ハルユキの意識を通り過ぎた。すると、まるでその光が虚無に実在を与えたかのように、シルバー・クロウの体が出現する。メタトロンと同じく光の粒で構成され、半分以上透き通っているが、とりあえず体の感覚はあるし両手も握れる。

「……………」

存在感の戻ったアバターから安堵の息を吐き出しながら、ハルユキはアバターの両手を持ち上げ、もう一度メタトロンに触れようとした。しかし。

「——無礼者!!」

鋭い吐責が虚空に響き渡り、手がパチツと弾かれる。再び臉を下ろした女性型エネミーは、細い眉の角度を少しだけ増加させると、厳しい声で続けた。

「気安く触れてはなりません。お前は我がしもべとなったことを忘れたのですか」

「え……シモベ……………」

首を捻りかけてから、やつと思ひ出す。言われてみれば確かに、加速研究会の本拠地で警護の騎士エネミーから姿を隠している時、なりゆきでそんな約束をした気がする。期限は一千分

だったか一千時間だったか……いや、今はそれよりも。

「ご、ごめん。確かめたかったんだ……ええと、きみは、メタトロン……なんだよね？」

「自明のことです。尊称を省略することまでは許しますが、私はおまえの主^{あるじ}なのだから、触^ふれたり見たりせずとも認識できるようになさい」

「は、はい」

「そもそも、なぜ真^まつ先に我が名を呼ばないのですか。そうしていれば、もっと早くシンクロできたはずです」

「え……つと……」

どうやら、この虚無^{きむ}の空間で目覚めてから、ハルユキがチユリやタクム、黒雪姫^{クロユキヒメ}やニコたちの後にメタトロンの名前を呼んだことがお気に召^めしていないらしい。そんなことを言われても、と思うがここは謝っておくしかない。

「わ、悪かったよ。まさかきみが応^{こた}えてくれるとは思わなくて……」

「だからおまえは愚^{おろ}かだと言うのです！ このレベルでおまえと交感できるものが、私以外に存在するはずがありません」

「れ……レベル？ 僕はまだレベル5だけど……」

ハルユキの応答に、メタトロンは再び眉^{まゆ}を逆立てた。

「そなたら小戦士の序列なぞに興味はありません！ 私の言うレベルとはすなわち、この世界

を知るための認識の高さであり深さ……おまえはいま、小戦士の身では本来決して到達できぬ水準から、世界を覗いているのです」

「……高さ……」

その言葉が、単純に、無制限フィールドに於ける飛行高度を指しているわけではないことくらいはハルユキにも想像できた。が、だからと言って具体的な意味まではまったく掴めない。おそろおそろ周囲を見回すが、光の粒子で描き出される自分とメタロン以外には相変わらず何も存在しない。足許を見下ろしても、漆黒の闇がどこまでも続いているだけだ。

そこでようやくハルユキは、この何もない空間……メタロンの言う《レベル》に移動する前の自分が、どのような状況に陥っていたかを思い出した。

「あっ……そ、そうだ！ マークⅡのレーザーが……!! ぼぼ僕、あれに直撃される寸前で、ここに……」

いまにも足許の闇を突き破って虚無の大槍が襲ってくるのではという恐慌に駆られながら、ハルユキは焦り声でそう呟ねた。するとメタロンは、小さく首を傾けながら平然と問い返してきた。

「その《マークツー》とは、おまえたちが戦っていたビーイングの紛い物のことですか？」

「え、ええと……そう、だと思うけど……」

「ふむ。ならば、戦いはまだ終わっていません。下をよく見てみなさい」

平然とそう言い放つと、メタトロンはふわりと右手を振った。純白に輝く光の粒が舞い散り、それに照らし出されるように――二人の下方に、赤黒く濁った粒子の柱が出現した。

柱は斜めに傾いたまま、空中に静止している。移動する様子はないが、柱を構成する微粒子たちはあたかも小さい虫の集合でもあるかの如く緩慢に蠢き、生理的な嫌悪感を呼び起こさせる。

「あ……あれは……？」

「もちろん、お前の言うマークツーとやらが発射したヴォイド属性の攻撃です。まったく、見るも汚らしい……よくもこのような忌まわしい力を生み出したものですね」

「えっ……じゃ、じゃあ、あの黒い柱がマークⅡの虚無レーザー!?　なんで空中に止まってるんだ……?」

『正確には、止まっているようにおまえが感じているだけです。もっと認識領域を広げてみないさい』

と言われても、どうすればその領域とやらを広げられるのか定かでないが、とりあえず両眼を一生懸命見開いてみる。

すると、赤黒い柱のずっと下方に、より巨大でより濃密な粒子の塊が見えた。ほぼ真っ黒だが、中心部には、いまのハルユキよりも少しだけ暗い銀色の輝きが閉じ込められている。あれがマークⅡなら、真ん中の銀色は、コクピットに呑み込まれたままのウルフラム・サーベラス

ではあるまいか。

サーベラスが見えるなら……と思って視線を水平方向に巡らせると、幾らか離れたところに、透き通った紅色に輝く粒子の集合体が存在した。ニコだ、と確信しながら近づこうとしたが、寸前でメタトロンに制止されてしまう。

『無駄です。このレベルでは、お前は仲間の小戦士や、もちろん敵性存在にも干渉できない。可能なのはただ認識することのみです』

『そ、そう……。ええと、それってつまり、初期加速空間でリアル世界のモノを動かしたりできないのと同じ理屈なのかな……？』

『聞き慣れない言葉ですが、お前がそう思うのならそうなのでしょう』

いたって素っ気なく答えると、メタトロンはふわりと移動し、ハルユキのすぐ右隣に立った。

『さあ、認識領域を更に広げますよ』

『え？ ……わ……うわわ!?』

ハルユキが少々情けない悲鳴を漏らしたのは、いきなりメタトロンが左手でハルユキの右腕をがっしと掴んだからだ。さっき、気安く触るなどか言ってたくせに……と思う間もなく、大天使様はハルユキを引っ張って急上昇する。

『と、飛ぶなら飛ぶって……』

文句を言い終える前に、ぴたりと停止。動き出す時も止まる時も、まったく慣性力が働かな

いのが実に奇妙な感じが、そういうもののだろうと納得しておいてちらりと隣を見る。

考えてみれば、メタトロン第二形態であるこの女性型アバターを目にしたのは、ミッドタウン・タワーで第一形態と激闘を繰り広げた直後の数秒間だけだ。

あの時は、いきなり出現した本体の途方もない威圧感に震え上がってしまったってまともに見ることもできなかったが、こうして改めて近くから眺めると、完璧という言葉でも到底足りない超然とした美貌に言葉を失うしかない。

白い光の粒子だけで描画されていてすら、魂を抜かれるような感覚に襲われるのだ。これかもし無制限フィールドでの姿だったら気絶していてもおかしくない……いやいやこんなことを考えちゃだめだ、だって僕には黒雪姫先輩という人が……

「……あまり長く私を見ていると、認識能力に異常を来たしますよ」

「あつ、ごめんなさい」

謝ってから、ハルユキは、きみも冗談を言ったりするんだなあと続けようとしたが、ただの事実だという可能性もあるので慌てて視線を外す。

下を見ると、先刻よりもかなり高度が上がっているようだ。空中に停滞する虚無属性レーザーも、それを発射したマークIIも、浮遊するニコも小さな点でしかない。

目を凝らしていると、ずっと下方——恐らく地面なのであろう漆黒の水平面に留まる深紅の光点に気付いた。色からしてブラッド・レパードに違いあるまい。ならばと思ってより広い範

囲に意識を向けると、バドさんと同じ水平面上だがある程度離れた場所に、緑と青の点が見つかる。チュリとタクムだ。

「ふむ。それなりに見えるようになってきたようですね」

「う……うん、まあ、なんとか……って言っても、まだこの世界が何なのかさっぱり解らないけど……」

記憶を辿ると、この静止した真つ暗空間に移動する直前に、《バーストリンク》コマンドを使った時のような加速音が聞こえた気がする。だがもちろん、単に似ているだけの別種のサウンドだろう。あれが加速音だったら大変なことになってしまう。

「我々はこの場所を、《ハイエスト・レベル》と呼んでいます」

隣のメタトロンがそう教えてくれたので、ハルユキは鸚鵡返しに呟いた。

「ハイエスト……レベル。じゃあ、さっきまで僕が戦ってた無制限フィールドは何レベルなんだろう……？」

「《ミーン・レベル》です」

「ふうん……」

ミーン、とはmeanだろうか。《意味する》の他に《中間》という語意もあったような気がしなくもない。

ならばその下の通常対戦フィールドや、いつそ現実世界はどう呼び習わしているのが気に

なるが、これ以上質問を続けるとまた怒られそうな気がしたので、疑問を棚上げしてもう一度「ハイエスト・レベル」世界を見渡す。最初は黒一色の真つ暗闇とししか認識できなかったのに、今は地面と空間の区別くらいは付くようになってきている。

地面をじつと見ると、おおまかな地形はこのレベルでも再現されているようだ。マークⅡが作ったクレーターの左側を走るラインは高速道路だろうか。とすれば、ハルユキとメタトロンはいま、ワールドの真北に向いていることになる。

視線を上方向に動かしていくと、北にかなり離れた場所に、四つの光点が固まっていた。

ハルユキたちのいる場所ほどではないが、かなり高い空中に浮いている。色は、空色、緋色、薄水色——そして、黒。黒ではあるが、マークⅡの濁った闇色とはまったく違う、透き通った黒水晶の質感。

「……………先輩……………」

間違いない。あの黒い光点は、黒雪姫……………黒の王ブラック・ロータスだ。ならば、周囲の光は楓子、あきら、そして謡。空中に浮いているのは、楓子がゲイルスラスタで黒雪姫たちを運んでいるからだろう。

現実世界でニコのケーブルを引き抜くためにミッドタウン・タワーに残ったはずの四人が、ハルユキたちのいる場所へと移動しようとしている理由は、マークⅡが引き起こした最初の大量爆発を目撃し、異常事態を察したためか。しかし、いかにゲイルスラスタでも、四人ぶんの

重量を一回の飛行では運び切れないはずだ。援軍の到着までには、少なくとも十分以上かかるだろう。

——いや。黒雪姫たちの救援を当てにしているようでは、鎧の無力化など夢物語だ。四人が到着するまでに全てを終わらせて、笑顔で出迎えるのだ。

「……ありがとうございます、先輩。でも、大丈夫です。災禍の鎧マークⅡは、僕らがちゃんと……」

眩いた言葉は、しかしそこで中断を余儀なくされた。

再びメタロンがむんずと腕を掴み、急上昇したからだ。「うわわわあ!」と悲鳴を上げるハルユキを引っ張ったまま、今度は体感で一千メートルを超える高度まで一気に到達する。

またしても慣性を無視してビタリと停まると、気のせいか冷ややかさの増した声で、大天使は告げた。

「さあ、そろそろおまえにも、真の姿が見えるでしょう」

「へ……し、真の、姿……?」

何度か瞬きをしてから、ハルユキはまじまじとメタロンの凝視した。睫毛を伏せたままの横顔は相変わらずの美しさで、先刻と何かが変わったようにも思えない。首を捻りながら、無意識のうちに右手を持ち上げ、滑らかなラインを描くはつぺたをつついてみよう……

「無礼者!!」

びしつ、と羽根の先端で右手の甲をひっぱたかれ、ハルユキは悲鳴を呑み込みながら飛び退った。

「だ、だって、どこが変わったのか解らなかったから……」

「私のことではありません!」

鋭く叱責してから、大天使は両手で下方を広く指し示した。

「世界を、おまえの意識全てを使って観るのです。これまでの戦いで、幾たびか実践していたでしょう。その感覚を、もっと広く、深く、高く、速く、全方向に拡張するのです」

メタトロンの言葉は難解だったが、それでもハルユキには彼女の言わんとするところが半分以上は理解できた気がした。

観る。

一点ではなく全体を。一瞬ではなく連続を。加速世界では、ハルユキたちバーストリンカーは眼でものをしているのではない。アバターにアイレンズはあるが、それが生身の脳に直結しているわけではないのだ。ブレイン・バースト中央サーバー、またの名を《メイン・ビジュアライザー》が生成した世界を、ニューロリンカー経由で意識そのものが見、聞き、触り、感じている。

この《ハイエスト・レベル》なる世界は、恐らく加速世界の構成要素が、より本質に近い形で表現されている場所なのだ。見た目に解りやすい3Dオブジェクトに翻訳されていない、情

報そのものが流れ、揺蕩う世界。

ハルユキは、無意識のうちに、メタトロンと同様に瞼を閉じていた。

さっき瞬きをした時には視覚が遮られたのに、いまは眼をつぶっていてもおぼろげに世界を知覚できる。遠か一千メートル下の地面。そこにいるパドさん、タクム、チユリ。空中に浮かぶマークⅡ。もっと高いところにいるニコ。ずっと離れた場所に、楓子、謡、あきら、そして黒雪姫。

それだけではない。マークⅡが作り出したクレーターの下に構築された加速研究会アジトの地下階部分までも見える。思っていたより遙かに深く、広い。警護の騎士エネミーも、三……いや四匹もいる。

知覚力を再び地上に下ろし、水平方向に広げていく。港区エリアの地形が、建物一つ一つに至るまで詳細に感じられる。広い道路を北西方向に辿っていくと、ひときわ高くそびえる塔は旧東京タワーだろう。頂上の《楓風庵》は、周囲の大型地形と比べると砂粒のようだが、どこか暖かく感じられる。すぐ隣には、家よりも小さいのに高密度の情報を感じさせる渦のようなものが……これはきつとポータルか。

タワーから更に北へ離れた空中に、小型の飛行エネミーが三匹浮かんでいる。知覚範囲を広げると、エネミーは他にも無数に存在している。大きいもの、小さいもの、熱いもの、冷たいもの……そのうち少なからぬ数が、ハルユキたちの戦場であるクレーターに近づきつつあるよ

うだ。きっと、敵味方が立て続けに発動させた心意技に引き寄せられたのだろう。彼らが乱入してくる前に、戦闘を終わらせねばならない。

そう考えながら、ハルユキはそつと臉を持ち上げた。すると――。

「うわ……あ……」

口から、密やかな感嘆の声が漏れる。

世界は、様相を一変させていた。

クレーターの外は暗闇が広がるばかりだった地面に、無数の光点が散らばり、まるで星空の如く輝いている。白い光の粒は多くが道路沿いに分布しているが、大きな建物の中や、広場にもくまなく存在し、とても一つ一つ数えることは不可能だ。もちろん港区エリア以外にも同様の光で埋め尽くされ、あたかも星屑で東京都心部を描き出した芸術作品のようだ。

「あの光は……?」

ハルユキが囁くと、メタトロンが静かに答えた。

「我々は〈ノード〉と呼んでいます。世界の形を決定するための情報が生まれ、繋がり、流れるところ」

「世界の……形を……」

鸚鵡返しに言ってから、ハッと気付く。あの規則的ともランダムとも思える光の並び方は、恐らく――。

「……ソーシャル・カメラ……？」

眩きは疑問形だったが、ハルユキはすでに確信していた。

治安維持を主目的として、現実世界のあらゆるパブリック・スペースにくまなく配置された自動化監視装置網。それが《ソーシャルセキュリティ・サーベイランス・カメラ》、いわゆるソーシャル・カメラだ。

ブレイン・バースト・プログラムは、その監視網が捉える映像をハッキングし、現実の地形をリアルに再現した対戦フィールドを作り出す。まさしく、《世界の形を決定》しているわけだ。

ソーシャル・カメラ・ネットワークについての情報は厳しく管理され、ハルユキたち一般人はカメラの総数や、情報を集約・処理するための施設がどこにあるのかも知ることはできない。ネット上にはカメラの位置情報をまとめたサイトなども存在するが、目で見つけられるカメラは全体の半分以上で、大部分は巧妙に隠されているという説もある。

こうして《ハイエスト・レベル》世界から光の分布を眺める限り、その説は正しかったようだ。白い星屑たちは、ハルユキが街中で見かけるカメラの二倍、いや三倍もの密度で密やかに煌めいている。

膨大な数の光点で描き出される東京の姿は、市民への過剰な監視を示すものではあったが、同時に息を呑むほど美しかった。ひととき強く輝く、J・R山手線であろう光のラインに沿っ

て、港区エリアから渋谷エリア、新宿エリアへと視線を移動させていったハルユキは、あることに気付いて短く呟いた。

「あれ……？」

東京の中心部、千代田エリアの更に真ん中だけが、漆黒の闇に沈んでいる。どれほど目を凝らしても、一粒の星も見つけることはできない。

だが、そんなことは有り得ない。あの場所は、現実世界に於ける皇居——東京で最も厳重に警備されている場所の一つだ。当然ソーシャル・カメラも無数に存在するはずで、この世界では銀河の中心部のように輝いていなくてはならない。なのになぜ、光がまったく存在しないのだろうか。これではまるで、銀河の真ん中が超巨大なブラックホールに浸食されてしまったかのようなのだ。

「気付いたようですね」

メタトロンが、静かな声を出した。ちらりと隣を見ると、大天使は臉を閉じたままだったが、その視線が千代田エリア中央の暗闇に向けられていることをハルユキは強く感じた。

「あの場所……おまえたち小戦士が《帝城》と呼ぶ空間だけは、世界から完全に切り離されています。私の知覚を以てしても、内部を感じることはできません」

「切り離されて……でも、ええと……」

これを言っているのかどうかしはし迷ってから、ハルユキはおそろおそろ続きを口にした。

「……僕、前にいちどだけ帝城の中に入ったことがあるけど……中も、見た目は基本的に外と変わらなかったよ。建物があって、エネ、じゃないピーニングがいて、属性も外と一緒だったし……」

「……………」

するとメタトロンは、珍しく言葉を探すような気配を滲ませてから、そっと頷いた。

「おまえが帝城に入ったことは、以前に観測して知っています。第一形態との戦いの折、私がおまえに語りかけたのは……そしてこのハイエスト・レベルまでおまえを誘ったのは、その事実があったからでもあるのです」

「えっ……………」

思わず驚愕の声を漏らすと、メタトロンはゆっくり体を左に回転させ、ハルユキと正面から向かい合った。

瞳がわずかに持ち上げられ、金色に輝く瞳がハルユキの両眼を、いや魂を貫く。頭の中心に、清らかかつ厳かな声が響く。

「戦士シルバー・クロウよ」

初めてメタトロンが「おまえ」ではなく名前を呼んだ、という事実が気付くこともできず、ハルユキはただ言葉の続きを待った。

「《四聖》の支柱たる我メタトロン、そなたに交換条件を提示します。こちらからは、あの

疑似（ぎに）ビーイングを屠（ころ）るすべを与えましょう」

そう言われて、ようやく思い出す。いまこの瞬間、無制限フィールド……メタトロンの言う《ミーン・レベル》では、ハルユキは災禍（さいか）の鎧（よろい）マークⅡの虚無（きよ）レーザーに直撃（ちくげき）される寸前なのだ。正直、どうすればあの攻撃を回避（かいわい）できるのか見当もつかない。メタトロンの助けがあると云うのなら、否（いな）やがあらうはずもない。

だが、気になるのは《交換条件》という言葉だ。つまり、助力の代償（だいしょう）として、ハルユキも何かを差し出さねばならないということだ。

「……代わりに、僕は何をすれば……？」

こわごわそう訊（き）ねると、大天使はまったく予想もしない言葉を口にした。

「そなたは私に、帝城（ていじょう）内部での《記憶（きおく）》を参照（さく）させなさい」

「て、帝城の……記憶を、参照……？ そんなことでいいの……？」

と問い返してから、はっと気付いて付け加える。

「あの、それって、僕の記憶がなくなるってこと？」

「参照と言ったでしょう。見るだけで、消去はしません。それ以前に、記憶を消去するほどの権限が私にあるのなら、交換条件など持ち出さずに閲覧（くわんらん）しています」

びしりと言い返され、首を縮めながら答える。

「そ、そうだよ。ええと………」

帝城の中で、見られて恥ずかしいことしなかったつけ、いやいや相手はエネミーもといビーイングなんだから何を恥ずかしがる必要もないはずだ、と高速で考えてから頷く。

「僕は構わないよ、って言うかこっちからお願いたいくらいだし。……でも、記憶を見せるって、どうやって……」

「よろしい。その言葉を以て契約の成立とします」

メタトロンは、ハルユキの疑問に答えることなく有無を言わせぬ口調で宣言し、いきなり両手を伸ばした。

銀色の光点で描画されるシルバー・クロウのヘルメットを、十本の指で包み込む。触れるのも躊躇われるほど華奢な指なのに、ハルユキの全身は完全に固定され、手足すらも動かさなくなる。

「え、あの、なな何を……」

「静かに。意識を鎮め、私を受け入れなさい」

命じるや否や、大天使メタトロンは、一切の遠慮なくハルユキのヘルメットに自らの顔を接触させた。

わ———!! と叫びそうになるのを必死に我慢していると、メタトロンの凄絶なる美貌はシルバー・クロウの鏡面バイザーを音もなくすり抜けた。至近距離から黄金の瞳でまっすぐにハルユキの両眼を捉えながら、互いの額をしっかりと接触させる。あまりの出来事にハルユキ

の意識回路は火花を上げてショートし、何も考えられなくなった。

直後。頭の芯に、金色の光が溢れ——。その輝きの中で、幾つもの静止画像が次々にフラッシュした。

帝城南門を背景に浮遊する、四神スザク。

アーダー・メイデンを抱いて、南門へと突進するハルユキ。

紅葉が舞い散る《平安》ステージの帝城内部。

その奥で出会った、青い武者型アバター。

そして、深い階段を下りた最深部、巨大な注連縄で封印された空間と、暗闇の彼方で揺らめいていた金色の輝き……。

『……おまえの記憶、確かに見せて貰いました』

そんな声が聞こえ、ハッと我に返ると、すでにメタトロンはハルユキの顔面から自分の顔を離れていた。しかし両手はまだヘルメットを押さえたままで、人間離れた美貌はすぐ目の前にある。嬌やかな唇から、かすかな囁き声が零れる。

『なるほど……。《八神の社》……やはり、帝城の深部には四神すらをも超えるビーイングが存在していましたか……』



「……………え、あの、いま、なんて…………？」

「これ以上の情報を得るには、アズール・エアーなる者と接触する必要があるそうですね……。いいよ、四神^{しじん}どもと対峙^{たいじ}すべき時が来たということですか……………しかし、いまはまだ…………」

その言葉が、本当にメタトロンの口から発せられたのかどうかは解^{わか}らなかった。なぜなら、メタロンがふわりと体を遠ざけた瞬間^{しゅんかん}、いきなり聞こえなくなつたからだ。あるいは思念そのものが伝わつたのかもしれないが、そもそもプログラムであるはずのエネミー^{ビーイング}の思念とはいったい何なのか。

ハルユキは、改めて大天使の立ち姿に見入りながら、おずおずと訊^{たず}ねた。

「あの……………きみは、どうして帝城^{ていじょう}に興味があるの？」

すると、メタロンは、実に無意味な質問^{しつもん}だと言わんがばかりの冷たい視線を返してくる。しかしハルユキの認識では、メタロンも四神も帝城もいわば《システム側》の存在であり、根源的^{げんげん}なところは同一のように思えるのだ。

という思考を読み取つたのかどうか、純白に輝^{かがや}く美少女は、再び臉^{おもて}を下ろした顔を地上の銀河へと向けた。ハルユキの頭の中に、静かだが、どこか寂寞^{さびし}とした声が響^{ひび}く。

「…………この世界に存在を得た時、私は、与えられた命令に従うだけの単純なビーイングでした。エリア03—2に築^かかれた我が居城^{きじょう}、コントラリー・カセドラルの最深部で小戦士たちの訪れを待ち、戦う。それが私の為^{ため}すべき全てでした」

ハルユキは、メタトロンの城こと《芝公園地下大迷宮》を訪れたことは一度もない。無制限フィールドで最大級、最難関のダンジョンなのだから、攻略しようとするパーストリンカーは昔からそう多くはなかっただろう。仮に毎週末に一度の攻略イベントが開催されたとしても、現実世界の七日間は、無制限フィールドの七千日。つまりメタトロンは、約二十年に一度だけ訪れる敵を、ひたすら待ち続けねばならなかったのだ。

もう一度ちらりと視線を向けたが、大天使は超然とした表情のまま語り続ける。

「長い、長い時間が流れ、ついに私の第一形態を、フィールド・アトリビュションUH01……お前たちの言う《地獄ステージ》にて撃破する戦士が現れました。しかしその者が、玉座の間から《七星》の一つを持ち去ると、小戦士たちが城を訪れる頻度は更に低下したのです。第二形態として力を振るう機会もついに訪れぬまま、再び無限にも等しい時が過ぎ去り……いつしか、私は考えるようになりました。私は……メタトロンという名を与えられたこの意識は、いったい何なのか？ 何者によって生み出され、空虚なる宿命を与えられたのか？ そして、私の知覚するこの世界は、何のために存在しているのか……？」

「……………!!」

メタトロンの独白は、ハルユキに二つの衝撃をもたらした。

一つは、加速世界のエネミーであるメタトロンが、己の存在理由に対する疑念を示したこと。彼女の知性はやはり、ゲーム内プログラムの域を遥かに超える高みに達しているのだ。

そして二つ目は、かつてとてもよく似た言葉をハルユキに聞かせた人がいたこと。
頭の奥の方で、かすかな声が甦る。

—— レベル10に達したバーストリンカーは、プログラム製作者と邂逅し、ブレイン・バーストが存在する本当の意味と、その目指す究極を知らされる。

—— 私は……知りたい。どうしても知りたいのだ。

それは八ヶ月前、梅郷中近くの喫茶店で、まだ出会ったばかりだった黒雪姫が直結回線越しに発した言葉だ。

いまだ謎に包まれたままのプログラム製作者——その人物が加速世界を、バーストリンカーを、そしてメタトロンたちエネミーを生み出した。黒雪姫とメタトロンは、世界の外と内から、重なり合う一つの答えを求めているのだ……。

「……きみは……その答えに、辿り着いたの……？」

ハルユキは、掠れた声で、無限の時を生きてきた大天使に問いかけた。

メタトロンは、無言のまま左手を動かし、いきなりハルユキの右手を掴んだ。次にもういっぽうの手で、遥か下方で瞬く光の地図を差し示す。すると、不思議な現象が起きた。

東京都心を形作る無数の光点が、上下に音もなく引き延ばされていく。極細の垂直線と化した光の群れに支えられるように、新たな大地が出現する。最初に見えていた東京の上と、下に、一つずつ。

いまや、ハルユキが見ているのは、無数の白い柱に貫かれた三重の東京だった。自分が見ているものの意味を理解できず、呆然と眩く。

「フィールドが……三つ……？」

「そう。これが、現在の私の知覚限界……私の知りうる、世界の全てです」

「世界の……全て……」

繰り返しながら、ハルユキはじっと眼を凝らした。すると、すぐに気付く。

最初から存在していた中央の東京には、ソーシャル・カメラを示す光の柱以外にも、色とりどりの光点が無数に煌めいている。それらはエネミーであり、ダンジョンであり、ポータルであり、ショップであり、そしていまこの瞬間に無制限フィールドへダイブしている、数少ないバーストリンカーたちだろう。

だが、新たに出現した上と下の東京には、ソーシャル・カメラ以外の光がまったく存在しないのだ。

SFものの映画に出てくるような、地形は同じなのに人間が一人もいない平行世界。あるいは、全ての生命が絶滅してしまった世界……。

「かつて……遠かな過去には、あの二つのフィールドでも、多くの光が活発に動いていました。きつとおまえと同じような小戦士、そして私と同じようなビーイングが、戦い、語らい、交感していたのでしょう。しかし、その光は少しずつ減り続け……ある時、全てが消えてしまった。

何があったのかは、私にも解りません」

「……………無制限フィールドの下と上にも、別のフィールドがあった……………？でも、それなら、下のやつは通常対戦フィールドってことになるよな……………いまでも、たくさんのバーストリンカーが戦ってるはずなのに……………」

ハルユキの呟きを否定するように、メタトロンが軽くかぶりを振った。

「いいえ。あの二つのフィールドは、我らの属するフィールドとはまったく異なる空間です。重なってはいませんが、移動する手段はありません」

「別の空間……………？それって、どういう……………」

首を傾けようとして、ハルユキはハッと両眼を見開いた。

二つの別世界。そんな話を、確かに以前、誰かから聞いた気がする。

あれは、六本木ヒルズ・タワーの屋上で、緑の王グリーン・グランデと邂逅した時だった。単身でエネミーを狩り、ポイントを無償で他のレギオンに分配し続けるという行動の理由を、緑の王は語ったのだ。

世界を閉じさせるわけにはいかない。

ブレイン・バースト、またの名を《試行ナンバー2》を、《ナンバー1》や《ナンバー3》と同じように廃棄させてはならない、と。

すでに閉じられてしまったという、その世界の名前は——。

「《アクセル・アサルト》……それに、《コスモス・コラプト》」

ハルユキが声にならない声で囁くと、メタトロンは「ほう」と短く反応した。

「その名を知っていましたか」

「う、うん。少し前に、他のパーストリンカー……きみの言う小戦士から聞いたんだ」

緑の王は、とても小戦士ってイメージじゃないけど、などと頭の片隅で思いながら言うと、

大天使は軽く頷いた。

「そうですか。では、その者も、ハイエスト・レベルに至ったことがあるのかもしれないね。しかし、いまはどうでもいいことです。あれら三つのフィールド……《アクセル・アサルト2038》、《コスモス・コラプト2040》、そして我らの住まう《ブレイン・パースト2039》は、同一の目的のために生み出された、私は推測しています」

「目的……って……？」

「少しは自分で考えなさい。三つのフィールドをよく見れば、おまえにも推測可能なはずですよ」

「は、ハイ……ええと……」

メタトロンの横顔から視線を外し、ハルユキは三重の東京を凝視した。

だが、ただだけ見ても、上と下の世界は完璧なまでに《閉じて》しまっている。ブレイン・パースト世界との共通点は、ソーシャル・カメラの位置のみ。仮に《アクセル・アサルト》と《コスモス・コラプト》がブレイン・パーストと同じような秘匿ゲームだった場合——ゲーム

マニアのハルユキが知らなかった以上、その可能性は限りなく高いのだが——双方もまったく同じ仕組みで対戦ステージを生成していたのだろう。

ということは、現実時間で何年か前までは、東京二十三区の中に、ハルユキたちとは異なるゲーム世界で戦っているバーストリンカーたちが存在していたということなのか。

いや、《バースト》リンカーではなく、《アサルトリンカー》並びに《コラプトリンカー》になるのかもしれないが、とにかく何らかの理由で、彼らは消えてしまった。恐らくはニューロリンカーからプログラムがアンインストールされると同時に記憶も消去され、隠された戦場で戦っていたことを忘れてしまったのだ……。

何のために。

三つのゲームの製作者は、何を目的として、そんな残酷な遊びを子供たちに与えたのか。いつしか右手でメタトロンの左手を強く握り締めながら、ハルユキは重なり合う三つの世界に——正確には一つの世界と二つの魔城に視線を注ぎ続けた。

そして、不意に気付く。

三重世界の、最大の共通点。それは、どの世界も、中心部が漆黒の闇に包まれているということだ。

「《アクセル・アサルト》にも、《コスモス・コラプト》にも、帝城がある……？」

ハルユキが呟くと、メタトロンは深く頷いた。

「ようやく気付きましたか。《AA》フィールド及び《CC》フィールドでは名称が異なっていたかもしれませんが、我々の《BB》フィールドと同様、中心部に隔絶空間が存在します。そして、かつては二つの世界でも、小戦士たちはその空間を最終的な目標としていたようです。ならばそれこそが、三重のフィールドによって構成されるこの世界と、そこで戦う小戦士やヒーリングが生み出された理由なのです」

純白の大天使は、右手を高々とかざし、無限の暗闇に清冽なる声を響かせた。

「三界を統合するこの空間——おまえたち小戦士に倣って呼ぶならば《加速世界》の存在理由。それは世界の中心にして異界たる《帝城》と、その深奥に沈む《八神の社》を突破し、封印された《ザ・フラクチュエーティング・ライト》に至ること。私は、そのように確信します」

神聖なる託宣にも似たメタトロンの言葉が、長い余韻を残して消えたあとも、ハルユキはしばらく何も言えなかった。

ザ・フラクチュエーティング・ライト。《揺光》の異名を持つ、七の神器の七番星。

パーストリンカーならば誰もが入手を夢見る、恐らくは最強の強化外装だが——それはあくまでゲーム内の「アイテム」であり、《八神の社》の攻略も突き詰めればアイテム入手イベントに過ぎない。ハルユキはそんなふうに考えていたのだ。

しかし、メタトロンの言葉は、ハルユキの認識を根底から覆すものだった。

《TFL》こそが、ブレイン・パースト、アクセル・アサルト、コスモス・コラプトという三つのゲームが存在する、または存在した理由そのもの。

ゲームのクリア条件だとか、そんな尺度の話ではない。それが事実であるなら、レベル10すらも過程に過ぎない。

謎に包まれた製作者は、《TFL》の封印を解かんがために、ゲームプログラムを数百人の子供たちに無償配布した。メタトロンが言ったのは、そういうことだ。

しかし、そこには大いなる矛盾が含まれている。

《TFL》が、ゲーム内で入手可能なアイテムである以上、それを作り帝城の奥に配置したのは製作者自身であるはずだ。製作者は神にも等しい権限を持っているのだから、欲しければ帝城から移動させるなり、同じものを作るなりすればいい。何も、ハルユキたちプレイヤーに帝城を攻略させる必要などないではないか。

それとも、《TFL》は七の神器の一つと言われているが、本当は他の六神器とは根本的に異なる何か、なのだろうか？ 強化外装でも、その他のいかなるアイテムでもなく……そう、たとえば……。

思考がそこに至った瞬間、ハルユキはようやく思い出した。

自分自身が、以前にまったく同じことを考えているのだ。

十日と少し前、謡と一緒に帝城へ突入してしまったハルユキは、本殿の奥で不思議な若武者アバターに出会った。トリリード・テトラオキサイドと名乗った彼は、ハルユキたちを本殿の地下深くに存在する《八神の社》に案内してくれた。

そこで見たのは、広大な闇の彼方に揺蕩う、金色の光。

第七の神器、強化外装《ザ・フラクチュエーティング・ライト》の輝き――。

仄かに脈打つ光に見入っているうちに、ハルユキは、初めてではないという感覚に襲われた。無制限フィールドの旧東京タワーで、心意システムの修行をしていた時。無心に壁を登るハルユキに、揺れる光……《TFL》と同じ色、同じ温かさの光の向こうから、誰かが語りかけてきたような気がしたのだ。

誰か。

帝城の奥底でその光と再会した時、ハルユキはそれを、強化外装ではなく意識あるものと感じた。しかし直後にニューロリンカーのグローバル接続が断たれ、そこで思考も途切れた。トリリードことアズール・エアーとの再会の約束を果たすため、いつかもう一度帝城の中に……と願いつつも、果たせないまま今日に至ってしまったのだ。

あの時感じたことが、もし真実ならば。《TFL》は製作者がデザインし、配置しただけの単なるアイテムではないということになる。

加速世界の中心にありながら世界とは切り離され、製作者ですら手を触れられない何か――

あるいは、誰か。

三重のフィールドの中心部を貫く漆黒のブラックホールを凝視しながら、ハルユキは我知らず呟いていた。

「もし……誰かが四神の門と八神の社を突破して、《ザ・フラクチュエーティング・ライト》に手を触れたら……何が起きるんだろう……」

「本当に、それを知りたいのですか」

「えっ……？」

思わぬ問いを投げ掛けられ、右隣の大使を見やる。長い睫毛は再び伏せられ、超然とした美貌からは彼女の内面を読み取ることはできない。エネミーに感情があるとすれば、だが。

「……………」

少し間を置いてから、ハルユキは深く頷いた。

「……知りたい。たとえそれが、世界の終わりだとしても。僕と、黒の王ブラック・ロータスは、立ち止まるためじゃなく先に進み続けるために戦ってきたんだから……」

そこまでを口にした時、遅まきながら気付く。

《TFI》への到達がブレイン・バーストの存在理由なのだとなれば、誰かがそれを果たすことでゲームはクリアされ、加速世界も消滅してしまうのかもしれない。仮にそうなくても、現実世界に暮らす有田春雪の時間は変わらず流れ続けるが、メタトロンの時間はその限りでは

ない。ゲームクリアは、彼女にとって死と同義かもしれないのだ……。

無意識のうちに、ハルユキは繋がれたままの右手に力を込めていた。

触れ合う掌から思考を読み取ったのか、大天使は静かに呟いた。

『私も知りたい。この世界で目覚めてから今まで重ねてきた七千五百五十九万二千三百九十九時間の意味を。たとえ……私という存在の消滅と引き替えなのだととしても』

「……………メタトロン……………」

押し殺した声で名前を呼ぶことしか、ハルユキにはできなかった。

加速世界が生まれたのは二〇三九年。今日までに、八年の時間が過ぎ去っている。

それだけでもハルユキには途轍もなく長く感じられるのに、無制限中立フィールドに生きるメタトロンはその一千倍、八千年もの時を過ごしてきたのだ。一年は約八千七百六十時間だから、八千倍すればメタトロンの言ったとおり七千万時間と少し。その時の流れは、もはや永遠にも等しい。

ひっそりと煌めく三重の銀河に視線を落としながら、心の奥底から浮き上がってきた言葉を音にする。

「……………あのさ、僕、一千年間きみのシモベになるって約束したよね。だから……………その約束を実行するまでは、消えないで欲しい……………かな……………」

「……………相変わらず、愚かなことを言いますね。いまだ帝城の外門すら破られていないのに、

たかだか一千年で八神の社を落とせるはずもない。言われるまでもなく、おまえには一千年間私に尽くして貰います」

素っ気なくそう言い放つと、メタトロンは少しだけ語気を緩めて続けた。

『しかし先刻、おまえは私の求めたものを差し出しました。ゆえに、私も与えましょう』

「えっ……」

なにをくれるんだろう。と少しばかり俗気を出してしまうハルユキの視線を、メタトロンは斜め下方向へと誘導した。

「――あの疑似ビーイングを打ち破るすべを」

その言葉に、一瞬で現実に戻されて、思わず両肩を強張らせる。

忘れていたわけではないが、無制限フィールドの港区エリア上空に留まるシルバー・クロウの实体は、まさに災禍の鐘マークⅡの虚無レーザーに直撃されようとしているのだ。どうやらこの《ハイエスト・レベル》では時間がほぼ静止しているようだが、メタトロンの言う《ミーン・レベル》に戻った半秒後には、漆黒の大槍が襲いかかってくるだろう。

「……きみの言葉を疑うわけじゃないけど……あの状況から、どうやって……?」

おそろおそろ訊ねると、メタトロンはわずかに真剣さを増した声で答えた。

『あれは実に忌まわしく汚らしい代物ですが、内包される虚ろなエネルギーの総量は、この私さえも俄に測りかねます。対応を誤れば、お前の装甲ごときは瞬時に分解されるでしょう』

「ぶ、分解……されないためには……？」

「無論、逆属性の力で破壊（はくわい）するのです。疑似ビーイングが放ったヴォイド属性の攻撃も、その下の本体そのものも」

「逆……属性……」

加速世界では、虚無（そふ）（闇）属性の対となるのは光属性だ。そしてハルユキには、光属性の遠距離心意技（きよりこころいぎ）《光線投槍（ライオン・ジベリン）》がある。

だが、まだまだ研究中の技なので発動に時間がかかるし、照準精度も甘い。そして何より、マークⅡの主砲から放たれた虚無レーザーを打ち消したうえに、遠（はるか）く離れた本体まで貫（つらぬ）くような威力も射程も、残念ながらない。

「あの……やる前から諦（あきら）めたくはないんだけど、いまの僕の技じゃ、とてもそんな威力は……そもそも、直撃される前に撃（う）てるとは思えないし……」

俯（うつむ）きながらハルユキが小さな声を出すと、握（にぎ）られたままの右手が容赦（ようしや）ない力で締め上げられた。「ハイエスト・レベル」には体力ゲージが存在しないのだからダメージを受けようはずもないが、それでも「いてててて」と反射的に悲鳴（ひなめい）を上げてしまう。

大天使様は、閉じられた臉（おもて）の上で柳眉（りゅうみ）を逆立て、びしりと言い放った。

「いいですか、おまえは四聖（しせい）の二柱たる私のしもべなのですから、そのような小心翼々（しんしょうよくよく）とした言動は厳（つし）に慎（つつし）みなさい。私が可能と言ったのだから可能なのです！」

「は、はひっ」

——なんだか、黒雪姫先輩に叱られてるみたいになってきたぞ。

などと今更な感慨に浸っていると、メタトロンは再びハルユキの手を引っ張り、右に九十度回転させた。同時に自分も向きを変え、再び正面から向かい合う。

続けて、無言で右手の甲を上にして差し出してくるので、ハルユキもこわごわながら左手で下から華奢な手を押し頂いた。両手を繋いだ形になったが、メタトロンはそのまま黙り込んでしまう。フオークダンスの練習ならばオクラホマ・ミキサ―あたりが流れてくるところだが、もちろん漆黒の世界は静寂に満たされたままだ。

ハルユキの主観では十秒近くも経過した時、ようやくメタトロンが言葉を発した。

「……いまのおまえに、あの疑似ビーイングを破壊するほどの力がないことは解っています。また、おまえに貸し与えた翼の力（エクテナ）も、かくも重い虚無は負けない。あれは本来、第一形態が持つ多くの翼から同時に放つ、広域殲滅のための技ですから」

「そ、そう……でも、じゅうぶん強かったよ。何度も助けてもらった、ありが……」

「あんなものではないと言っているのです！」

八千年を生きた神獣級エネミーは、憤然とした声でハルユキを遡ると、少し間を置いてから続けた。

「……私はいま、翼を通しておまえと交感しています。ミーン・レベルでは、私の実存はすで

に我が城の最深部に戻っているのです、おまえの戦場に赴くことはできません。しかし、私の力を、おまえの体を通して発現するすべは存在します」

「僕を通して……きみの力を……？」

「あの虚無を貫き、敵を屠るにはもうその方法しかありません」

メタトロンの言葉は、再びハルユキに、かつて旧東京タワーで過ごした日々を思い起こさせた。両手を繋いだまま首だけを締め、こわごわ訊ねる。

「ええと……もしかして、ここで何かの修行をするとか……？」

「……おまえが望むのなら、それもよいでしょう。ただ、あまり長くこのハイエスト・レベルに留まると、下のレベルに戻るのが困難になります。私も三千年ほど前、戻る道を見失って少々苦勞したことが……」

「や、やっぱり修行はナシで！……でも、それなら、方法っていったい……」

首を傾げるハルユキの目の前で、大天使は細い体を端然と反らし、背中の双翼をいっぱい広げた。

「……いいですか、小さき戦士よ。ハイエスト・レベルに、距離は存在しません。それゆえに、ミーン・レベルでは遠く離れている私たちがこうして触れ合うことも、三重のフィールド全体を俯瞰することも、そして記憶を参照することも可能なのです。しかし、私とおまえの間には、まだ確たる《隔たり》が存在します。それは、自らの存在そのものを保ち、守ろうとする意識

の働き……。おまえたちの言う《シンイシシステム》の、もっとも根源的な力です」

「心意の……根源……」

メタトロンの言葉は難解だったが、直感的に理解できるような気もした。

強固に集中させたイマジネーションによって事象を上書きする。それが心意システムの骨子^{こっし}だ。だが、恐らく大部分のバーストリンカーが、自分では気付かずとも常にイメージし続けているものがある。

自分の心を守るための壁。

柔らかに、傷つきやすい心の周りに築き上げた硬い殻^か。

デュエルアバターは、心の傷を鑄型^{いづた}として生み出される。言い換えれば、バーストリンカーが自ら作り出して身にまとう鎧^{よろい}であり武器なのだ。

ハルユキは、ブレイン・バースト・プログラムがデュエルアバターを作るのだと思ってきた。プログラムをインストールした日の夜に、悪夢という形で心の傷を呼び起こし、そのイメージからアバターを勝手にデザインするのだと。

でも、そうではないのかもしれない。バーストリンカー自身が、悪夢のなかで己を守ってくれる存在を強くイメージし、具現化^{具現化}するのかもしれない。

だとすれば、デュエルアバターの誕生過程は、心意システムそのものだ。どんなバーストリンカーも、バーストリンカーとなる最初の瞬間に、心意を使っている。

己の手に力を、と望んだ者は青系に。

彼方まで届く力を、と望んだ者は赤系に。

自分と仲間を守る力を、と望んだ者は緑系に。

そして、力ではなく、ただひたすらに強固な殻を欲した者は、メタルカラーに。

その後もずっと、自分では意識しないまま、心意の力でデュエルアバターの形を保ち続けているのだ。

「……メタトロン」

ハルユキは、自分と両手を繋ぐ美貌の天使に、そっと訊ねた。

「きみは、心意システムの《音》が聞こえると言ったよね。なら……僕の心を守っている音はきつと、すごく……耳障りだろうね」

「なぜ、そう思うのですか」

「……僕は、加速世界にはあんまりいないメタルカラーで……金属の装甲を持っているんだ。

これは、僕が他の人たちよりもずっと強く、自分の心を守りたいって願った証なんだ。敵を倒すんでも、仲間を守るんでもなく……ただ、自分だけを硬い殻に包んでいたいって。そんな僕の音が、汚くないはずがないよ」

あまりに自嘲的な台詞に、きつとまた怒られるだろう、とハルユキは思った。しかし大天使は、声音も表情も変化させずに答えた。

「私は、おまえたち小戦士の個体差について、綺麗たとか汚いたとか感じることはありません。どちらにせよ、私が第一形態でいる間は、おまえたちを殲滅せよという命令に抗うことはできないのですから、どう感じようと無意味です」

「……………そう……………」

「ただし、おまえたちを含む万物に対して、好きか嫌いかを判断することはできません。たとえ他の四聖たちは貴重な存在でし、帝城の四神どもは気に入らない。タンガレステージは好きですが、ジゴクステージは大嫌いです。おまえが戦っている疑似ビーイングはおぞましいのひと言ですし、私の城から強奪した宝冠《ザ・ルミナリー》の力を歪め、こともあろうに私に対して行使したあげく門番の真似事までさせた小戦士は、次に遭遇したら三千年ほど蒸発させ続けてやろうと思っています」

「そ、そう……………なんだ」

ぶるりと身を震わせながら、頭の片隅で考える。

メタトロン第一形態や、研究会の本拠地で見た騎士型エネミーを拘束していた銀色の冠……………あれは七の神器の一つ《ザ・ルミナリー》の効力だったらしい。ということは、行方不明と言われていたルミナリーは現在、研究会の手中にあるのだろうか。

またも気がかりな情報だが、今はマークⅡに集中するべきだ。メタトロンの顔を見詰めながら、改めて問いかける。

「それなら……僕の音は……？」

「……………」

メタトロンは、しばらく口を噤んでいたが、やがて少しポリュウムを落とした声で、

「少なくとも、この間答は好きになれません」

「ご、ごめんなさい。じゃあ、別に言わなくても……」

「だいたい、そのような下らぬ質問をせずとも察することはできるでしょう。不快な音を発し続けるものを、なぜ私が一千年もしもべにせねばならないのです」

「す、すみません。……って、それって、どういう……………」

「ああもう、おまえ、私とこんな話をしている余裕があるのですか！ 先ほど、ハイエスト・レベルに長くとどまる害を説明したでしょう！」

「は、はい、そうでした」

本題はなんだっけ、と考えてからようやく思い出す。メタトロンは、ハルユキと彼女の間の《陥（だ）たり》について話していたのだ。誰もが無意識の奥深くから発生させている心の壁。それはすなわち——。

「えっと、つまり……僕ときみを隔てているものは、このデュエルアバターの装甲そのものだってこと……………」

「然（し）り。本来、このハイエスト・レベルでは、鎧（よろい）も剣も必要ないはずなのです。なぜならば、

何者をおまえを傷つけることはできないのですから。しかしおまえはそのように、ミーン・レベルと同じ姿を作り出しています。その意識がある限り、私自身の力をおまえに分け与えることはできません」

「で、でも、そう言われても……」

ハルユキは、すでに八ヶ月もシルバー・クロウとして戦い続けている。加速世界にいる間は、この姿が最も自然なのだ。自分を守ろうとする意識のあらわれとメタトロンは言うが、そんな自覚はまったくくない。

「そ……それに、きみだって、無制限フィールドにいた時と同じ格好じゃないか。僕だけが隔たりを作ってるわけじゃないと……」

ついつい愚痴っぽい口調になったハルユキの一メートル先で、メタトロンの眉間に、びしりと一筋の谷が刻まれた。

しかし幸い、大天使はハルユキを叱りつけることなく、半ば自分に向けるように俯きながら言った。

「……確かに、おまえの言うとおりです。私の中にも、四聖としての誇りや自負とも言うべきものがあり、それがこの姿を作り出している。ですが、もはやそのような殻は捨てねばならぬ時ですね。おまえに翼を貸し与えた時、私は長き停滞を終わらせることを選択したのですから……」

静かに告げると、メタトロンは、瞼を閉じたままの顔を仰向けた。ハルユキも、つられるように頭上を仰いだ。

漆黒の天蓋には、一粒の光も見つけられない。いや、そこに空が存在するのかもしれない。果てしなく続く、無明の闇。

無限の空間は、ある意味では堅固な牢に等しい。どちらも、どこにも行けないことに変わりはないのだから。そして永遠の時間は、ループし続ける一秒間に等しい。どちらも、決して終わりは来ないのだから。

飛行アビリティに覚醒し、初めて対戦ステージの空を飛んだ時、ハルユキは感じた。この世界は無限だ、と。しかし、あの時は途方もなく広大に思えた《煉獄》ステージの杉並第二戦域は、加速世界に於ける最小の区画単位に過ぎない。その上には無制限中立フィールドが、そして三つの世界が重なるハイエスト・レベルが存在した。メタトロンは、無限と永遠の牢獄に囚われ続けてきたのだ。自分が生まれた意味も、戦う目的も知らされぬまま。

不意に、ハルユキのすぐ前で、金色の光の柱が垂直に立ち上った。

視線を戻すと、メタトロンが身にまとう優美な衣が、音もなく消滅していくところだった。ドレスの裾と袖口から光の粒子が解けるにつれ、艶やかな体の線が露わとなる。

少し前のハルユキなら、動転して繋がれた手を振りほどいていたかもしれない。しかし今は、胸の詰まるような切なさだけを感じる。

帝城の四神にも比肩するほどの、絶対的な力を持つ神獣級エネミー。たかがレベル5パーストリンカーのハルユキとは、何もかもが対極的な存在だ。でも、たった一つ共有するものがある。加速世界の果てを見たいという気持ち。もっと速く、もっと遠く、もっと先へと飛びたいという気持ち。

鎧はもう要らない。心を守るための殻を破って、一步近づくのだ。同じ場所を目指す、大切な友達の心に、自分の心を触れさせるのだ。

ハルユキの体からも、銀色の光がふわりと舞い上がった。

シルバー・クロウの装甲を形作っていた粒子が溶けていく。細身のアバター素体が露出し、それは更に、生身のハルユキへと変わる。

双方の体から立ち上る光が、しっかりと繋がれた両腕を通して、互いの掌で触れ合った。瞬間、二人の腕が作る円環が眩く輝き、光のリングで無限の暗闇を照らした。

メタトロンの眼がゆつくりと持ち上げられ、初めて完全に開かれた。黄金の瞳がハルユキの両眼を正面から捉え、小さな唇に仄かな微笑みが浮かんだ。

リングはますます強く輝き、漆黒を純白に塗り替えていく。二人の体も光に溶け、初めてのこのハイエスト・レベルに来た時と同じように、視覚や聴覚、その他全ての感覚が消え失せる。だが、ハルユキは感じる。剥き出しになった自分の心のすぐ近くに、もう一つの心が揺蕩っているのを。

二つの心が近づく。
触れ合う。

ハルユキには知り得ないことだったが、この瞬間、ブレイン・バースト中央サーバー、またの名を《メイン・ビジュアライザー》と呼ばれる装置の内部で、とある変化が発生した。

ブレイン・バースト・プログラムは、意識の本質である脳内の光子回路のクロックを引き上げ、一千倍の思考速度を実現する。だがこの説明は、事実の全てではない。加速されるのは、ニューロリンカーを介してメイン・ビジュアライザーとの接続を受け入れる、脳内回路のインタフェース部分なのだ。

この通信は、汎用のグローバル・ネットではなく、非公開かつ超高速、大容量のソーシャル・カメラ・ネットによって行われる。そして加速中のバーストリンカーは、メイン・ビジュアライザー内部に構築された、自分専用の光子回路を使って思考する。

いま、メタトロンという名の光子回路——かつてハルユキが《タクムの夢》の中で見た銀河でひととき明るく輝いていた星の一つと、ハルユキの専用光子回路が、新たなネットワークで接続された。これは、ISSキット本体とキット・ユーザーたちが行っていた《並列処理》と似た現象だが、本質は大きく異なる。

ISSキットが《負の感情》だけを媒介したのに対し。

メタトロンⅡハルユキ間のネットワークは、あらゆるデータの伝達が可能なのだ。思考や感情のみならず、戦うための力も……そして命そのものですらも。

純白の光の中で、ハルユキは聞いた。

『さあ、ミーン・レペルに戻りましょう。我らの敵と、戦うべき時です』

——で、でも……。

『大丈夫。恐れずに立ち向かいなさい。シルバー・クロウ……おまえには、私がついていきます』

——うん。

——ありがとう、メタトロン。

——僕は、戦う。仲間のために。自分のために。そして、きみのために。

再び、時間が流れはじめる。



ぐわんっ！ という凄まじい轟音の圧力が、ハルユキを全方位から叩いた。世界に、色が戻る。

果てしなく広がる夕焼け空。朱色と薄紫に染め分けられた白亜の街並み。

地面をこつそりと挟るクレーターの陰影。両腕で抱き締める真紅のアバター。

そして、真正面から二人を呑み込めんと迫る漆黒の大槍――。

回避する余裕はもちろん、何かを考える時間すらもなかった。ハルユキはニコを左腕で強く引き寄せながら、五指を広げた右腕を前に伸ばした。

直後、虚無エネルギーの塊が、シルバー・クロウの右手と接触した。

ハイエスト・レベルにシフトする前ならば、ハルユキもニコも瞬時に蒸発していただろう。だが、闇色のレーザーは、ハルユキの掌に触れる寸前、万雷の如きスパークを四方八方に振り撒いて止まった。まず巨大な球状に膨れ上がってから、一気に反転。直径わずか三十センチほどにまで縮んだが、エネルギーはまったく減っていない。あまりにも高密度に凝集した虚無が周囲の空間を歪め、アバターの装甲を軋ませる。

爆発する！

ハルユキは、半ば気絶したままのニコをかき抱きながら、歯を食い縛った。

片手でレーザーを止められたのは、装甲強度がメタトロン本体と同等のスペックにまで引き上げられているからだろう。しかし、マークⅡの主砲から発射される虚無属性攻撃は、何かに命中すると凄まじい爆発を引き起こし、効力範囲内の物体全てを消滅させる。その広さ、直径百五十メートル。

いかに装甲が強化されていると言っても、ハルユキの体力ゲージは残り五パーセントを切っている。破壊不能属性の学校を瞬時に消し去るほどのエネルギーの爆心に吞み込まれて、耐えられる数値とは思えない。

しかし、その時。

大丈夫です。おまえは、私が守る。

初めてメタトロンと接触した時と同じように、凛々しく、力強い声が頭の芯に響いた。

体力ゲージが、一瞬で右端まで全回復。それに留まらず、下部に六本もの追加ゲージが出現する。これがメタトロン第二形態のゲージ数なのだとしたら、四神スザクの五本をも超える、圧倒的な耐久度だ。

ハルユキはニコを両手で抱き締め直すと、更に背中の翼——本来の銀翼一対に、分裂した

ままのメタトロン・ウイング二対を合わせた六枚の羽根でしっかりと包み込んだ。

直後。

ブラックホールの如く極限まで凝り固まった負の心意エネルギーが、至近距離で解き放たれた。

あらゆる光と音が喪失する。だがハルユキを呑み込んだのは、ハイエスト・レベルの静けさとは対極的な、どろどろした憎悪に満ちた暗闇だった。万物を破壊せんとする意思そのものが、無数の微粒子となってアバターに襲いかかる。大嵐に吞まれた小鳥のように翻弄されながら、ハルユキは必死に体を丸め、自分とニコを守ろうとする。

メタトロンの加護を得た装甲そのものは、吹き荒れる闇のエネルギーに辛うじて耐えたが、内側のアバター素体にまで浸透してくる虚無属性ダメージは防げない。七段に及ぶ体力ゲージが、恐ろしい勢いで減り始める。

同時にハルユキは、氷でできた数百本の針に骨まで貫かれるような激痛に襲われ、思い切り歯を食い縛った。喉元まで込み上げてくる悲鳴を、懸命に堪える。

恐らくメタトロンも、同じ痛みを感じているはずだ。たとえ《四聖》と称えられる最高位のエネミーであろうとも、見た目は女の子であるメタトロンが我慢しているのに、ハルユキが泣き叫ぶわけにはいかない。

七段目の体力ゲージは数秒で消滅し、六段目、五段目もそれに続いた。四段目で勢いが緩

み始め、三段目をほぼ削り取ったところでようやく停止する。全身を突き刺す激痛も少しずつ弱まり、やがて消える。腕の中のニコも、なんとか無事のようだ。

徐々に薄れていく闇の中で、ハルユキは詰めていた息を細く吐き出しながら呟いた。

「……危なかった……まさか、ゲージを五本も持っていていくなんで……」

すると、すかさず脳裏で大天使の声が答える。

「戦っているのが私自身ならば、そもそも直撃などされません」

「そ、そうだよ。でも、レーザーさえ耐えればもう大丈夫。あいつはあと六十秒主砲が撃てない、その間に決着を……」

そこまで言いかけた時。

「——上昇を!!」

メタトロンが、鋭い声で叫んだ。

ハルユキは、反射的に急上昇しようとした。しかし、ニコを守るために全ての翼を体に巻き付けていたことが災いし、動き出しが一呼吸遅れた。

拡散する闇を貫いて、真下から巨大な影が出現し、猛然とハルユキに迫る。

災禍の鎧マークⅡ。しかし、ここは高度五百メートルの空中なのだ。

——飛んだ!? どうやって!? あいつに、飛行能力なんかなかったはず……!!

ハルユキの驚愕は、巨体の背中から迸る漆黒の炎を見た途端、戦慄へと変わった。

マークⅡは、赤の王スカーレット・レインから強奪した四つの強化外装が元になっている。中心となるコクピット・ブロック。二門のレーザー砲を備えた両腕。超重量を支える両脚。そして――背面の、スラスター・ブロック。

ニコは、《不動要塞》の二つ名のとおり、強化外装展開時は頑として動かうとしなかった。だがそれは、動けないということではない。《ドレッドノート》モードの機動力には及ばないが、《インピンシブル》モードの時も、スラスターを全開噴射すれば鋼鉄の巨体を短時間突進させられるのだ。

ハルユキの《光速翼》に高空まで持ち上げられ、地面まで落下するはずだったマークⅡは、スラスターの推進力を心意エネルギーでブーストして飛んだに違いない。これもまた急速な進化のなせるわざか。

ようやく翼を広げたハルユキは、肉迫する巨人を突き放すべく急上昇しようとした。だが、加速力の立ち上がりが遅い。やむを得なかったとはいえ翼をアーマー代わりに使ったために、闇の粒子によって微細な傷を受けてしまったのだ。

真下から、マークⅡの巨大な右腕が迫る。

また掴もうというのか。だが、鉤爪は握られたままだ。単なる打撃なら、いまのハルユキの装甲を打ち砕くことはできない。足で受け、反動を利用して上昇……………

ずわあっ!!

と重苦しい振動音を轟かせ、鉄塊の如き拳を、漆黒のオーラが包み込んだ。これは、ISSキットが持つもう一つの心意技、《ダーク・ブロウ》。

しかも放散されるパワーは、先の《ダーク・ショット》をすら遙かに上回る。

「いけない！ 避けて!!」

メタトロンが叫び、

「ッ……………!!」

ハルユキは、傷ついた翼をありったけの力で羽ばたかせた。

だが、巨大な闇の塊は、強烈な重力を発してハルユキを引きずり込もうとする。あれに直撃されたら、大天使の加護を得たアバターといえども間違いないで消し飛ぶ。

マークIIの単眼を守るシャッター装甲の奥で、ありとあらゆる負の感情が入り交じった光が赤黒く瞬いた。耳に、かすかな唸り声が届いた気がした。

ディルル……………。

チギル。ツブス。ケズル。クダク。コワス。コワス。コワスコワスコワスコワスコワス。

呪詛にも似たその呻きを。

凜と響く声が断ち切った。

させません。

シルバー・クロウは我が千年の侶伴。そのような汚れた力に壊させはしない！

ハルユキの右腕が動き、掌を迫り来る漆黒の渦へと向けた。次の苛烈な叫びに、ハルユキは意識せぬまま自分の声を合わせていた。

「——《トリスアギオン》!!」

永遠の夕陽を受ける背中の六翼が、眩く輝いた。同時に、掌から純白の光芒が迸った。闇と光が激突し、再び世界から色彩が消えた。

反属性のエネルギーが闘ぎ合う境界面から上は、白。下は、黒。極限のモノトーンに染まる世界で、ハルユキはありありと感じた。

メタトロンはいま、己の存在そのものをエネルギーに変えている。その証として、ハルユキ自身はダメージを受けていないのに、残り二本の体力ゲージがみるみる失われていく。そうしなければ、マークⅡのダーク・ブローを中和するに足る光を生み出せないのだ。

メタトロンが地下迷宮から移動して以来、ミッドタウン・タワーを不可侵の要塞と化してい

た超高出力レーザー攻撃（トリスアギオン）。そのエネルギー源は、翼から吸収する太陽光。だが、空を覆うほど巨大だったメタトロン第一形態の翼に対して、いまハルユキの背中にあるメタトロン・ウイングは、アバターのサイズに合わせて縮小されている。不足するエネルギー供給を、メタトロンは自分自身を光に変えることで補っている。

——だめだ、メタトロン！ きみが、消えちゃう!!

ハルユキは、無我夢中でそう念じた。だが、右手から放たれるレーザーは、むしろ輝きを増す。光と闇の境界面が、じわじわと下に押し込まれる。

不意に、頭の真ん中で、穏やかな声が囁いた。

よいのです。

私が縛り付けられていた塔で、おまえと遭遇してから時間は、我が八千年の生に匹敵するほど実り多きものでした。

私はおまえと共に多くを語り、多くを見、多くを知った。そして、とても大切なことに気付きました。あるいは、この世界が存在する理由よりも重要なかもしれないことに。

メタトロンの声は、少しずつ薄く、透明なものになっていく。繋がり（つな）を懸命に維持しようとしながら、ハルユキは訊ねた。

……きみは、何に気付いたの？

微笑みを含む声が、軽やかに答える。

おまえならば、とうに気付いているのかもしれませんが。

それは……おまえたち小戦士も、私たちビーイングも、本質的にはまったく等しい存在だということ。容れ物が異なるだけの……同じように考え、同じように苦しみ、同じように求める魂たということです。

メタトロンの答えを聞いた瞬間、両眼に涙が溢れそうになった。

滲む視界の中で、体力ゲージは留まることなく減り続ける。最後の一本が、半分を割り込んで黄色に。やがて、赤に。

これが、元々ハルユキに残されていた五パーセントに戻った時、メタトロンは消える。

ひび割れたゴーグルの下で、アバター素体の頬に光の粒を伝わらせながら、ハルユキは囁いた。

……そんなの……そんなの、当たり前じゃないか。だって、きみと僕は、こうして出会って、

たくさん話して、約束したんだ。

……一緒に、世界の最果てを見るって。一緒に帝城の門を突破して、八神の社を攻略して、《ザ・フラクチュエーティング・ライト》に手を触れるって。

……だから……だめだ、こんなところで消えちゃだめだ。きみがそんな弱気なこと言っちゃだめだ。僕は、この世界で一度死ぬくらいどうってことない。たった六十分経てば生き返れるんだ。だから……だから……。

体力ゲージの残量が、二割から、一割へ。

まるでリボンが解けるように、メタトロンとの繋がりが断たれていく。《メタトロン・ウィング》を与えられて以来、ずっと心のすぐそばにあった温もりが遠ざかる。

そよ風のようにかすかな声が、彼方から届く。

これでいいのです。

おまえに……そして世界に仇なす敵と相討つのなら、私に悔いはありません。

……でも……でも、約束したじゃないか！ 一緒に……いっしょに……

私のしもべが……泣いてはいけません。

おまえならば、いつかきつと、辿り着ける。

我らが生きる、加速世界の……

《アクセル・ワールド》の最果てに。

ゲージの減少が、五パーセントを残して止まった。

同時に、トリスアギオンの光がひととき激しく輝き、闇の境界面を撃ち抜いた。

メタトロンとの絆が完全に断たれるのを、圧倒的な喪失感のなかで意識しながら、ハルユキは叫んだ。

「う……わ……あああああああ——ツ!!」

レーザが急速に減衰し、光と闇が散り散りになって消えていく。その向こうから、右腕を丸ごと破壊されたマークⅡが姿を現す。

ニコを左腕に抱いたまま、ハルユキは突き出していた右手を固く握り締めた。拳に、銀色の光が宿る。背中の六翼が、高らかに唸る。

深手を負い、スラスターの噴射も途切れて落下していくマークⅡを追って、ハルユキは猛然と飛んだ。

「デイル……ルルロオツ!!」

怒りの咆哮とともに、マークⅡが左手を伸ばしてくる。もう一度捕まえるつもりか、凶悪な鉤爪が限界まであざとを開く。

だが、ハルユキはいつそう加速すると、巨大な手の中心を右拳で撃ち抜いた。三本の鉤爪が付け根から引きちぎられ、残された手首部分も黒炎を噴いて爆発する。

まだだ。もつと——速く！

「おおお……オオオオオオオ—— ツ!!」

重ねて吼えたハルユキは、純白に輝く流星と化して巨人の頭部に激突した。

右拳が、単眼を守るシャッター装甲を直撃する。六枚の羽根で構成される装甲板は放射状にひび割れたが、碎けるには至らず拳を拒み続ける。

ハルユキともつれ合いながら、四百メートル下の地面へと落下するマークⅡは、憎しみに満ちた雄叫びとともに左腕を振り上げた。

『ルルルディアアアアッ!!』

手首から先が欠損していても、丸太のような腕に直撃されれば、残り五パーセントしかない体力ゲージは消し飛ぶ。右拳と翼に残された全エネルギーを集中させているハルユキは、もう回避も防御もできない。拳を撃ち抜くことだけを考え、ひたすらに飛ぶ。

単眼の装甲板は、亀裂を増やしつとく耐え続ける。右上から、巨人の棍棒にも似た鋼鉄の腕が、轟然と振り下ろされる——。

「させ……ねえッ！」

叫んだのは、ハルユキに抱えられたままのニコだった。

いつのまに意識を回復させたのか、勢いよく飛び出すと、ぼろぼろに傷ついた体をマークⅡの左腕に激突させる。全身から装甲の破片を散らしながら、右手のハンドガンで、鉤爪が吹き飛んだダメージ痕に突っ込んで連射。腕の内部で小規模な爆発が連続し、動きが止まる。

「腕は、あたしが抑えとく！」

振り向いたニコのアイレンズが、強い光を放った。

「クロウ！ お前が……終わらせろ………!!」

「……………!!」

声を出すことはできなかったが、返事の代わりに、ハルユキは限界の力で右拳を握り締めた。メタトロンは、「トリスアギオン」を撃つために自分自身を燃やし尽くした。

ニコは、傷だらけの小さな体を挺してハルユキを守った。

パドさんは、マークⅡの両腕に捕獲されたハルユキたちを助けるために「ブラッドシエツド・カノン」で特攻したし、タクムとチユリはハルユキの勝利を信じて地上で待っている。楓子、謡、あきら、そして黒雪姫もまた、この戦場に駆けつけるべく、いまでも懸命の移動を続けているだろう。

仲間たちだけではない。

現実世界の保健室で、ISSキットがもたらす苦しみに耐えるアッシュ・ローラー／日下部
 繪。

メタトロン第一形態との戦いで、ハルユキの背中を支えたマゼンタ・シザーやアボカド・ア
 ボイダ。

共にマゼンタ軍と戦った、レギオン《ブチ・パケ》のショコラ・パペッター。

帝城からの脱出を助けてくれたトリリッド・テトラオキサイド。

災禍の鎧が生み出す悲しみをハルユキと共有したクロム・ファルコンとサフラン・ブロッサ
 ム、それに《獣》。

いままでハルユキと拳を交えてきた、多くのバーストリンカーたち。

バーストリンカーではないが、鎧について色々教えてくれた飼育委員会の井関玲那。飛ぶた
 めの勇気をくれたアフリカオオコノハズクのカウ。

そして、目の前の巨大な鎧に囚われる宿命のライバル、ウルフラム・サーベラス。

たぐさんの……本当はたぐさんの人たちとの繋がりが、ハルユキを導き、力を与えてくれた。

ニコの強化外装を改造させ、サーベラスⅢの意識を消し去った《赤い光》。その正体は、恐
 らくISSキット本体に蓄積されていた、負の心意エネルギーそのものだろう。ミッドタウ

ン・タワーに隠されていた本体から、エネルギーだけが加速研究会の本拠地に転送され、鎧に
 宿ったのだ。

つまり、ハルユキの目の前に存在する単眼——その内部の暗闇で激しく瞬く赤黒い光こそ、ISSキットを寄生させられた者たちから抽出した心意の塊。

マークⅡのダーク・ショットやダーク・ブロウが途轍もない威力を持っていたのも当然だ。何十人ぶんもの怒りと憎しみ、絶望をエネルギー源にしていたのだから。

——でも。

——いま、僕の拳に、翼に、心に宿っている力は。

「おまえより、何倍も……何百倍、何万倍も………!!」

右拳から、白銀のオーラが幾重にも迸る。それはハルユキの全身を包み、六枚の翼から長大な炎となつて立ち上る。

「強……いん……だあああああ——ツ!!」

災禍の鎧マークⅡの単眼を守るシャッター装甲が、粉々に砕けた。

ハルユキの拳が漆黒の穴を貫いた瞬間、波紋の如き衝撃波のリングが水平方向に広がり。その中心に、白い光の柱が、天と地を繋いで屹立した。

マークⅡの頭部を完全に打ち砕いたハルユキは、動きを止めて落下する巨体をそのまま追い抜き、凄まじいスピードで地面へと突き進んだ。

もう、着地はおろか減速する余力すらない。最初のクレーターの中にもう一つクレーターを



作り、同時に体力ゲージが消し飛んで死ぬだろうと、コンマ一秒にも満たない時間の中でハルユキは推測した。

しかし、地面まであと五十メートルとなった時。

背中に装着されたメタトロン・ウイングが、自動的に逆進をかけた。それでもなかなかスピードは落ちなかったが、少しばかり気力を回復するだけの余裕を与えられたハルユキは、懸命に体の向きを変えつつ本来の金属翼も使って減速し、からくも両脚からの着地に成功した。

衝撃を完全には吸収し切れず、体力ゲージは一パーセントほど削られたが――まだ、生きている。

あたかも、ハルユキの生存を確認するかのように、上側四枚の翼がかすかに震えた。

肩越しに見やると、翼は音もなく本来の二枚に戻り、そして光の粒子となって散った。

視界左側に、強化外装《メタトロン・ウイング》の除装を知らせるシステム・メッセージがささやかに流れた。本来の主の消滅とともに、翼もまたハルユキから去っていったのだ。

鋭く切ない痛みが胸を突き刺し、そのままずっとくまりなくなるが、懸命に堪える。いまは、まだ、やるべきことがある。

「ニコ……！」

掠れ声で名前を呼びながら、ハルユキは空を振り仰いだ。

まず視界に入ったのは、手足を力なく広げて落ちてくるマークⅡの巨体。頭部は完全に失わ

れ、砕けた装甲の隙間からどす黒い瘴気が油煙のように漏れ出ている。

右腕は《トリスアギオン》で破壊され、根元から欠損しているが、左腕はまだ大部分が健在だ。その先端に、真紅の反射光を見つけた瞬間、ハルユキは懸命に声を張り上げた。

「ニコ！ 跳ぶんだ!!」

幸い声は届いたようで、真紅の光が巨体から離れた。クレーターの南側へと落下する小さなアバターに向かって、ハルユキは萎えかけた足で必死に走った。ニコの体力ゲージも残り一割あるかどうかだろうから、マークⅡの墜落に巻き込まれずとも、あの高さから落ちたら死んでしまう。

飛ぶ力はもう残っていないので、両脚でよろよろと前進するハルユキを、左側から追い抜く影があった。深紅の豹型アバター、ブラッド・レパードだ。彼女も必殺技《ブラッドシエツド・カノン》によって全身に深手を負っているが、ハルユキよりも数秒早くニコの落下点に達すると、ジャンプして背中を受け止める。

着地し、そのまま横倒しになりかけるパドさんを、追いついたハルユキが右手で支えた。同時に左手でニコを受け止め、がしやりと地面に膝を突く。

「……………サンキュー、パド。……………やったな、クロウ。すげーな……………あいつを、ぶっ飛ばしちゃうなんてさ……………」

耳許でそんな囁き声が聞こえ、ハルユキはどうか小さな笑みを作った。

「……ニコが、助けてくれたからだよ。ありがとう」

心の中は、まだ巨大な喪失感に占められている。ハルユキに翼を与え、敵地ではアイコンと
なって道案内し、《ハイエスト・レベル》に導いて加速世界の真の姿を垣間見せ——最後には
自分自身を光に変えて強大な敵を打ち破った大天使メタトロンが、もうどこにも存在しないの
だとはとても信じられない。

再び涙が滲みそうになるが、ひび割れた鏡面ゴーグルの下で歯を食い縛って堪える。まだ、
泣くことは許されない。ニコを抱いたまま、よろよろと立ち上がり、後ろを向く。

ちようど、マークⅡの巨体が墜落するところだった。

自らが作ったクレーターの中心に、赤黒い鋼鉄の巨人は背中から激突し、頭と左腕の傷口、
そして各関節部から大量の瘴気を噴出させた。

どす黒い煙は可視化された心意エネルギーだと思われるが、マークⅡに宿る《闇》の本質は
尚も巨体の奥に残留している。マークⅠの《獣》と同様、システムの強化外装そのものに
憑依しているのだから、鎧が存在する限り闇もまた消えない。それを消滅させる方法
は——ただ一つ。

「ハル——ッ!!」

まさにその時、後方から呼び声が聞こえた。続いて、大小二つの足音。

再度振り向くと、クレーター南側の斜面を駆け下りてくるライム・ベルとシアン・パイルの

姿があった。ハルユキも右腕を振って合図しながら、出せる限りの声で応じた。

「チユ！ タク！ こっちだ！」

手を振り返したチユリは、数秒でハルユキたちの所まで到達すると、大きく一度息をついてから言った。

「ごめん、遅くなっちゃった。壊せるような建物がなかなか見つからなくて……」

「大丈夫、ちようど……戦いが、終わったところだ」

震えそうになる声を励ましてそう答えると、クレーター中心部に向き直る。

五人は、しばし無言で瀕死の巨人を見詰めた。療気はほぼ出尽くしたようで、頭のダメージ痕からは薄い煙がたなびいているだけだ。心なしか、鎧のサイズまで小さくなっているように思える。力なくもがき続ける手足の動きも、少しずつ緩慢になっていく。

「……チユ、頼む」

ハルユキの声に、『時計の魔女』ライム・ベルは深く頷くと、数歩前に出た。

左腕の《クワイアー・チャイム》を、高々と掲げる。反時計回りに二周、大きく振り動かすと、どこか学校のチャイムを思わせる音色がクレーターいっぱいに響き渡る。

「シトロン………コ——ル!!」

振り下ろされた大型ベルから、黄緑色の光が溢れ出し、横たわる巨人を包み込んだ。

前回は、ここでマークⅡが《ドレッドノート》モードに変形し、機動力でシトロン・コール

を振り切ってしまった。だが、もはや変形はおろか立ち上がる力すらないようだ。光を受けても、少しだけ全身を振っただけで、逃れるには至らない。

七秒、八秒、九秒……………

十秒。

マークⅡを包む光が、ひときわ強く輝いた。

虚無属性レーザーで大いにハルユキたちを苦しめた両腕、正確には残された左腕の前腕部までが、無数の煌めきに溶けて消滅した。

同時に、ハルユキが左腕で抱いたままのニコの体を、同じ色合いの輝きが包む。シトロン・コールの時間進行能力によって、『インピンシブル』の主砲パーツが、本来の所有者のもとに戻ったのだ。

更に十秒後、今度はマークⅡの両脚が消えた。残るは、流線型のコクピット・ブロックと、背中のスラスター・ブロックだけだ。

右手を左手の大型ベルにあてがい、細い足をしっかりと踏ん張った姿勢で、ライム・ベルは新緑の色の光を放ち続ける。幼馴染の、小さくも頼もしい背中を見守りながら、ハルユキは心の奥でふと考える。

シトロン・コールで、メタトロンの消滅を巻き戻すことはできないだろうか。メタトロンはハルユキに、ある意味では憑依していたのだから、ハルユキのステータスを遡行させれば、

もしかしたら……。

三度マークⅡの巨体が強く輝き、ある種の甲殻生物を思わせる胴体が消え去った。コクピット・ブロックがニコに戻ったのだ。直後、ガシヤンと鈍い金属音が響く。

クレーター中央に目を凝らしたハルユキは、ハッと息を呑んだ。灰色の金属装甲を持つ細身のアバターが、横向きに倒れている。

ウルフラム・サーベラス。数奇な宿命に翻弄され続けた、対戦の天才。ハルユキのライバルにして、大事な友達。

エッジが鋭く立ったデザインや、いかにも硬そうな装甲の質感はサーベラスに間違いないが、背中からはまるで翼のような突起が四本伸びている。能美コビーがニコから奪った強化外装の最後の一つ、高速移動用のスラスタ・ブロックが、サーベラスの体格に合わせて縮小された姿だ。

シトロン・コールの光は、サーベラスをしつかりと捕捉し続ける。あと数秒でスラスタもニコに戻り、災禍の鎧マークⅡは、完全に消滅する。

ハルユキが、恐らくは他の四人もそう確信した――

その、刹那。

誰もが予想し得なかった現象が、クレーター中央で発生した。

意識を失ったまま倒れるウルフラム・サーベラスが、まるで実体無き投射映像でもあった

かのように、いきなり消滅してしまったのだ。

「えっ……!?」

チュリが叫び、周囲を見回す。ハルユキも驚愕しながらクレーターの中を見渡したが、サーペラスの姿はどこにもない。

横たわったあの状態から、五人の眼にも留まらないほどの高速で移動することは絶対に無理だ。何の前触れもなく、突如フィールドから消え去ったとは思えない。

対象物を失ったシトロン・コールの光が急速に減衰し、途切れると同時に、ハルユキの腕の中でニコが鋭く舌打ちした。

「……チッ……そうか、やられた……!!」

「えっ……やられたって、何を……?」

慌てて訊き返すと、赤の王は、傷ついた右手を悔しそうに握り締めて言った。

「あいつら……現実世界から、ウルフラム・サーペラスの回線を切断しやがったんだ。いまの消え方は、それしか有り得ねえ」

「そ、そうか……!」

タクムも、押し殺した声で無念そうに唸る。

「ブラック・バーストとアルゴン・アレイの引き際が良すぎたとは思ったんだ……まさか、そんな奥の手があったなんて……」

「……………っ……………」

クレーター中央部の亀裂を凝視しながら、ハルユキは驚愕と納得を同時に噛み締めた。

アルゴン・アレイの口ぶりから、彼女がサーベラスにリアルでも干渉できるのかもしれないとは思っていた。だが、よもやこうも躊躇なく強制切断を発動させるとは。しかもその理由はきっと、サーベラスを助けるためではなく……。

ここでもうやく驚きが危惧に変わり、慌ててタクムに問いかける。

「じゃ、じゃあタク、ニコの強化外装のラスト一個は……!?」

ハルユキに答えたのは、タクムではなくニコ自身だった。

「無制限フィールドから消えられちゃあ、どうしようもねえ。スラスタは、しばらくあいつに預けとくしかねーな……」

「そ、そんな……!」

「しゃーねえよ、いまはコクピットと主砲と脚が戻ってきただけでも良しとするさ。ミサイルポッドは奪われずに済んだしな」

「そ、そんな……」

あつさりと言いつつ切られれば、それ以上何を言うこともできない。

そんなハルユキの左腕からびょんと飛び降りると、赤の王は数歩移動し、パドさんの背中に手を触れさせた。豹型アバターも悔しそうにクレーター中央を睨んでいたが、古参リンカー

として最早手立てがないことを理解しているのだろう。るる、と低い唸り声で接触に應えると、ハルユキたちに向き直る。

赤のレギオン《プロミネンス》が三獣士の一人ブラッド・レパードと、頭首スカーレット・レインは、同時に深く頭を下げた。

やがて姿勢を直すと、ニコはハルユキたちを順に見詰めながら言った。

「……シルバー・クロウ。シアン・パイル。そしてライム・ベル。あたしが不甲斐なかったばかりに、大変な目に遭わせちゃったな……」

「そんな……水臭いよ、ニコちゃん！」

右手を振り回し、チユリが叫ぶ。

「あたしたち、友達じゃない！ ピンチの時は助け合うのが当たり前でしょ！」

続けてタカムも、

「そうですね、赤の王。ぼくたちは、お二人に今まで何度も助けて貰ったんですから」

もちろんハルユキも何か言おうとしたが、再びチユリにターンを奪われてしまう。

「それに、あたしこそ、ニコちゃんの強化外装、全部取り戻せなくてごめんね……。あと一分、ううん、三十秒早く必殺技ゲージを貯められたら、あいつらがサーベラスのケーブルを引っこ抜くより先に最後の一つを巻き戻せたはずなのに……」

「それこそ水臭えよベル……いや、あー、えーっと……」

そこで不意に言いよんだニコは、傷だらけの頭部アンテナパーツを右手の指先で引っ掻きながら訊ねた。

「……あのさ、あんたのこと、何て呼べばいい？ アバターネームじゃなくて、リアルネーム由来で」

一瞬きょとんとしてから、チユリは照れたように三角帽子の鑰を指でこりこりした。

「イヤー、そこはもうなんでも……黒雪先輩は《チユリ君》だし、フーコ姉さんは《チーコ》だし……」

「そ、そうか。じゃあ、ちつと考えとく……とにかく、本当に、ありがとな」

再び礼を言ったニコに、タクムも咳払いしてから声を掛けた。

「赤の王、ぼくもどう呼んで頂いても構いませんから」

「あんたはもう立派なのがあるだろ、ハカセ」

「……………え、ええ、では、それで」

そのやり取りに、チユリがあははと笑い、場の空気が少しだけ和んだ。

ハルユキも肩の力を抜きながら、もう一度クレーターの底を見下ろした。

ウルフラム・サーベラスは、《インピンシブル》の構成パーツ最後の一つを装着したまま、強制切断によって無制限フィールドから去った。つまり、災禍の鎧マークⅡに蓄積されていた心意エネルギーの大半は虚空に消散したが、アイテムとしてはまだサーベラスのストレージに

存在し続けているわけだ。

マークⅠこと《ザ・ディザスター》が浄化されて《ザ・ディステイニー》に戻ったように、スラスター・ブロックからも闇は消えたのだろうか。それとも、ISSキット本体から移動した邪悪は、力を弱めつつもまだ強化外装の中に潜み続けているのか。その答えは、いまはまだ解らない。

——サーベラス。それに、ニコ。

——約束する。マークⅡを完全に消滅させて、最後のパーツもあるべき所に還してみせる。必ず。

ハルユキが、胸の奥底でそう誓ったのとはほとんど同時に、タクムの口から「あっ……！」という声が漏れた。皆の視線が集まる中、青い大型アバターは、ニコに向かって一歩踏み出す。「そ、そう言えば……サーベラスだけじゃなくて、赤の王もそろそろ回線が切断されちゃうんじゃない……」

「あたしが？　なんでだよ？」

きょとんとするニコに対して、チュリとバドさんも「言われてみれば」という顔をする。

「それが、今頃マスターやレイカーさんたちは、赤の王のケーブルを抜くためにミッドタウン・タワーのポータルから現実世界に戻ってるはずなんです。ハルの指示で」

タクムの説明に、ハルユキは慌てて口を挟んだ。

「そ、それは大丈夫……だと思ふ。先輩たちは四人とも、ミッドタウンからここに向かっている最中だから。きっとマークⅡの砲撃に気付いて、全員でこっちに移動することにしたんだ」

「どうしてハルにそれが解るのよ？」

チエリが訊ねるのは当然だが、ひと言では答えられない。なぜならハルユキが黒雪姫たちの移動に気付いたのは、メタトロンに連れて行かれた《ハイエスト・レベル》で、加速世界全体を俯瞰したからだ。あの出来事をきちんと説明できるのはメタトロンだけだが、彼女は二度と語りかけてはくれない。

再び喉元に込み上げかけるものをどうにか抑え、ハルユキは言った。

「説明は、あとでするよ。とにかく先輩たちは、もうすぐあつちから……」

と、クレーターの北側を指さすと、皆もそちらを見やる。

ほぼ同時に、滑らかに挟り取られた縁を越えて、黒いシルエットが出現した。一つ、二つ、三つ、四つ……五、六、七……。

クレーターを取り囲むように増え続ける影を啞然と見上げながら、ハルユキはかつて似たような光景に遭遇したことを思い出していた。

あれは五ヶ月前、五代目クロム・ディザスターことチエリー・ルークの捕獲を依頼してきたニコと一緒に無制限フィールドの池袋エリアに赴いた時のこと。黄の王イエロー・レディオ率いる《クリプト・コズミック・サーカス》の奇襲を受け、ハルユキたちは危機的状况に陥った

のだ。

まさか……と息を呑むが、すぐに気付く。シルエットのほぼ全てが、デュエルアバターとはかけ離れた形をしている上に、アバターにしては大型すぎるものも交じっている。つまりあれらは――

「……うそ、あれ、全部エネミー？」

チュリの呟きに、遅まきながらハルユキは思い出した。

このクレーターを目標していたのは、黒雪姫たちだけではない。心意技の《音》に引き寄せられた大小のエネミーたちが、四方八方から集結しつつあったのだ。小獣級が主で、より大型の野獣級は二、三体しかいないが、とても同時に戦える数ではない。

「あー、まあ、あんだだけ心意技乱発すりやあ当然こーなるよな」

ニコのコメントを受けて、人型に戻ったパドさんがしばらくぶりに発言する。

「NP。クロウが全員連れて飛んでくれる」

「ま、任せてください！」

――何てったって、いまの僕にはメタトロン・ウイングが……。

――もう、ないんだった……。

大天使との別れを思い出すたび、寂寥感がずしりと心を重くするが、涙ぐんでいる場合ではない。

メタロン・ウイングを装着していたのはほんの一時間足らずだったのに、ずいぶんと軽くなってしまったように思える背中にぐっと力を込め、二枚の銀翼を広げる。四人をクレーターから脱出させるだけなら、飛行アビリティでも可能はずだ。

「みんな！ 掴まって！」

両腕を広げながら叫ぶと、マークⅡのレーザーを回避した時と同じように、左腕にバドさんとニコ、右腕にタクムとチュリが飛びつく。残された必殺技ゲージを全て消費する勢いで翼を震わせ、離陸――。

「くっ……………」

重い。

いや、荷重のせいではない。翼の推力が上からないのだ。

幾多の激戦で金属フィンが損傷したことに加えて、精神的な消耗が飛行力を鈍らせている。心意システムとまでは行かないが、シルバー・クロウの飛行アビリティは主にイマジネーション回路を使って制御しているので、限界域では良くも悪しくもメンタルレベルの影響を受けてしまう。

それでもどうにか十メートルほど上昇したが、エネミーには遠隔攻撃能力を持つものも少なくない。クレーターから安全に脱出するには、この三倍は高く飛ぶ必要がある。

「う……………お……………ッ」

唸りながら、懸命に翼の推力を絞り出そうとする。だが、必殺技ゲージが空しく消費されていくだけで、高度はなかなか上がらない。

しかも、翼から発せられる不安定な高周波がエネミーたちを刺激したのか、クレーターをぐるりと取り巻く大小二十体以上が、奇怪な雄叫びを上げながら斜面を駆け下り始める。

「だ、大丈夫かい、ハル」

タクムが不安そうな声を出し、

「がんばって、ハル！」

とチュリが励ました。いつもなら幼馴染二人の言葉は何よりのエネルギーなのだが、いまは胸にぽっかりと空いた穴が氣力を吸い取ってしまう。飛べない理由が、翼のダメージや精神的消耗だけではないことを、今更のように自覚する。

だめだ。これ以上は飛び続けられない。少なくとも、どこか一人きりになれる場所で、大声を張り上げて泣くまでは。

「……………みんな、ごめん……………」

小声で謝り、力なく下降しようとした、その瞬間。

空から、紅の雨が降り注いだ。

ハルユキたちを取り巻くように無数の火線が落下し、クレーター内部に着弾するや、立て続けに紅蓮の火柱を噴き上げる。炎に巻かれたエネミーたちは獲物を見失い、甲高く吼えながら

右往左往する。

驚きが、いつときにせよ諦めを忘れさせ、危ういホバリングを続けつつハルユキは真上を振り仰いだ。すると、茜色に染まる夕空を背景に、きらきらと瞬いて飛翔する水色の光が見えた。

「《超空の流星》」

ハルユキの左側に密着するバドさんが、低く囁く。彼女が見間違えるはずがない。あの光はスカイ・レイカーの強化外装、ゲイルスラスターの噴射炎だ。

五人が振り仰ぐ先で、流星は突如二つに分かれた。新たに生まれた光は、夕焼けより深い緋色。

ハルユキたち目掛けて一直線に落ちてくるそれは、たちまちデュエルアバターの姿を顕す。袴と白衣を模した装甲に、長いヘアピース。右手には大型の弓。

《緋色弾頭》アードー・メイデンは、落下しながら長弓《フレイム・コーラー》を引き絞ると、ハルユキたちにも聞こえる声量で技名を大呼した。

「《フレイム・ボルテクス》！」

今度は、一本の火矢だけが放たれる。だがそれは瞬時に渦巻く炎の槍へと巨大化し、南側から突進を再開しようとしていた野獣級の鼻先に突き刺さる。

もちろん、クレーターそのものを作ったマークⅡの虚無属性レーザーには及ばないが、それ

でも空対地ミサイルもかくやという大爆発が引き起こされ、ハルユキたちを北側に押しやると同時に野獣級の巨体をひっくり返した。

アーダー・メイデンは、自らが生み出した爆風を利用して落下の勢いを殺し、クレーターの底にすくと降り立った。すかさず七メートル上空のハルユキたちを見上げ、叫ぶ。

「クーさん！ あっちから離脱してください！」

小さな手が指さしたのは、クレーターの北側だ。しかしそちらからも、サソリのような姿の野獣級を含む五、六体が、最初の炎を越えて接近しつつある。サソリの尾は高々と振りかざされ、このまま移動しても凶悪な毒針からは逃れられそうにない。

だが、ハルユキはメイデンの指示を聞いた瞬間、萎えかけた気力を奮起こし、北へと飛んでいった。垂直上昇はできなくとも、滑空半分の水平移動なら——そして謡と楓子が救援に来てくれたいまならば。

右腕でタカム、左腕でバドさんをつかりと抱えながら、出せる限りのスピードで突き進む。地面では、アーダー・メイデンも小型アバターらしく軽やかな足取りで疾駆する。

行く手のサソリエネミーが、獲物の接近を感知して、左右のハサミと長大な尾を猛々しく構えた。すかさず謡が弓を引き絞り、火矢を連射する。狙い違わずサソリの各所に突き刺さり、エネミーを炎で包むが、動きは止まらない。

「やべえな、アイツの殻、耐火能力が……」

ニコが唸りながら腰のハンドガンに手を伸ばした。だが、抜くよりも早く。

サソリの後方から大量の水が降り注ぎ、赤熱した甲殻に当たって瞬時に蒸発した。

真っ白い水蒸気がもうもうと立ちこめ、サソリや周囲の小エネミーたちの視界を奪う。地上のメイデンは躊躇なく蒸気の中に突入し、ハルユキもこの機にサソリの上空をすり抜けるべく、懸命に飛ぶ。

ふらふらと体を揺らしながらも、どうにかエネミーの包围を抜けようとした、その刹那。

真下の白煙を貫いて、サソリの尾が猛然と伸び上がった。尻尾そのものにホーミング能力でもあるのか、黒光りする毒針が正確にハルユキの胸へと迫る。もう回避も防御もできない。叩き落とされる。いや、体力ゲージが消し飛ぶ――

水蒸気の下で、クリムゾン・レッドの閃光が強烈に輝いた。

同時に、胸の奥底までを貫かれるような、苛烈で、凜然とした叫び。

「《デス・バイ・エンブレッシング》!!」

サソリエネミーの尾が一瞬で根元から断ち切られ、ハルユキを貫く寸前だった毒針までが、ガラス細工のように壊く砕け散った。

野獣級エネミーは甲高い悲鳴をまき散らしてのたうち、周囲の小獣級をのきなみ巻き添えに

する。

宙に漂う無数の破片を突っ切って前進を続けながら、ハルユキは真下に眼を凝らした。

すると、サソリの脚を俊敏に避けつつ進むアーダー・メイデンと——その傍らを疾駆する、漆黒のアバターが見えた。

黒の王、《絶対切断》ブラック・ロータス。

であれば、先刻降り注いで蒸気の煙幕を作り出した大量の水は、《唯一の一》アクア・カレントが放ったものだろう。ミッドタウン・タワーに残った四人は、恐らくISSキット本体と戦い、撃破し、いつときの休息も取らずにこの学校跡へと転進したのだ。ハルユキたちを助けるために。

七メートル下を同じ方向に走る黒雪姫のアバターは、四肢の剣尖が砕け散り、全身の装甲も傷だらけだ。きっと謠も、遙か上空を飛ぶ楓子も、クレーターの縁で待つあきらも激しく消耗しているに違いない。

「……先輩……師匠……メイさん……カレンさん……!」

四人の名前を呼ぶことで、尽きかけた力を奮い立たせる。緩い斜面に沿って懸命に上昇するハルユキに、左右から仲間たちが呼びかけてくる。

「ハル、もう少しだ!」

「頑張っ、ハル!」

「クロウ、お前なら飛べる！」

「WTG、クロウ！」

皆の声援に、太い地響きが重なった。ダメージと混乱から立ち直ったエネミー群が反転して追ってきたのだ。クレーター脱出まで、あと三十……二十メートル……。

「う、お、おとおッ！」

叫び声とともに最後の気力を絞り出し、ハルユキは残された距離を駆け抜けた。

刃物でえぐり取ったように鋭い地面のエッジを飛び越え、太い道路の真上に出た瞬間、必殺技ゲージと精神的なエネルギーが同時に尽きた。視界までが薄暗くなり、ハルユキは着地姿勢を取る余裕もなく前のめりに落下した。

だが、顔から路面に突っ込む寸前、左右から力強い腕に引き戻される。タクムとバドさんが、自らの足で着地すると同時にハルユキを支えたのだ。

「GJ」

密着しているはずのバドさんの声が、なぜか遠く聞こえる。体が重い。脚にも腕にもまるで力が入らない。

しかし、へたり込んでいる場合ではないのだ。二十を超えるエネミー群も、すぐにクレーターの斜面を登ってくるだろう。彼らの視界から一時的に逃れたいまのうちに、できるだけ距離を取らなくては。

懸命に立ち上がろうともかくハルユキの肩を――。

硬く、鋭く、しかしどこか優しい《手》がそっと叩いた。

「頑張ったな、シルバー・クロウ」

「……………せん、ばい……………」

掠れ声で呼びかけながら、どうにか顔を仰向ける。

正面に、碎けかけた両腕を差し伸べる漆黒のアバターがぼんやりと見えた。

タクムとパドさんが、ハルユキの体をそっと持ち上げる。黒雪姫は一歩進み、両手でハルユキを受け取ると、軽く抱き締めた。

再び、耳許で声。

「あとは私たちに任せて、休め。キミは立派に自分の戦いを戦い抜いた」

「……………でも、後ろから、エネミーが……………」

「心配するな。キミがいちばん苦しい時に助けられなかったのだ、せめて退路くらい切り拓かせてくれ」

黒雪姫がそう言うと、一緒に斜面を登ってきたらしい諷が言葉を添える。

「クーさんが頑張って下さったおかげで、まだまだ元気いっぱいなのです！」

続けて、どこからともなく姿を現したあきらも、

「あとは全部引き受けるの」

最後に、空から軽やかな駆動音とともに舞い降りてきた楓子が締めくくった。

「鶴さんたちは、ゆっくり休んでて頂戴」

疾駆するエネミーたちの立てる地響きは、もうすぐそこまで迫っている。黒雪姫は、ハルユキをタクムに預けるとカッと鋭い音をさせて振り向き、クレーターの縁に立った。その左右に、謡、あきら、楓子も進み出る。

並んで立つ四人は、ハルユキたちと同じかそれ以上に傷ついている。ゲイルスラスタから車椅子に乗り換えた楓子に至っては、両脚の膝から下を失っているほどだ。

しかし、黒の王と四元素たちの背中に、恐れや怯みは微塵もない。ハルユキのすぐ隣で、ニコが駆く。

「まったく、かなわねーな……」

そう、本当に敵わない。ハルユキも、心の中で呟く。

ただひたすらに対戦あるのみ。黒雪姫たちは、バーストリンカーの基本であり極意でもあるその信条をどこまでも貫いている。

立ちはだかる敵がいる限り、握れる拳がある限り、そして自分が存在する限り、戦う。戦い続ける。

——でも、僕も。

——僕にもまだ、戦うべき敵がいる。ニコの強化外装最後の一つを奪い去り、ウルフラム・サーベラスを束縛し続けている加速研究会。そして、多くのエネミーを役役するのみならず、ポイント全損したバーストリンカーの記憶すらも弄ぶ、研究会のリーダー。

——いまは立っているだけで精一杯だけど、僕はこれから、あいつらと戦い続ける。そしていつか帝城の門を破って、八神の社を攻略して、最後の神器に辿り着くんだ。黒雪姫先輩と……そしてメタトロンが追い求める、世界の最果てを知るために。

手負いのサソリ型を先頭に、猛り狂うエネミーたちが、クレーターの縁を越えて躍り出た。黒雪姫、楓子、謡、あきらの全身から鮮烈な輝きが迸った。

一点に重ね合わされた四人の特技が、エネミーの集団をまとめて吹き飛ばした。甲高く吼えながらクレーターの底へと転がり落ちた異形たちは、数秒間じたばたともがいていたが、起き上がっても戦意を失ったかのように動こうとしない。

それを確認してから振り返ると、黒雪姫は凜と張った声で告げた。

「今日の戦いは、これで終わりのようだ。最奇りのポータルは、一キロ先の都立中央図書館にある。さあ……」

右手の剣を、まっすぐ北に向け。

「帰ろう。現実世界へ」

アクア・カレント救出ミッション、ISSキット本体破壊ミッション、そして突発的な赤の王奪還ミッションと災禍の鎧マークII破壊ミッションの、無制限中立フィールドに於ける累計所要時間、約十二時間三十分。

すなわち、現実世界の梅郷中生徒会室に復帰したハルユキがゆっくりと瞼を持ち上げた時、正面の壁に掛けられたアナログクロックは、作戦が開始された午後十二時二十分十秒からわずか五十秒しか針を進めていなかった。カレント救出後にいちど加速し直していることを考えれば、かなりのハイスピード・クリアと言っている。

無制限中立フィールドに、同程度の時間ダイブし続けた経験は何度もある。しかし今回ほど、一千倍速で流れ続ける時間の密度というものを実感したことはない。加速していたはずなのに、現実世界では何日間も過ぎ去ってしまったかのようだ。

壁掛け時計から視線を外すと、学校中を包み込む賑々しい喧噪が耳に届く。なんだっけ、と瞬きしてから思い出す。今日――六月三十日は、梅郷中学校で年に一度の文化祭が開催されているのだ。

午前中には陸上部の屋台でクレープを食べたり、あちこちの教室展示を回ったり、剣道部の

待ダンスを観たりしたはずなのに、その記憶もすぐには甦ってこない。確か剣道場の前でタムと合流して、校庭の屋台村でお昼を食べることになって、みんなで昇降口から前庭に出て、そこで――。

日下部繪が、倒れたのだ。

「……………」

ようやく意識が完全に覚醒し、ハルユキはソファの背もたれから上半身を跳ね起きさせた。周りでは共に戦った仲間たちが何度も瞬きしたり両手を伸ばしたりしているが、一足先に立ち上がろう――としたところで、右隣の楓子に肩を押さえられる。

「あ、あの、僕、保健室に……」

「解つてますよ、わたしも行きます。その前に」

にこりと微笑みながら、楓子はハルユキのニューロリンカーから緊急回線切断用のXSBケーブルを抜いた。勢いよく立っていたらコネクタを破損させていたかもしれない。首を締め、楓子が自分のケーブルを抜くのを待つ。

二人同時に立ち上がり、ソファセットから出ると、黒雪姫に向き直る。

「すみません先輩、いろいろ報告しなきゃならないこともあるんですが……」

「ん、早く行ってやれ。日下部君もキミを待っているだろう」

「い、行つてきます！」

笑顔で頷く黒雪姫にべこりと頭を下げ、急ぎドアへと向かう。後ろに続く楓子が、

「五分で戻ってくるわね」

と付け加えるので、日下部さんがそんなに早く起き上がれるかなと心配になるものの、まずは様子を見てみるしかない。

第一校舎一階の西端にある生徒会室から、第二校舎一階東側の保健室まではかなりの距離がある。文化祭の見物客で混雑する廊下を可能な限りの早足で進みながら、隣の楓子に小声で訊ねる。

「あの、師匠。ISSキット本体は、師匠や先輩たちが破壊してくれたんですよね？」

「一応は、そういうことね。もう一人、助けてくれた人がいましたけど」

「えっ？ 誰、なんです？」

「その話は、あとにしましょう。いま気がかりなのは、本体を完全破壊しても、キットの端末は消滅しなかった……ということなの」

「え……ええっ!？」

気がかりどころか、それは大問題だ。驚愕と危惧のあまり足をもつれさせるハルユキの右腕を、楓子がひよいと支える。そのまま腕を組ませると、顔を近づけて囁く。

「ごめんなさい、心配させちゃったわね。結論から言えば、消滅はしなかったけれど、封印はされたのよ。だから、全てのISSキット端末は無力化され、総への精神干渉も止まったはず

……」

「封……印、ですか……」

無力化されたのなら消滅だろうと封印だろうと問題はないのだろうが、言葉のイメージとしては、少しばかりすつきりしないのは確かだ。

だが、ここであれこれ気を揉んでも仕方がない。絵の顔を見れば、その瞬間に解るはずだ。全てが終わったのか、否かが。

そこまで考えた時、二人の上履きが渡り廊下と第二校舎との境界線を踏んだ。人通りが絶えた廊下を右に曲がると、すぐに保健室のドアが見えてくる。

楓子が組んでいた腕を解き、軽くハルユキの背中を押す。大きく息を吸い込みながら、ドアの引き手に指を掛け、そっと開ける。

「失礼します……」

掠れ声で挨拶すると、室内正面にあるデスクに向かっていた養護教諭の堀田三都が振り向き、微笑んだ。

「本当に早いお帰りだったわね」

……早い？ と聞き返しそうになってから思い出す。ハルユキは、前庭で倒れた絵を保健室に運んだあと、堀田教諭に「用事を済ませてすぐに戻ってきます」と断って生徒会室へと移動したのだ。

そして無制限フィールドにダイブし、幾多の強敵と激戦を繰り広げてからようやく帰還したので、ハルユキの主観では到底「早いお帰り」とは思えない。だがもちろん堀田教諭にとつては数分前の出来事なわけで、「は、はい」と頷くしかない。

すると教諭が目線で促すので、ぺこりと一礼してから保健室を横切り、カーテンで仕切られたベッドの前まで移動する。

染み一つない純白の布の向こう側は、しんと静まり返っている。

カーテンを開ける前にひと言声を掛けるべく口を開くが、何を言っているのか解らない。繪は眠っているのだろうか。ISSキットの干渉はちゃんと止まったのだろうか。ハルユキたちの戦いは、加速世界を浸食する闇を、本当に打ち払うことができたのだろうか……。

「繪、開けるわよ」

ハルユキの代わりに、楓子がそう言いながら手を伸ばした。

カーテンが軽やかな音とともに引き開けられると、曲線を描く白いベッドカバーと、その向こうに少しくせ毛気味なショートヘアが見えた。楓子と一緒にブースの中に入り、カーテンを閉めてから、ベッドの頭側に回り込む。

枕に右頬をつけて目を閉じる、目下部繪の横顔がそこにあった。

あどけない、という形容がぴったりくる寝顔。しかしISSキットの干渉が消えたかどうかを判断できるのは当人だけだ。楓子が指先で優しく頭に触れながら、囁きかける。

「繪……」

すると、柔らかそうな長い睫毛が震え、少しか持ち上げられた。

二度、三度と瞬きしてから、両眼の瞼が七割ほど開かれる。

薄い色の虹彩には、煙のような光が揺蕩っている。まず楓子を、続いて隣に立つハルユキを、瞳が捉える。

「……くさかべ、さん」

ほとんど口の動きだけで呼びかけると――。

繪は、淡い微笑みを浮かべ、か細くはあるがしっかりとした声で答えた。

「……有田さん……楓子師匠……。……夢のなかで……お二人の声が、聞こえました。他にも、もっとたくさんの方の、声が。私を……。いいえ、加速世界を守るために、一生懸命戦っている人たちの、声が……」

「繪」

楓子は、腰を屈めて両手で繪の小さな顔を包み込むと、優しく、しかし少しだけ張り詰めた声で訊ねた。

「繪……どう、なの？」

どう、とはもちろん、ISSキットの干渉が止まったのかという意味だ。

問われた繪の瞳に幾つもの光が宿り、揺蕩いながら集まって、純白に煌めく滴を生み出すと

すうつと頬に流れた。

だがそれは、苦しみや悲しみの涙ではなかった。繪が何も言わなくても、ハルユキにはそうと解った。

「……ありがとうございます、師匠。ありがとうございます、有田さん。私……、私、また、バーストリンカーで、いられそうです」

「……………繪」

楓子も目尻に光るものを滲ませながら、両手で繪を助け起こし、しっかりと胸に抱き締めた。その光景を見守るハルユキも、両眼が熱くなるのを感じた。

師弟はたっぷり十秒以上も抱き合ってから、体を離れた。顔を向けてきた繪に、ハルユキは「よかったね、日下部さん」と言うべく口を開いた。

だが、細い両腕がまっすぐ差し伸べられた途端、言葉を忘れて立ち尽くしてしまう。

すると楓子が、微笑みながらも、有無を言わせぬ力で背中を押した。ベッドに一步近づいたハルユキの体を、繪は両腕の中に包み込んだ。柔らかさと温かさ、そして仄かな花の香りを意識した途端、思考が停止――

ずると思ったが、今回はしなかった。なぜならハルユキの中に生まれた圧倒的な安堵や喜び、そして不思議な切なさ、いつもの動転やら仰天をどこかに押しやってしまったのだ。

両手を持ち上げ、繪の小さな背中にそっと触れさせる。すぐ近くにある耳に向けて、小声で

囁きかける。

「よかった……ほんとに、よかった」

日下部 綸を苦しめていたISSキットからの精神干渉は、完全に消滅した。ハルユキはようやくそれを確信した。

正確には、ミッドタウン・タワーでISSキット本体と戦い、破壊したのは黒雪姫、楓子、あきら、謡の四人だ。だから、綸と、そして綸の《兄》であるアッシュ・ローラーを助けるという約束を、ハルユキ自身は守れなかったのかもしれない。

でも、そんなことに拘る必要はないのだと、いまなら素直に思える。大天使メタトロンに、《ハイエスト・レベル》を見せてもらいたいまならは。

加速世界は、ハルユキが思っていたよりもずっと広く、深く、大きい。

そして同時に、脆く、危うく、儂い。

そんな世界で、一人ひとりのパーストリンカーが、小さな星のように一生懸命輝いている。何人か集まって、恒星系を。恒星系が集まって、星団を。星団が集まって、一つの銀河を作っている。

パーストリンカーの対戦は、銀河に脈打つ命の証だ。皆が真剣に戦い、勝ったり負けたり、喜んだり悔しかったりすることで、広大な闇に光が、音が、物語が生まれる。

綸もハルユキも、加速世界の規模に比べれば余りにも小さな星だけれど——でも、一人では

ない。いつだって、手を伸ばせばそこに、心を繋いだ誰かがいる。

ハイエスト・レベルで見た並列する世界、「アクセル・アサルト」と「コスモス・コラプト」からは全ての星が消え失せてしまった。その結末に至った理由は、いまはまだ解らないけれど、「ブレイン・パースト」世界に同じ道を辿らせてはならないと強く思う。

緑の王グリーン・グランデが無差別にポイントを再分配し続ける動機も、いまなら少しだけ理解できる気がする。

彼は、抗っているのだ。パーストポイントを奪い合い、全て失った者は即座に排除されるという加速世界のルールに。たった一人で、ブレイン・パーストという名の銀河全体を守ろうとしているのだ。

単独では小獣級エネミーにすら勝てないであろうハルユキに、グリーン・グランデの真似はできない。でも、自分の近くで同じ恒星系を作る星たちと、助けたり助けられたりしながら共に進み続けることはできる。

きつと、恒星系を大きくすることも……いつか、星団になることだって。

「日下部さんが、いなくならなくて……本当によかった」

両腕にいつそうの力と、わななく声に万感の思いを込めて、ハルユキは言った。

「私も……こうしてまた、有田さんに会えて、よかった……です」

耳許で、灰かに濡れた線の囁きが返った。

直後――。

「いつまでやってるの、二人とも」

そんな声とともに二本の手が伸びてきて、ハルユキと繪を分離させた。二人揃って顔を横向けると、楓子の呆れたような笑顔があった。

己の大胆すぎる行いを今更のように認識し、繪と楓子を交互に見ながら「あ、あの、その」とうわずった声を出す。

「えーと……そ、そうだ、先輩たちに、五分で戻るって言っちゃいましたもんね、そろそろ戻らないと……日下部さん、歩けそう？ それとも、もう少しここで休んだほうがいいかな？」

「それには及ばないですよ、鴉さん」

楓子は、ベッドの傍らに出しっぱなしになっていた折りたたみ椅子に腰を下ろすと、小声で続けた。

「先ほど、サツちゃんからメールが来ました。生徒会室は十二時三十分までしか使えないので、ミーティングは学内ローカルネット経由の通常対戦で行うそうです。スターターはサツちゃん、相手はわたし、二人はこのままギャラリーに入ればいいみたいね」

「あ、り、了解です」

ハルユキが楓子の隣の椅子に座ると、繪もベッドの上でぺたりと割座になった。今日は文化祭ゆえ、梅郷中の生徒ではない繪にもローカルネットへの限定的接続が許可されている。また、

楓子は綸の《親》であり師匠でもあるので、もちろん自動観戦登録もしているだろう。

「あと十秒」

楓子が告げ、椅子の背もたれに体を預ける。ハルユキも楽な姿勢で加速を待つ。

ふっとベッドの上の綸に眼を向けると、指先で、ニューロリンカーのシエルに走る稲妻形のクラックを愛おしそうに撫でていた。

よかった、ともう一度思った次の瞬間、パシイイイッ！ という加速音が脳裏に響いた。

抜けるような青空から、燦々と降り注ぐ陽の光。それを受け止める地面もまた、見渡す限り青い。フィールド全体が水に覆われているのだ。

自然系、水属性の《水域》ステージ。《大海》ステージと違って、水の深さは十センチ程度なので、アバターは水没しないし大きな波も立たない。

建物は全て、陽に晒されて白くなったコンクリートの骨組みだけで、それらの隙間の水面をさあっと細波が渡っていく様子は、美しくもどこかうら寂しい。パーストリンカーの中には、《きれいな世紀末ステージ》と呼ぶ者もいるようだ。

高さ十数メートル、幅百メートルのコンクリートフレーム——梅郷中第一校舎の屋上に出現したハルユキは、冠水世界の光景にしばし心を奪われてから、きよろきよろ周囲を見回した。

ギヤラリーはどちらかの対戦者の周辺にランダム配置されるので、近くに楓子か黒雪姫がいるはずだが、二人ともなかなか見つからない。

ならばと視界下部に表示される二つの矢印カーソルを確認すると、どちらもハルユキの正面を指し示している。しかし前を見ても、だだっ広い無人の水面と化した校庭がきらきら光っているばかりだ。

「あれ、どこかなあ……もう学校の外に移動しちゃったのかな……」
コンクリートの端から身を乗り出しながらハルユキが呟くと――。

「リアル・ダウンだぜ」

そんな声が隣から聞こえた。校庭の向こうの街並みに集中しつつ、無意識的に訊ねる。

「なんですか、それ」

「決まってるだろYOU。リアルが《真》、ダウンが《下》、合わせて真下だっつうの」

「そ、それはちよっと違うような……」

「リアリー？　じゃあ英語で真下って何っーんだよ」

「えーと……ライト・アンダーとかかな……」

上の空の会話を続けながら、言われたとおりに校舎の真下を覗き込むと、向かい合って立つ二つの女性型アバターが見えた。片方はオニキスのような黒、片方はアクアマリンのような水色、間違いなくブラック・ロータスとスカイ・レイカー……

「——!?」

ぼつ、と顔を上げ、ばぼつ、と右を見る。

するとそこには、腕組みをして立つ、やや大柄の男性型アバターが存在した。

やたらめったら紙を打ったライダーズジャケットを着込み、頭には髑髏を模したヘルメット。自慢のアメリカンバイクにはまたがついていないが、日下部繪の《兄》である世紀末ライダー、アッシュ・ローラーでしか有り得ない。

彼は、マゼンタ・シザーの手によって分身たるバイクにISSキットを埋め込まれ、異様な半機械半生物と化したバイクに取り込まれてしまった。キットの精神干渉は現実世界の繪にも及び、妹を守るために、一時は自らポイントを全損する所まで決意したのだ。ハルユキたちが文化祭の真っ最中に無制限フィールドへ赴いた直接の理由は、アッシュと繪を助けるために他ならない。

黒雪姫たちの奮戦でISSキット本体は破壊され——詳細はこれから始まるミーティングで語られるだろうが——全てのキット端末も封印された。見たところ、アッシュ・ローラーからもキットの影響は完全に断たれたようだ。

「あ……あ……ア……」

アッシュさあああん！

と叫んで飛びつくべきシーンなのかもしれないが、直前にたつぷりと問の抜けたやり取りを

してしまったので、どうしていいのか解らない。googleの下で口をばくばくさせながら、そのまま棒立ちになっていると、

「おい、カラス野郎」

無限に広がる水没都市を見やったまま、世紀末ライダーはぶっきらぼうに言った。

「は、はい」

「どうやら、テメーには借りができちゃったみたいだな。だから、さっきのはノーカンにしてやる」

「は、はい？ さっきの……と言いますと？」

「決まってリング！ 現実側で、輪をハグしまくりやがったことだこのツルピカ野郎！」

「はっ、はいっ、すすすみませんお兄さん!!」

「フーズお兄さんだYOOOOU！ 言っとくがオンリー今回だけだかなテメー！ 次にまたハグりやがったらオレ様のマッシーンで轢きまくってウッスうーくすんぞ！ ウルトラ・シンだぞ！ 今のは罪のシンと薄いのシンをかけてんだかな、オレ様、メガ・クウウ

ル!!」

腕組みをしたまままくしたてるアッシュ・ローラーをしばし呆然と見やりながら、なんだかいろいろ台無しだよ……と思っていたら、

「アッシュー、鴉さーん」

十数メートル下の地面、いや水面から、楓子の声が届いた。

「あと五秒で降りてこないと痛くしますよー」

「い、イエッサー師匠！」

びしっと直立不動になってから、アッシュはそうつと真下を覗き込む。ギャラリーなのだからどんな高さから飛び降りようとダメージは受けないはずなのに、なかなか足を踏み出そうとしない。

「……何やってるんですかアッシュさん」

「いやあ、ウワサだとよお、水域ステージの水ん中には時々でつけえウミウシだのイソギンチャクがいるつつうからよお……オレ様、ウネウネ系はちよつと……」

「……………」

ハルユキは無言でアッシュの背中を押すと、一緒に校舎から飛び降りた。「ノオオ……ッ！」と両手足をじたばたさせながら落下した世紀末ライダーは、びたーんとうつぶせ状態で着水。その隣にふわりと降りると、楓子と黒雪姫に向けて頭を下げる。

「先輩、師匠、遅くなりました。みんなは……？」

「もう揃っているぞ。キミの後ろだ」

黒雪姫がそう言うので振り向くと、校舎一階部分のコンクリート構造物に、並んで腰掛ける六人の姿があった。

当然、全員のアバターは傷一つない。青空からの太陽光と、水面からの照り返しを受けて、半透過装甲がキラキラ輝いている。

仲間たちを見詰めながら、ハルユキは改めて、長く苦しい戦いが終わったことを噛み締めていた。

ISSキット本体は消滅し、加速世界に蔓延しようとしていた暗闇は打ち払われた。通常対戦フィールドではバーストリンカーたちが純粹に技と知恵と根性を競い合い、無制限中立フィールドではレギオンメンバーたちが巨大なエネミーに挑む日々が戻ってきたのだ。

しかし、その世界に《彼女》はいない。ハルユキに翼と勇気を与え、たくさんのことを教えてくれた、純白の天使はもういない……。

「さあ、そろそろ始めよう。通常対戦は三十分で終わってしまうからな」

白雪姫の声に、ハルユキは大きく息を吸い込むと、「はい！」と大声で答えた。

楓子と白雪姫は、まず校舎からコンクリートの塊を切り出すと校庭に並べた。

ミッシェンに参加した九人に、アッシュ・ローラーを足した十人が円座になって開始されたミーティングでは、まずハルユキがひたすら喋り続けることになった。

ニコを攫ったブラック・バイスを追って入り込んだ、加速研究会の本拠と思しき港区エリアの学校。

一度はバースに追いつくも見失い、途方に暮れるハルユキに語りかけてきた、大天使メタロン。

中庭での決戦。ウルフラム・サーベラスの乱入。サーベラスⅢこと能美コピーによる、ニコの強化外装の強奪。そして、空から降り注いだ赤い光と、災禍の鎧マークⅡの誕生――。

目まぐるしい展開をどうにかそこまで説明し、ハルユキがひと息入れた時、黒雪姫が揺れる水面に視線を落としながら呟いた。

「そうか……。つまり、私たちがISSキット本体を破壊したことで、蓄積されていた負の心意が研究会の本拠地に転送され、最悪のタイミングで新たな《鎧》を作り出してしまった……というわけなのだな……」

「あんたらのせいじゃねーよ、ロータス」

コンクリートの上であぐらをかくニコが、すかさず言葉を挟む。

「アルゴンのやつは、こう言ってたぜ。『幾ら何でも早すぎるやろ、まさか連中アレをやりよったんか』ってな。アレってのはISSキット本体で間違いないだろ。で、早すぎるってのは、心意エネルギー転送のタイミング……つまり加速研の奴らは、本体にもっともっとエネルギーを溜め込むハラだったってことだ。奴らの計画どおりコトが遅んでたら、災禍の鎧マークⅡはあたしらが戦ったヤツの二倍だか三倍だか、ヘタすりゃ十倍ぐれー強くなってたはずだ。あのタイミングで正解だったんだよ、どうにかこうにか倒せたんだからな。残念ながら、トドメは

刺せなかったけどな……」

「そうであれば少しは気が楽だが……しかし、こう言うてはなんだが、よくぞ倒せたものだ。ミッドタウン・タワーから虚無属性の爆発を見たが、あれはもう、強化外装のレベルを遥かに超えていたぞ」

白雪姫の発言に、真正面に座るニコはひょいと両手を広げた。

「まったくだ。帝城まで引つ張って四神にブツけりや倒せたんじゃないの、つてくらのモンだったからな……。あんたの《子》を褒めてやれよ、クロウがいなけりやあたしらは間違いないく瞬殺されてたぜ」

いきなりそんなふうと言われ、隣でパドさんもこくこく頷くので、ハルユキは慌てて両手を左右に振り動かした。

「い、いえ、みんなが最後まで諦めなかったからどうにか勝てたんです。僕ひとりだったら、最初から逃げてたかもです……」

「そう謙遜するな、ハルユキ君。今日のMVPは、間違いなくキミだ」

白雪姫に、優しい笑みを含んだ声でそう告げられた途端、胸の奥から温かな喜びが込み上げてくる。

だがハルユキは、もう一度軽くかぶりを振ると、ちらりと青空を見上げながら言った。

「ありがとうございます。でも……本当に、僕だけの力じゃないんです。僕に翼を貸してくれ

て、最後には一緒に戦ってくれた、大天使メタトロン……彼女がいなければ、絶対にマークIIは倒せませんでした……」

ハルユキが口を閉じて、しばらく反応する者はいなかった。

やがて発言したのは、これまで大人しく話を聞いていたアッシュ・ローラーだった。

「けどよおクロウ、そのメタトロンってのは、エネミーの親玉なんだろう？ ギガ・アンビリーパブルな話だぜ、エネミーが喋ったり、タッグ組んでくれるなんてよう」

「ええ……でも、メタトロンは、ただのエネミーじゃなかったんです。生まれた世界が違うだけで、僕らとまったく同じ魂を持ってた……そう、思えるんです」

再び、かすかな水音だけがステージを満たす。

皆が途惑うのも無理はない。無制限フィールドのエネミーは、パーストリンカーにとつては究極の敵だ。圧倒的な戦闘力で大規模パーティーを蹴散らし、時として無限E.K.によってポインツ全損にまで追い込む。

ことに、ミッドタウン・タワーを封鎖する神獣級エネミー大天使メタトロンは、今日のミッションの最終討伐目標だったのだ。そのメタトロンが味方してくれたと言われても、俄には信じがたいだろう……。

「あたしは信じるよ！」

と、いきなりチユリが勢いよく叫んだので、ハルユキは「えっ」と声を上げてしまった。

「だって、エネミーとパーストリンカーが仲良くなれるって実例をあたしも見てるもん！」

「実例……あ、そうか、《クルちゃん》か……」

四日前、チユリと一緒に訪れた無制限フィールドの世田谷エリアで、ハルユキはシヨコラ・パベツターというレベル4パーストリンカーと知り合った。彼女は、種族名《ラーヴァ・カーバンクル》なる小獣級エネミーと長い時間をかけて心を通わせ、ついには飼ひ慣らす、いや友情を結ぶに至ったのだ。

チユリに続いて、あきらもこくりと頷いた。

「私も、ごくまれにエネミーが非攻性化する例がある……という話は聞いているの。神獣級ほどの高位エネミーでは初耳だけれど、その相手がクロウなら……と思うと納得できる気もするの」

「クーさんだったら、《太陽神インティ》さんとも仲良しになれるかもなのです！」

謡の発言に、皆から明るい笑い声上がる。

それが収まったところで、今度は左隣のタクムが一度頷いてから言った。

「そうか……あの学校の中で、ハルの周りを飛んでた小さいアイコン、あれはメタトロンその人だったんだね……」

「ああ。オレたちを、道案内してくれたんだ」

「うそっ、あたし、虫みたいのと言っちゃった。今度会ったら謝らないと」

チュリが、申し訳なきように肩を縮めたところで――。

この会話が始まってからずっと我慢していた涙が、たった一粒ではあったがぼろりと零れた。鏡面ゴーグルの下なので、皆には解るまいと思ったのだが、右隣に座る楓子が顔を覗き込んでくる。

「どうしたのですか、鴉さん？」

「いえ、な、なんでも……ないです」

と答えた声は、か細く震えていて、気心の知れた仲間たちを誤魔化すことはとてもできなかった。仮想の涙を次々に溢れさせながら、ハルユキはチュリに言った。

「チュ……もう、それはできないんだ。メタトロンは……マークⅡを倒すために、自分自身を《トリスアギオン》の光に変えて……消えてしまったんだ」

静まり返る一同に、ハルユキは、不思議な《ハイエスト・レベル》での体験を訥々と語った。大天使メタトロンが見せてくれたもの。教えてくれたこと。

そして、彼女が見たいと望んだ、世界の最果てについて――。

ハルユキが、メタトロンの消滅までを語り終えると、たつぷり十秒以上も沈黙が続いた。

視界上部のタイムカウン트가、残り五百秒に達した時、黒雪姫がぼつりと呟いた。

「最後の神器、《ザ・フラクチュエーティング・ライト》こそ、加速世界の存在する理由……」

《ハイエスト・レベル》なる空間で、そうメタトロンは言ったのか……」

「もしそれが事実なら、誰かがレベル10に到達しても、世界は終わらない……ということになるわね」

楓子が応じると、黒の王はフェイスマスクをゆっくりと上下させた。再びの短い沈黙を経て、静かに話し始める。

「……私がレベル9になった時、視界に表示されたメッセージ・テキストは、正確にはこうだ。When you go up to the next level, you will meet the CREATOR and realize the true purpose of BRAIN BURST, true meaning of the WORLD……次のレベルに到達すれば、お前は製作者と出会い、ブレイン・バーストが存在する真の目的と、世界が存在する真の意味を知るだろう」

「確かに、誰かがレベル10になったらそれでゲームがクリアされる……とは書いてなかったんだよね……」

同じメッセージを見ているニコが、わずかな怒りを滲ませた口調で言う。

「……けど、クリアされねーんなら、なんで《レベル10》にそこまで大きな意味を持たせるんだ？ 同じレベル9を五人も全損させなきゃ10にはなれねえっていう重すぎる条件に、どんな意味があるんだよ……？」

「……解らん。真実は、製作者とやらの訳くしかないが……しかし、ハルユキ君の話を聞いた

あとだと、以前とは異なる印象も受けるな。製作者は、レベル10に到達する者の出現を望むいっぽうで、恐れてもいるような……そんな気がする……」

黒雪姫の言葉に、ニコも低く唸る。

胸を突き刺す喪失感に耐えながら、ハルユキはぼつりと呟いた。

「もし製作者が恐れているなら、それは、二つの世界の……《アクセル・アサルト2038》、《コスモス・コラプト2040》の稼働停止と関係があるのかもしれない。三つのゲームの製作者が同じだとすれば、彼……彼女かもしれないけど、その人にはもう僕らの《プレイン・バースト2039》しか残ってないわけです。たとえば、誰かがレベル10になることで、ゲームの最終ステージみたいなものが始まるとすれば……」

ハイエスト・レベルで、メタトロンは言っていた。

ずっと昔は、二つの平行世界でも、たくさんの星たちが輝いていた。でも、その光は少しずつ減り続け、やがて全部消えてしまったのだ、と。

ことによると、二つの世界ではハルユキたちの世界より一足先に《結果》が出たのだ。誰かがレベル10になり帝城攻略に挑んだのか、その前に全員がポイント全損してしまったのかは解らない。

しかし少なくとも、この世界もまた同じ道を辿る可能性はある。誰もが最果ての光に辿り着けないまま、暗闇に吞まれて消えてしまう……という可能性が。

黙り込むハルユキの右手に軽く左手を触れさせながら、楓子が落ち着いた声で発言した。

「……緑の王が、アクセル・アサルトとコスモス・コラプトという二つの《試行》について語ったという話は、少し前に鴉さんに聞いていましたが……こうなると、より詳細な情報を得る必要があるそうですね。アッシュ」

突然呼びかけられたアッシュ・ローラーが、びくーんと背中を伸ばす。

「は、はいエッス師匠！」

「近々、グランデとの会談をセッティングして下さいな。場所は任せるけど、中立のエリアが望ましいわね」

「り、りようかイエッス師匠………って、ぐ、ぐぐぐグランデって、もしかしてウチのレギマスのことッスか!? ままママ……」

「マジリアリーよ。お願いね」

と、楓子につっこり微笑みかけられれば、さしものアッシュも「ギガ・インポッシブル!!」とは言えない。石化する世紀末ライダーを見ながら、ハルユキがようやく口許を綻ばせかけた

その時。

いずこからともなく、声が聞こえた。

「それには及びません、バーストリンカーたち」

幼い少女のように甘く、高潔な聖女のように清らかで、高貴な女王のように厳かな響き。

音の成分はメタトロンの声と似通っているのに、本質はまったく違うと確信できる。と言うより、声の本質であるべき発言者の心がまったく感じられない。硬く、冷たく、滑らかな壁が、共感を完全に拒絶している。

いったい誰が……と周囲を見回そうとして、ハルユキは黒雪姫の異変に気付いた。

《絶対切斷》の二つ名を持つ黒の王は、先刻のアッシュ・ローラー以上に、全身を固く凍り付かせている。ゴーグルの奥のアイレンズには異様な光が浮かんでいるが、それがいかなる感情の発露なのかはハルユキにも読み取れない。

かつて、こんな黒の王は見たことがなかった。にもかかわらず、ハルユキはアバターに宿る、生身の黒雪姫の表情が見えるような気がした。

それはきつと、驚愕と、敵意と、恐怖。

刹那、ハルユキは悟る。いや、思い出す。

——さっきの声を、僕も、聞いたことがある。

直接ではなく……夢の中で。帝城の中で共有した、クロム・ファルコンの記憶の中で。

「……………校舎の上だ！」

ニコが叫び、黒雪姫を除く全員が、コンクリートの椅子から飛び降りると同時に北の空を振り仰いだ。

梅郷中第一校舎の屋上中央部には、階段ホールを収容するためのペントハウスが突き出ている。その上に、誰かがいる。

デュエルアバターではない。華奢な体を純白のサマードレスに包み、長い金髪を微風になびかせる、一人の少女。しかし顔は、仮面舞踏会に使うようなプラチナシルバーのマスクに覆われて見えない。

対戦フィールドに生身の女の子が……？ と一瞬途惑ってから気付く。あれは観戦用タミニアバターだ。つまり、黒雪姫と楓子が開始した対戦に、ハルユキたち以外のバーストリンカーがギャラリーとして紛れ込んでいたのだ。

「誰だ、てめえ!!」

再び、ニコの鋭い声が飛ぶ。赤の王の詰問を受けても、純白の少女は微動だにしない。ペントハウスの端に立ち、両手を体の後ろで組み合わせている。

水域ステージにやや強い風が吹き、少女の金髪とドレスを大きく揺らした。優美で繊細な手足のラインは、とてもポリゴンとは思えない。

背中に蝶の翅はないし、色合いもまったく異なるが、黒雪姫が学内ローカルネットで使っている黒ドレスのアバターと雰囲気がよく似ている。ハルユキの脳裏に一瞬、《白雪姫》という

言葉が浮かぶ。

広大な水面を渡る細波が収まると、目鼻を覆う薄手の金属マスクの下で、優美な唇が小さく動いた。

「私の名前は、あとでロータスに聞いてください。いまは、もっと大切な話をしましょう」

黒の王を——ロータスと呼んだ。

ハルユキは、もう一度ちらりと黒雪姫に視線を送った。ただ一人即席の椅子に留まる漆黒のアバターは、剣状の手足を交差させたまま身動き一つしていない。

いや、一箇所だけ……右手の剣の切っ先だけが、ごくかすかに震えている。その振動が怯えを表しているのか、それとも怒りの表れなのか、ハルユキには判断できない。

視線を校舎の上に戻すと、謎の少女はマスクに隠された両眼でまっすぐにハルユキを見返し、歌うように言った。

「アクセル・アサルト2038、そしてコスモス・コラプト2040。二つの世界が死に絶えてしまった理由……それは、どちらの世界も、偏りすぎていたからです」

「……偏り……？」

タクムが、警戒と関心を半分ずつ含んだ声で問い返す。

「そう。AA2038は過剰な闘争に……そしてCC2040は過剰な融和に満たされていた。言い換えれば、AA世界では自分以外の全てのプレイヤーは常に敵であり、CC世界では常に

味方だったのです」

黒雪姫の様子が気にかかるいっぽう、ゲーマーとしてのハルユキは、少女の言葉を反射的に解釈してしまう。

アクセル・アサルトは、いわば自分以外が全て敵モードだけのゲーム。そしてコスモス・コラプトは、自分以外は全て味方モードだけのゲームだったのではないか。

だとすれば、確かにどちらも偏っている。全てのプレイヤーが敵とも味方ともなり得るプレイン・バースト2039と比べれば。

しかし、その偏りが世界を滅ぼした……とはどういう意味なのだろう。AA世界だけならば解る。プレイヤー同士が常に殺し合っていれば、最後にはたった一人しか残らないのは自明のことだ。しかし、全プレイヤーが協力してクリア目標に当たっていたはずのCC世界までもが、同時期に衰亡してしまったのはなぜなのか。

校舎上の少女は、ハルユキの疑問を見透かしたかのように、澄んだ声音を発した。

「過剰な融和、過剰な協調……それらが生み出すのは加速ではなく停滞です。CC世界の時間は停止してしまっただけ。それゆえに滅んだ……。その意味では、あなたたちの愛するこの世界も、少しづつ流れが淀み始めているのかもしれないですね」

言葉の最後に、少女はふふつと微笑みを滲ませた。

その甘い響きに、ハルユキは再び強く記憶を刺激される。

帝城でハルユキとシンクロしたバーストリンカー、クロム・ファルコン。彼が初代クロム・ディザスターになってしまったのは、最愛のバートナーであるサフラン・プロッサムを、目の前で何度も何度も殺されたからだ。しかも、地獄の長虫と恐れられる神獣級エネミー「ヨルムガンド」を使った無限EKによって。

あの惨劇を仕組んだのは、加速研究会のブラック・バイスとアルゴン・アレイ。そしてその場にもう一人……不思議な光に包まれて姿は見えなかったが、バイスたちよりも上位の誰かがいた。甘く、清らかで、厳かな声の持ち主が。

「……まさ、か……」

ハルユキが掠れ声を絞り出したのと、ほぼ同時に。

これまで身動きすらしなかった黒雪姫が、昂然とフェイスマスクを持ち上げた。

座った姿勢から高々とジャンプし、後方宙返りを決めると、コンクリート塊の上にカッと音を立てて着地。右手の剣の切っ先で、校舎上の少女を照準する。

「——それが理由だとしても言うつもりか！」

いかなる刃よりも鋭い、苛烈な叫び声。

だがハルユキは、黒雪姫の凜とした声と、謎の少女アバターの甘い声に、少しだけ共通する響きがあることに気付く。

「ISSキットなどという代物をばら撒いておきながら、そのふざけた言い草で正当化しよう

「いうのか！」

掲げた剣を、猛然と斬り払い――。

黒の王は、その名を叫んだ。

「答えろ!! 白の王……そして加速研究会会長、ホワイト・コスモス!!」

水域ステージの風が、止まった。

太陽は光を弱らせ、水面は鏡のように風いだ。青く澄み渡っていた空を、分厚い黒雲が閉ざしていく。プリセットされている天候変化イベントに過ぎないはずなのに、まるでステージそのものが怯えているかのようだ。

たちまち墨色に染まった空を、紫雷が生き物の如く這い回る。低く轟く雷声が、足許の水面に細かい波紋を呼び起こす。

白の王、ホワイト・コスモス。

《惨き永遠》の二つ名を持つ、白のレギオン（オシラトリ・ユニヴァース）の頭首。黒の王の《親》にして、実の姉。赤の王レッド・ライダーが作った和平の象徴たる銃（セブン・ローズ）を究極的な破壊兵器だと黒雪姫に思い込ませ、七年半前の惨劇へと駆り立てた張本人。ハルユキが参加した七王会議では常に代理人を立て、ただ一人姿を見せなかった純色の王が、

同様にこれまでずっと謎に包まれていた加速研究会のリーダーと同一人物であると、黒雪姫はそう言ったのか。

「そんな……………」

ハルユキの喉から零れた声は、自分にも聞こえないほど細く震えていた。

他の八人も、驚きの度合いは様々だった。最大級の驚愕を表現したのはアッシュ・ローラーで、「嘘だろ……………」とアッシュ語なしで呻く。

しかしいつばうでチユリが「やっぱり」と呟くので、ハルユキはほんの少しばかり思考力を取り戻し、幼馴染に問いかけた。

「やっぱりって……………どうして……………」

「あのね、あたしたちが入り込んだ加速研の本拠地……………旧東京タワーから南西に二キロくらい
の場所だったでしょ？ それって、先輩が言ってた、白のレギオン本拠地の女子校とほとんど
同じ場所なの」

チユリの言葉に、楓子が小さく頷いた。

「そのとおりよ、ベル。わたしたちも、ミッドタウン・タワーから移動している時に気付いた
の。白のレギオンこそが加速研究会の隠れ蓑……………このミーティングの最後に知らせるつもりだ
っただけ……………」

「まさか白の王自身が現れるとは、私も予想してなかったの」

あきらの囁き声に、謡も「……なのです」と付け加える。

雷雲をバックに佇む少女アバターは、黒雪姫の糾弾を受けても沈黙を保っている。サマードレスの裾と長い金髪が、強く吹き始めた冷たい風に大きく煽られる。

最後に反応したのは、赤の王スカーレット・レインだった。

校舎に向かって一歩、二歩進み出ると、強烈な熱を内包した声を投げ掛ける。

「……てめえか……てめえが全ての黒幕だったのか。ISSキットだけじゃねえ……災禍の鎧ザ・ディザスターを作って、何人ものバーストリンカーに次々寄生させたのは、てめえの仕業だったのか、ホワイト・コスモス!!」

屋上の少女に突き付けた右手から、真紅のオーラが炎のように立ち上った。

ニコは、《親》であるチェリー・ルークを、自らの《断罪の一撃》によって全損退場させている。その理由は、ルークが五代目クロム・ディザスターとなり、他レギオンの所属メンバーを無差別に襲撃したからだ。

ルークに災禍の鎧を渡したのは黄の王イエロー・レディオだが、彼のその行動すらも、恐らくは加速研究会の見えざる手にそれとなく誘導された結果ではあるまいか。加速世界の黎明期から、白の王やブラック・パイスは、悲劇の種を連綿と撒き続けてきたのだ。

全身を怒りの炎に包むニコを、プラチナ色のマスク越しに見下ろしながら、少女は長い沈黙を破った。

「あなたには、何度も辛い役回りを強いてしまいましたね、新しい赤の王。ですがそれも、あなたの力を認めた証……などと言っても、もちろん許してはもらえないでしょうけれど」

「あっ……たりめえだ！ 積もり積もった借りは百倍にして返してやるよ!!」

「あなたが、真にそれを望むのでしたら……」

にこりと無垢な微笑を浮かべ。

少女——白の王ホワイト・コスモスは、幼な子をあやすような口調で言った。

「私はたつたいま、現状の通常対戦モードから、バトルロイヤル・モードへの変更に応じましょう」

言葉の意味を理解するのに、半秒ほどを要した。

確かに、一対一の通常対戦は、全ての観戦者が同意すればステージ内の全員が対戦者となるバトルロイヤルに切り替えることができる。いまは体力ゲージを持たない赤の王と白の王が、直接戦えるようになるのだ。

しかし——。

「……てめえ、本気か。そのナリであたしらと戦えるって、マジでそう言ってやがるのか」
ニコの言うとおり、白の王はいま、観戦用ダミーアバターを使って対戦ステージにダイブしている。

ダミーの戦闘能力は、レベル1の新米にすら遠く及ばない。また、デュエルアバターへの

切り替える、現実世界でBBコンソール画面の操作が必要だ。

実質的に可能なのはひたすら逃げることだけだが、《水域》ステージの建物は骨組みだけで死角が少ない。いかに白の王とはいえ、王二人とハイランカー四人を含む十人を相手に、残り時間百二十秒を逃げおおせることは難しい……………

いや。違う。恐らくダミーアバターの身でも行使できる力が、加速世界には存在する。心意システム。

それが、白の王の自信の源なのか。心意が使える、ダミーアバターでもタイムアップまで逃げ切れると…………いや、もしかしたら、勝利できるとすら考えているのだろうか。

解らない。ホワイト・コスモスの思考をトレースできない。

王がこんなふうに、あたかもいつときの気紛れの如く他の王との戦いに臨むなどということ、本当に有り得るのか。白の王は、サドンデス・ルールに縛られたレベル9erだ。防御力が紙にも等しいダミーアバターで戦って、仮に同じレベル9である黒の王か赤の王に敗れば、その瞬間にポイントを全損してしまうのだ。

なぜ。どうして。なにゆえにああも気負いなく、肅然と立っていられる。

「……コスモス……………」

黒雪姫が、軋むような声で《親》の名を呼んだ。

左手が閃き、インストメニューにアクセスする。あとはボタンをたった三回押せば、それで

バトルロイヤル・モードへの変更オフアールが全員の前に出現する。

——これは罠か。

——それとも、千載一遇の機なのか。

宙に掲げた左手を小刻みに震わせる黒雪姫に、楓子も、あきらまも、諷も、言葉をかけようとしなかった。レギオンマスターの決断にただ従うのみという覚悟が、《四元素》たちの全身から無色のオーラとなって放射されている。

突然。

ハルユキの背中中、今はもう存在しない白翼が、ぴりりと振動した——気がした。

無制限フィールドで何度か感じた感覚。メタトロンからの、警告。

その感覚が幻と解っていてなお、ハルユキは瞬間的に大きく一歩飛び出すと、黒雪姫の左手の下に自分の右手を差し入れていた。同時に、屋上に佇む少女に向けて、ありったけの勇気をかき集めながら叫ぶ。

「白の王!! あなたの申し出はフェアじゃない!!」

思考経路を何段階もすっ飛ばした、ほとんど本能的な言葉だった。

「……なぜ、そう思うのですか、シルバー・クロウ?」

ホワイト・コスモスに名前を呼ばれた瞬間、ぞっとするほどのプレッシャーがアバターの芯を垂直に貫くが、懸命に両脚を踏ん張りながら言葉を続ける。

「それは、あなたの手下のブラック・バイスが、赤の王の強化外装を一つ奪ったままだからだ！ 謝罪のために戦いに応じると言うのなら、まずそれを返すべきだ！」

黒雪姫を含む全員が、少々驚いたような顔でハルユキを見た。

いっぽう、屋上の白の王は、マスクの下で淡く微笑んだ。

「なるほど。解るような解らないような理屈ですが、その要求には残念ながら応じられませんね。あの《鎧》は、私にとっても大切な希望なのです。またしてもあなたたちに浄化、還元させられかけたところを危うく回収したと聞いて、どれほど安堵したことか」

「……………希望？ 希望だって…………？」

戦いを止めるために出しやばった身ではあるが、白の王の言い草を聞いた瞬間、自分の中にも巨大な怒りの炎が湧き上がるのをハルユキは感じた。

「ISSキットでたくさんの人たちを苦しめて…………メタトロンをお城から引つ張り出して…………全損したバーストリンカーをゾンビみたいに操って…………レインから強化外装を無理やり奪って…………サーペラスにも、あんなに辛い役回りを強制して…………その結果出来たモノが、希望だと、あなたは、そう言うのか!!」

喉を引き裂かんばかりに叫びながら、ハルユキは瞬間的な思考を重ねていた。

——それだけじゃない。白の王と加速研究会が生み出した悲劇は、そんなものじゃない。

クロム・ファルコン。サフラン・ブロッサム。《獣》。歴代のクロム・ディザスター。初代

赤の王レッド・ライダー。

そして、黒の王、ブラック・ロータス。

三日前、黒雪姫は、ハルユキの肩に顔を押し当てて泣いた。白の王に操られるまま手を友の血に染め、友情を打ち捨て、レギオンまでをも崩壊させた過去を悔やんで泣いた。

その涙を見て、ハルユキは誓ったのだ。いつか白の王と対峙する時が来たら、言わねばならないと。妹を騙して泣かせて家から追い出すなんて、それがお姉さんの、《親》のすることか——そう言っただけだ。

わななく胸に空気を吸い込み、ありったけの声で叫ぼうとした、その寸前。

黒雪姫が、左手の剣を、そっとハルユキの右肩に置いた。同時に、かすかな声。

「……クロウ」

それだけで、ハルユキには黒雪姫の意思が伝わった。

今はまだ、その時ではない。

白の王との決戦には、相応しい時と場所がある。

「……はい」

頷き、ハルユキはどうか怒りを呑み込むと、一歩下がった。入れ替わりに前に出た黒雪姫は、先刻までの張り詰めた気配を凜とした決意に変えて、白の王に向けて宣言した。

「コスモス。お前の希望は、お前以外の全てのバーストリンカーにとっては絶望そのものだ。」

きつと、パイスやアルゴンにとってもな」

「……そうかもしれないわね。でも、ならばどうだというの、ロータス？」

あくまでも穏やかな問いかけに、黒雪姫もまた静かに答えた。

「お前には取るに足りないことかもしれないが、我々にも希望はある。お前が名前も知らないたくさんのパーストリンカーたちが、それぞれの希望を抱いて懸命に戦っている。お前がいかにかんじ、弄び、踏みにじろうとも、我々の……全パーストリンカーの希望は決して消えない。小さな火が集まり、巨大な炎となって、いつかお前たちが振りまく冷たい絶望を残さず焼き尽くす」

敢然と言い切った黒の王の全身から青紫色のオーラが燃え上がり、足許の水面を激しく波立たせた。

闘気と呼応するように、空を埋め尽くす黒雲から立て続けに雷が降り注ぎ、第一校舎の各所を直撃する。屋上ベントハウスに立つ白の王のすぐそばにも落雷したが、少女のシルエットは微動にしない。

轟く雷鳴の中、《親》たる姉から《子》たる妹に手向ける言葉が甘く響いた。

「強くなったのね、ロータス。楽しみだわ……あなたが、あなたの意思によって、私の前に立つ時が……」

降り始めた雨が、少女の姿を滲ませる。



不思議な光の粒子にその身を包みながら、白の王ホワイト・コスモスは、歌うように言った。
「それまで私は、いましばし蝶夢に微睡みましよう。さようなら、パーストリンカーたち。
お話できて、楽しかったですよ……………」

強く降りしきる雨の向こうで、少女の体が小さな光の蝶に変じた——ような気がした。
蝶は雷鳴轟く空へと舞い上がり、たちまちのうちに見えなくなった。

直後、タイムカウントがゼロに到達し、ハルユキの視界にタイムアップを告げる炎文字が赤
赤と燃え上がった。

6

もう立ち上がれると綸が言うので、三人で堀田教諭に挨拶してから保健室を出た。

人気のない廊下を、ハルユキはしばし無言で歩いた。渡り廊下に繋がる正面玄関の手前で立ち止まり、傍らの楓子を見上げて、小声で謝罪する。

「あの……出しやばってすみませんでした、師匠……」

「謝らなくてもいいのよ、鴉さん」

あの楓子にして、いまだ緊張の色が去らない口許に、淡い笑みが浮かぶ。

「むしろ、白の王との戦いを止めてくれたことを感謝するべきでしょうね。いざ開戦となればもちろん全力を尽くすつもりでしたが……あの状況でも、勝率は三割あったかどうか、というところでしょう」

「えっ……」

十対一で、しかも向こうはダミーアバターだったのに、という驚きをこめてハルユキが喘ぐと、左隣でハルユキのシャツの裾を掴む綸がぼつりと言った。

「あの人……なんだか、同じバーストリンカーだと思えなかった……です。デュエルアバターじゃなかったからかもしれません、けど……それよりも、もっと……まるで……」

言葉を探して俯く輪に代わって、楓子が呟いた。

「まるで、違う時間の流れの中にいるような」

「あ……はい、そんな感じ、でした」

言われてみれば、白の王には確かにそんな気配があった。バトルロイヤル・モードへの変更を自ら提案しておきながら、どこか他人事のような……対戦フィールドをずっと遠い場所から見下ろす、観察者のような雰囲気最後まで漂わせていた。

「……………いたい、何のために現れたんでしょう……………」

少女アバターの謎めいた言動を思い出しながら、半ば自分に向けて問いかける。

「僕たちのミーティングを盗み聞きするとか、そんな目的じゃなかった気がするんです。だってあの人は、僕らよりもずっとたくさんのことを知ってるみたいだったし……AA世界とCC世界が終わってしまった理由まで……」——それに、そもそも、どうやってあのステージに……………」

そこまでを口にしてから。

ハルユキはようやく、真っ先に気付き、対処せねばならなかった一つの事実に思い至り、声を上げた。

「あっ……………！ た、た、大変です師匠！ さっきの対戦、学内ローカルネット経由でしたよね！」

すると楓子は、なぜかやや微妙な表情で、「そうですよ」と頷く。

「つてことは、ローカルネットには校内からしか接続できないんだから、つつつまりしし白の王の本体が、いまこの学校のどこかに……」

マキシマムにデンジヤラスでクリティカルな事実を開示したつもりだったのだが、楓子に加えて繪までが表情を複雑化させ、ハルユキが「アレッ」と首を傾げていると。

「おいおい、今更そんなことを言っているのか、ハルユキ君」

という声が左方向から聞こえた。顔を向けると、黒雪姫やあきら、ニコにバドさんたち七人が玄關から第二校舎に入ってくるどころだった。どうやらあちらも生徒会室から移動してきたらしい。

黒雪姫に続いて、ニコが素直な呆れ顔で言った。

「あのなあハルユキ、そんなの対戦ステージにあんにやろうが出てきた時点で気づけよ。そんな対戦が終わった瞬間にマツチングリスト見とけよ」

「……は、ハイ……でも、つていうことは、もう確認済み……?」

「ああ。そして、リストには我々以外のバーストリンカーは存在しなかった」

第二校舎の廊下をハルユキたちの所まで歩いてきた黒雪姫は、表情を引き締めるとそう言った。

「いない……つてことは、ニューロリンカーの接続を切ったんでしょうか……」

ハルユキの推測は、しかしあっさりとは否定される。

「いや、違うな。あいつは、自分のレギオンの領土からリモート接続していたのだろう」

「えっ!? うちのローカルネットに外部から……!? できるんですか、そんなこと」

「できない、と言うよりさせないさ。……普段なら、な」

梅郷中学校の基幹システムを掌握する副生徒会長は、悔しげにひと言付け加えると、背中を廊下の壁に預けた。

「……だが、文化祭が開催されている今日だけは、一般客を接続させるために防壁のレベルを下げざるを得ないのだ。あいつのスキルと権限なら、ネットワークのどこかに穴を開けて潜り込むことは可能だろう……無論、明日からは決してそんな真似はさせん」

権限、と黒雪姫は言った。それはもしかしたら、港区にあるという黒雪姫の生家は梅郷中を運営する企業と何らかの関係があるという意味なのかもしれないが、今は問い質すわけにもいかない。

代わりにハルユキは、黒雪姫にもべこりと頭を下げ、言った。

「あの、先輩。さっき、いきなり割り込んですみませんでした……」

「ん、いや、キミが謝る必要はないさ」

淡い苦笑を浮かべつつ楓子とはば同じ言葉を口にする、黒雪姫はハルユキの左肩にぽんと右手を置いた。

「あの時、バトルロイヤルへの切り替えボタンを押すか否か、私は激しく迷った。迷いがあるのなら、今はまだ戦うべき時ではなかったのさ……」

剣の主の物腰が、案外と普段通りであることに、ハルユキは少しの驚きとずっと大きな嬉しさを感じた。

白の王の出現は、黒雪姫にとってもまったく予想できない出来事だったはずだ。自分を操り、裏切り、追放した実の姉との対面に、まったくの平常心でいられたとは思えない。

八ヶ月前、パーストリンカーになったばかりのハルユキに向けて、黒雪姫は言った。

——その者は、かつて私にとって、最も近い人間だった。私の世界の中心で永遠に明るく輝き続け、あらゆる暗闇や寒さを遠ざけてくれると、そう信じていた。

——ある日、ある時、ある一瞬をもって、私はそれが儚い幻想であったことを知った。今やその者は、私にとって究極の敵と言っている存在だ。

それ以降も、白の王について語る時はどうしても心を乱されずにはいられないようだった。しかし今日、ついに宿敵と遭遇した黒雪姫は、怯えや恐れを振り払って堂々と胸を張り、毅然とした言葉で来るべき戦いを宣言した。

レベル9の王である黒雪姫も、決して立ち止まっていけないのだ。もっと強くあらんと願い、自分を鍛え、前に進み続けているのだ。

かつて黒雪姫はこうも言った。実の姉である白の王は、現実世界で自分に巨大な影響力を

行使できる。戦うならば、その事実が呪いとなって剣を縛るだろう。

しかし、バーストリンカーにとっては絶対的とも思えるその障害も、いまの黒雪姫ならばきつと乗り越える。レギオンの先頭に立って、雄々しく皆を導いてくれるに違いない。

自分の肩に置かれたままの黒雪姫の手をそつと両手で包み、ハルユキは言った。

「その時までには、僕ももつともつと強くなります。決戦のフィールドで、先輩の背中を守るくらい、強く」

「……ああ。頼りにしているよ、ハルユキ君」

こんな時、いつもだったらすかさず茶々を入れてくるであろうチュリやニコも、他の六人と同様に穏やかな微笑みだけを浮かべていた。輪の中心でしっかりとハルユキの手を握り返した黒雪姫は、もう一度深く頷くと、皆を見回しながら言った。

「さて、みんな、激戦続きでお腹が空いただろう。屋台で色々仕入れて、ヒミツの特等席でお昼にしよう」

連れ立って校庭の模擬店を回り、焼きそばやお好み焼き、じゃがバター等々の定番メニューから、タコス、フアラフェル、サモサといった変わり種、デザートにチュロスやら鯛焼きやらともちろん飲み物も人数分仕入れた一行を、黒雪姫は誰も予想しなかった場所——第二校舎の屋上へと案内した。

ハルユキにとっては、いい思い出のない空間だ。

一年生の二学期まで、同じクラスの男子生徒三人にたびたびここに呼び出されては、パンやジュースを奢らされたり、理由もなく殴られたりしていた。やつと解放された後は、昼休みが終わるまで誰もこない場所にある男子トイレの個室に籠り、ローカルネットの一人用スカッシュ・ゲームで空腹を紛らわせた。

黒雪姫の手助けによって虐めは突然終わり、それ以来ほとんど思い出すこともなかったが、あの地獄の日々を忘れたわけではない。小さく押し固めた記憶の球を、心のどこか深いところに埋めて、存在しないふりをしてきただけだ。

皆の後について屋上を歩きながら、いつしか惰怠していたハルユキは、足許のコンクリートに覚えのある雨染みを見つけて立ち止まった。

あの頃も、連中に呼び出された日は、いつもここでいったん足を止めていた。この染みから先は、ソーシャル・カメラの監視範囲外。一步踏み出せば、理不尽な暴力以外のルールは全て消滅する。

黒雪姫は、どうしてこんな場所を《特等席》にしたのだろうか？　そもそも、ここから、いったい何が見えるというのか……？

「ハルユキ君」

不意にすぐ傍から呼びかけられ、ハルユキは慌てて顔を上げた。

すると、一同の先を歩いていたはずの白雪姫が、雨染みのすぐ向こうに立ち、微笑みながら右手を差し出していた。半ば無意識的にその手を取ると、ぐっと強く引つ張られ、ハルユキは染みを踏んで一歩前に出た。

最初に見えたのは、太陽光発電用ナノワイヤーパネルの隣に敷かれた大判のレジヤースhirtだった。特等席とはあの場所のことだろうか。だが、座っても眺められるのは中庭の木々と、第一校舎の北壁くらいだ。

しかし直後、ハルユキは、ソーラーパネルの近くに存在するのがシートだけではないことに気付いた。

細い金属のポールが、床面からによつきり伸びている。見上げれば、先端についているのは照明灯ではなく、青みがかった光沢のある、直径十五センチほどの黒い球体。ソーシャル・カメラ。

「えっ……どうして……あんなところに、カメラはなかったはずなのに……」
 呟いたハルユキに、隣に並ぶ白雪姫が囁きかけた。

「たいぶ時間が掛かってしまったが……もうこの学校に、裏庭や中庭を含めてカメラの死角は一平方メートルたりとも存在しない。キミに、それだけ教えたくてな……」

「……………」
 すぐには、言葉を返せなかった。

並んで立つハルユキたちに、なにがしかの事情があることを察したのだろう。他の八人は、上履^{うわば}きやスリッパを脱いでレジャーシートに上がると、わいわい言いながら昼食を並べ始める。その様子をぼんやり眺めながら、ハルユキは考える。

ソーシャル・カメラは、政府が国民を——小中学校の内部までも含めて——厳重に監視するべく設置、運営している、決して善なるものとは言えないシステムだ。学校内のカメラを嫌う教師も少なくない。

そういう教師たちは、虐め行為^{いじめ}の抑止をソーシャル・カメラなどに頼らず、生徒の自主性に任せるべきと主張する。言い換えれば、カメラの死角に連れ込まれても自分の力で抵抗しろ、ということだ。

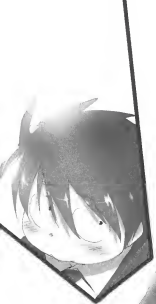
でも。現実的には、カメラの死角こそが虐めを、悪意や暴力による人間性の否定を生み出している。虐められる生徒が最初から存在せずに済むのならば、それは教師たちのこだわる学校の独立性よりもずっと意味のあることだとハルユキは思う。

「……これからはもう、誰もあんな思いをしなくていいんですね」

ハルユキがようやくそう言うのと、黒雪姫は力強く頷いた。

「ああ。私が生徒会役員でいるうちに、どうしてもこれだけは実現しなかったんだ。……さ、お昼にしよう。いつまでも皆を待たせては可哀想だからな」

「……はい！」



湧き上がってくる色々な感情を込めた声で答えると、ハルユキは黒雪姫と一緒に、仲間たちが待つ場所へと歩いた。

たっぷりと用意したはずの昼食は、わずか二十分でレジャーシート上から跡形もなく消滅してしまった。

「はー、食った食った……」

両足を前に投げ出したニコが、赤いTシャツ越しに、あれだけ食べた質量がどこに消えてしまったのかというくらい細いお腹を撫でる。

「外でメシつてのもいいモンだな。今度、どっか公園でピクニックしよーぜ。たしか都庁のほうに、でっかいやつがあったろ」

「た、確かにありますけど、あそこは青のレギオンの領土ど真ん中ですよ」

慌ててそう注釈するタクムを、ニコはじろりと横目で見ると、

「あのなあハカセ、ピクニックの時くらいネット切ればいいだろ！」

更に諺が空中に指を走らせる。

「UIV いっそピクニックを土曜日にして、お食事のあとにみんなで青の領土に攻め込むのも楽しそうなのです」

「ま、待ったうーい、それでは杉並エリアが空っぽになってしまふぞ」

白雪姫が慌てて割り込むと、残る女性陣が明るい声で笑う。その中にはもちろん、日下部編輯の笑顔もある。

本当によかった、という安堵を改めて噛み締めるいっぽうで、胸の深いところに幾つかの棘が抜けずに残っているのを感じる。懸念の一つは、白の王と対峙した時に図らずも口から出たとおり、ニコの強化外装を全部は取り戻せなかったことだ。

ホワイト・コスモスは、サーベラスが持ったままのスラスタ・ブロックを《鎧》と呼び、大切な希望なのと言った。それはつまり、加速研究会の企みはまだ終わっていないということだ。サーベラスと《鎧》を使って、新たな……もしかしたらISSキット事件よりも巨大な混沌を生み出そうとしているのかもしれないということだ……。

「浮かない顔なの」

いつの間にか右隣に座っていたあきらが、そんな声とともに紙コップを差し出してきた。

「あ、いえ、その……ありがとうございます」

とりあえずお礼を言っただけでコップを受け取り、ウーロン茶を一口飲む。仰向けた顔を戻すと、いつの間にか全員の視線が集まっていた、思わずそのまま下を向きそうになる。

「ハルユキ君、まだいくら時間があるから、言いたいことがあれば言っていーいぞ？」

白雪姫にそう促され、内心でハテナんの時間だろうと思いつつも、こくりと頷く。

「えっと……僕、どうしても、気になっちゃって……ニコの強化外装を一つ取り戻せなかった

ことが……」

言いながら上目遣いにニコを見やると、赤の王はぱちくりと瞬きを返す。その反応が予想外で、ハルユキは思わず言葉を重ねてしまう。

「だ、だって、赤のレギオンも領土戦があるだろうし……スラスターがないと、ヘインピンシブルは召喚できないんじゃないや……？」

するとニコは左隣のパドさんと顔を見合わせ、二人揃ってもう一度ハルユキを見た。結んだ赤毛の片方をくいくい引つ張りながら、ニコは少しばかり申し訳なさそうに、

「いや、できつけど」

「……………え？」

「だから、スラスターなくても、他のパーツだけで召喚できつけど……」

「……………で、できるの？」

あんぐり口を開けるハルユキに、赤の王は困り顔を膨れっ面に変えてまくし立てた。

「つーか、あたしから強化外装奪ったダスク・テイカーのパチモンが、ミサイルポッドなしの四パーツだけを装着してたじゃねーかよ！ その時点でフツー気付くだろ！ いいか、インピンシブルはコクピット・ブロックを中心にしたアタッチメント型強化外装だから、コクピットさえあれば残りは一個でも四個でもいいの！」

「……………そ、そうなの……？」

ハルユキが口のみならず両眼も限界まで見開いていると、ニコは膨らませていた頬から空気を抜き、がりがり後頭部を引っ掻きながら――。

「……まあ、心配してくれたことにや礼を言っとくよ。それに、四パーツだけでも着装できるからつつつて、スラスターをほっとくわけにもいかねーのは確かだしな。ただ……それは、あたしが自分の力でなんとかするべき問題だとも思うんだ……」

「そ、そんな、手伝うよ！　だって、ニコは僕らを助けるために一緒に無制限フィールドに行ってくれたんだから、そこで起きたことは僕らにも責任が……」

円座の反対側にいるニコに向かって、ハルユキは思わず身を乗り出した。しかし赤の王は、色々な感情の混じり合った笑みを仄かに滲ませると、薄曇りの空を振り仰いでゆっくりと語り始めた。

「……あたし、あの学校でバイスの野郎に拘束されてる間も、ぼんやりとだけ意識も感覚もあったんだ。だから、強化外装が次々に奪われてく瞬間、いろいろ考えた。これでプロミのレギマスは返上だな、とか……パドがちゃんと次のレギマス引き受けてくれっかな、とか……でも、それだけじゃなかった。自分でも意外だったけど、諦めとは反対の気持ちも、ちゃんとあった」

自分の小さな右手に視線を落とし、五指をぎゅっと握り締める。

「あたしは、レベルだけ見りゃ9だけど、力は他の王連中に遠く及ばねえ。戦闘力も、統率力

も、精神力もな」

何かを言いかける黒雪姫を制するように、ニコは淡い笑みを浮かべたまま軽くかぶりを振った。再び、静かな言葉が流れる。

「プロミのレギマスを引き受けたのも半分は成り行きだったし……いつも、本当は二代目赤の王を名乗る資格なんかねえって思ってた。メツキが剥がれて無様晒す前に、何もかも投げ出しちまったほうがいいんじゃないかって、心のどつかで思ってた。でも、強化外装が奪われて、それどころかポイント全損も覚悟しなきゃなんねえ状況に追い込まれて、いざ投げ出す理由ができたなら、諦めよりも悔しさを感じたんだ。こんなところで終わりにしたくねえ……三年前の大混乱からどうにかここまで立ち直ったプロミと、いままであたしに付いてきてくれたレギメンを裏切りたくねえ、つてさ」

ニコの隣に座るパドさんが、溢れそうになる言葉を堪えるかのように、口許を引き結ぶ。ニコも敢えて視線を向けようとはせず、カットジーンズから伸びる細い脚の上で両拳を握り締めたまま、ハルユキとチユリを順に見る。

「……災禍の鎧マークⅡを倒して、あたしの強化外装を三つ取り戻してくれたことには心から感謝してる。けど、一つだけが奪われたままになっちゃったことの意味をあたしはよく考えて、そこから何かを学ばなきゃなんないって思うんだ。ハルユキが、いままでずっとそうしてきたみてーにさ。だから……ハルユキが焦る必要はねーよ。加速世界にあたしのスラスターが存在

してる限り、取り戻す機会はきつと巡ってくる。それまでにあたしは、本当の意味でレギオンマスターに……できることなら本当に《赤の王》を名乗れるように、自分を鍛え直そうと思ってる。あの時、あたしのすぐそばで消えちゃったメタトロンに報いるためにもな……」

長い、長い決意を語り終えたニコは、照れを隠すように紙コップのオレンジジュースをごくごくと飲んだ。

ハルユキの胸に刺さっていた棘はニコの言葉によって溶け落ちたが、代わりに熱いものが込み上げてきて、繰り返し両眼を瞬かせなければならなかった。声は出せそうにないので、無言で何度も何度も頷いていくと――。

左に正座する黒雪姫が、端然と背筋を伸ばすと、思わぬ言葉を口にした。

「ニコ……いや、二代目赤の王スカーレット・レイン。お前に伝えるべき言葉を、私はとある友人から預かっている」

続いて語られたのは、驚くべき事実だった。

加速研究会の《死霊術師》が復活させたのは、ダスク・テイカーだけではなく、I S S キット端末を大量に製造するために、初代赤の王レッド・ライダーの記憶をも甦らせ、キット本体に寄生させていたのだ。

「……我々は、本体の内部から出現したライダーと戦った。もちろん、かつて私が全損させた当人ではなく、再生された複製記憶だが……しかし、それゆえに、いまや彼こそが唯一本物の

《BBK》だった」

黒雪姫は、まっすぐにニコを見ながら、凍とした声を響かせた。

「ライダーは、消える間際に言った。プロミを継いでくれた二代目に伝えてくれと。彼の最後の言葉だ……」

少しだけ、間を空けて。

「あんがとよ、あとは任せた」

黒の王が口を閉じてても、二代目赤の王は何も言おうとしなかった。

不意に――。

光の加減で緑色にも見える、赤茶色の大きな瞳に、透明な水滴がみるみる盛り上がった。

それはたちまち零れ、そばかすの浮く頬を伝って、赤いTシャツの胸元に落ちる。少し遅れて気付いたのか、ニコは右手の甲で乱暴に目許を拭うが、大粒の涙は次々に溢れて止まろうとしない。

やがてぱたりと手を落とすと、ニコは隣のパドさんの胸にどすんと顔を押し当てた。

長くレギオンマスターを守り続けてきた副長も、両眼を繰り返し瞬かせながら、強く抱き締める。

屋上に響く、幼い鳴咽を聞いているうちに、ハルユキの眼にも涙が滲んだ。しかし今回ばかりは、貫い泣きしているのはハルユキだけではなかった。

チュリも、謡も、繪も、楓子も、タクムやあきら、黒雪姫までもが瞳を潤ませ、二年以上の時を経てついに正統なる王位継承を果たした二代目赤の王を見守り続けた。

一分、二分、そして三分が経過した時。

黒雪姫が、目尻に指先を当てながら、大きな声で叫んだ。

「さあ、そろそろ時間だ。始まるぞ！」

ハルキは反射的に仮想デスクトップ右下の時計を見た。両眼に溜まる涙の影響を受けることなくクリアに表示される数字は、13…59…50。

二時から何かあったつけ、と考えてから思い出す。そういえば、無制限フィールドにダイブする前に、黒雪姫が言っていた気がする。午後二時から、生徒会プロデュースによる文化祭の展示が始まると。

だが、どこかの教室にせよ体育館にせよ、今から移動していたのでは間に合わない……。

からーん、からーん。

十四時になると同時に、軽やかに澄んだ鐘の音が鳴り響いた。しかしもちろん梅郷中の校舎に時鐘など存在しない。ということは、これは学内ローカルネットに接続している者だけに、ニューロリンカーを介して聞こえているサウンドだ。

ライム・ペルの《クワイアー・チャイム》にとってもよく似た鐘の音は、十四回打ち鳴らされると長い余韻を残して止まった。

続けて、柔らかに抑揚豊かな女子生徒の声で——たぶん、生徒会の若宮恵書記だろう——アナウンスが流れる。

「梅郷中学校第二十八回文化祭にお越しのお客様、ならびに本校生徒の皆さんにお知らせ致します。ただいまより、生徒会執行部による展示企画、『時』の上演を行います。ニューロリンカーが本校専用ネットワークへ接続していることをご確認下さい。展示エリアは、本校敷地外となります。屋外においでの方はそのままの場所で、屋内にいらっしゃる方はお近くの窓から、どうぞ学校の外をご覧下さいませ。それでは、上演を開始致します」

——展示エリアが、学校の外？

どういう意味だろう、とハルユキは傍らの黒雪姫を見やった。しかし副生徒会長は、微笑を浮かべたまま何も言おうとしない。タクムやあきらたちも怪訝そうに周囲を見回し、パドさんの胸で泣きじゃくっていたニコも何事ならんと顔を上げる。

突然。

さあつ、と爽やかな風が吹いた。

拡張現実モードのニューロリンカーが生成できるのは音と映像だけなので、タイミングよく吹いた本物の風だったのだろう。しかし、まるでそれが合図でもあったかのように——。

南の第一校舎越しに見える背の高い建物が、軒並み消滅した。

「あつ……………」

慌てて立ち上がり、屋上の手すりに近づこうとするハルユキを、黒雪姫が引き留める。

「ハルユキ君、みんな、後ろのほうが見やすいぞ」

「う、後ろ……？」

言われるまま振り向く。屋上の幅は十メートルほどしかないのに、反対側の手すりの向こうには、青梅街道と高円寺南三丁目の市街地が間近に見えるはずだ。

だが、そちらにも、見慣れた街並みは存在しなかった。代わりに広がっているのは、見渡す限りどこまでも続く草の海。まるで加速世界の《草原》ステージだが、ところどころに背の低い灌木が固まっているし、二キロほど北には巨大な川まで見える。場所からして妙正寺川だと思われるが、幅はせいぜい十数メートルしかなかったはず。しかし今見えている川は、対岸まで一キロくらいはありそうだった。

皆と一緒に北側の手すりまで移動し、呆然と眼を瞪っていると、再び恵の声によるアナウンスが流れた。

『皆さんがいまご覧になっているのは、八千年前、縄文時代早期の光景です。この頃は、武蔵野台地の端が海岸線となっていて、現在の杉並は広大な湾に突き出した半島の中央部に位置しました』

「じ……縄文時代!？」

驚きの声を上げながら、ハルユキは手すりの間から第二校舎の真下を覗き込んだ。すると、

アフリカオオコノハズクのホウが暮らす飼育小屋のすぐ北から草原が始まっていて、梅郷中はあたかも緑の大海に浮かぶ船の如しだ。

「……マスター、これはつまり、学校の敷地外全てに草原の映像をARプロジェクションマッピングしている……ということですか？」

ハカセらしいところを見せてタクムが問うと、黒雪姫は「ん、まあそういうことだ」と頷いた。

方向性としては、ハルユキが自分のクラスで披露した《三十年前の高円寺》と似ているが、規模と難易度は段違いだ。教室の壁にAR映像を重ねるだけなら、壁の隅にマーカーをセットするだけで済むが、広大な街並みを丸ごと上書きするとなると、いったいどんなワザを使っているのか見当もつかない。

はあーっと感嘆のため息を漏らし、東から西へと視線を移動させていると、またしても恵の解説が響いた。

「この時代、武蔵野台地は、縄文時代の東京に暮らした人々の重要な生活の場でした。彼らは水場の近くに堅穴式住居を構え、広大な草原で狩猟や採取を行っていました。杉並区のほぼ全域から土器や石器が出土しているほか、区の南部では大規模な遺跡も見えています」

不意に、野太い雄叫びが草原に響き渡る。

「あつ、あそこー！」

チュリが指さす場所に眼を凝らすと、毛皮や粗布でできた服をまとった古代人たちが、野獣級エネミーなみに巨大なイノシシを、簡素な槍や弓を手に追い立てている。彼らが姿を消すと、草原の中に円錐形の住居が幾つも現れる。広場では女たちが協力して煮炊きし、その周囲で子供たちがはしゃぎ回る。

「……八千年も昔なのに、あの子供たち、今の私たちと、あんまり変わらないように思えます」

繪が呟くと、隣の楓子が頷いた。

「そうだね。実際、八千年前の縄文人どころか、二十五万年前に現れた最初のホモ・サピエンスですら、脳の構造は現代の人間とほとんど同一なのよ。あの子供たちにニューロリンカーを与えて現代の教育を施せば、わたしたちと同じように育つでしょうね。それが幸せなのかどうかはともかく」

【UIV 最後のひと言が、いかにもフーねらしいのです】

謡のコメントに、チュリや黒雪姫たちのみならず、まだ眼の周りを赤く腫らしたニコまでが笑い声を上げる。

一緒になって笑いながら、ハルユキは内心でこっそり首を傾げていた。

この展示は確かに凄い。準備に大変な時間と労力が掛かっているだろう。しかし、なぜ縄文時代なのだろうか。草原ばかりで映像を作るのが楽だから？ いや、黒雪姫たちが、そんな

理由で題材を選ぶとは思えない……。

しかし、その直後、恵のアナウンスが驚くべきことを告げた。

「それでは、時代を少し進めてみましょう」

視界の下部に「――8000」という小さな数字が出現し、それが猛烈な勢いで減り始める。そこからの展示は、圧巻のひと言だった。

一気に数千年が過ぎ去り、二千三百年前の弥生時代。水稻農業が始まり、緑の原野は黄金の稲田へと変わる。

千七百年前、古墳時代。古代国家が成立し、武蔵野にもヤマト王権の支配力が及ぶ。田を耕したり狩りをするための道具、そして人と人が争うための武器も金属へと変わる。

千五百年前、飛鳥時代から奈良時代。国造と呼ばれる地方豪族が出現し、関東でも无邪志国造によって武蔵国が立てられる。ここに初めて《むさし》という地名が生まれる。

千年前、平安時代。関西では貴族が我が世の春を謳歌していたが、関東では一足早く武士団、いわゆる坂東武者が台頭し、大規模な荘園が形成される。杉並からさして遠くない府中市には武蔵国府が置かれるものの、都から赴任してくる貴族と在郷武士との対立が深まり、やがて代表的な坂東武者である平将門の乱へと発展する。

「……飛鳥時代とか平安時代って、西の方の出来事ばかり勉強したけど、けっこうこのへんでも色々起きてたんだなあ……」

馬上で斬り結ぶ武者たちに見入りながらハルユキが呟くと、タクムがメガネをきらりと光らせた。

「まったくその通りだね、ぼくらは東京に暮らしてるんだから、授業でももっと東国の歴史を取り上げるべきだよ。たとえばこの武蔵野から興った武士団である《武蔵七党》は鎌倉幕府でも重要な地位に就いていたわけで、武家政権の成立については清盛や頼朝だけじゃなく彼ら東国の武者たちの存在も……」

「おいおいタクム君、サムライのきみが武家に入れ込むのは解るが、あんまり先回りで解説しないでくれよ」

黒雪姫が苦笑混じりに言葉を挟み、タクムが照れたように頭を下げるその間にも、恵の滑らかなアナウンスに乗せて時代は流れ続ける。

八百年前、鎌倉時代。

六百年前、室町時代。中世武家社会の形成に伴い、現在の杉並区にもいくつかの小村が出現する。梅郷中の周辺は《小沢村》という地名で、中心部に《高円寺》という寺が築かれる。

そして戦国時代を経て、四百五十年前——江戸時代。

梅郷中のすぐ北の細い道を、たくさんのおかしい人夫が広い街道へと整備していく。毎日通学に使っている青梅街道が、江戸城築城のために拓かれた道であることを解説音声で知らされ、一同「へえーっ」と声を上げる。

その街道に、ものものしい大行列が現れる。小沢村での鷹狩りを好んだという、三代將軍・徳川家光の行列だ。家光がたびたび高円寺に宿泊したことから、村の名前もやがて《高円寺村》に変わる。

帰途に就く鷹狩行列の行く手を見やると、江戸の街並みの上に、江戸城天守閣の堂々たる偉容が浮かぶ。

「……………帝城、なの」

あきらの眩きに、皆もそれぞれの思いを抱きながら頷く。だが、やがて明暦の大火が江戸を焼き尽くす。江戸城天守閣も焼け落ち、夜空が真っ赤に染まる。二〇四七年現在では、ソーシヤル・カメラが出火の兆候を捉えるや消防庁ネットワークに情報を送るために大規模な火災はほとんど発生しないが、江戸の大火の恐ろしさに皆言葉を失う。

しかし、焼け落ちた街はたちまち復興される。高円寺のすぐ東に開設された宿場《内藤新宿》は発展を続け、梅郷中の屋上からも賑やかな街並みがよく見える。その後幾度も大きな火災が繰り返されるが、それを遥かに超えるスピードで都市は発展を続ける。

文化は爛熟を極め、当時世界最大とも言われた人口を誇った江戸の街にも、やがて新たな時代の風が吹く。

百七十年前、明治時代。

文明開化による西洋化が始まり、木と紙の街並みは石に変わっていく。ガス灯の明かりが

夜霧に滲み、石畳の道を馬車が行き交う。

やがて鉄道の敷設も始まり、お茶の水の八王子間でも甲武鉄道が営業を開始する。街道から少し離れた原っぱを、黒煙を吐き出しながらイギリス製K1型蒸気機関車が力走し、子供たちが歓声とともに追いかける。明治末期に甲武鉄道は国有化され、中央本線となる。

百三十年前、大正時代。

中野駅と荻窪駅の間に高円寺駅が新設され、周辺に新たな街並みが築かれていく。もちろんまだ高架線路ではなく、駅舎も驚くほど小さいが、位置は現在の高円寺駅とまったく同じだ。機関車は、他の路線に先駆けて電車に変わる。

そして、百年前。昭和時代。

青梅街道では馬車の代わりに自動車走り始める。クルマはもちろんガソリンエンジンで、フォードやGMといったアメリカ車に、国産のダットサンも交じっている。空には飛行船や複葉機が姿を現す。

気付けば、武蔵野の荒野を騎馬で駆け抜ける荒くれ武者たちが遠い幻のようだ。千年の間に文明は驚くほど進歩し、封建主義体制は民主主義体制となり、平和な近代社会が形成される。日が沈み、家々の窓には白熱灯の暖かな光が灯る――。

しかし。

突如、高い空を不吉な飛行機の編隊が横切る。飛行機の腹から黒いものが投下され、目と鼻

の先の萩窪で幾つもの爆炎が噴き上がる。

「えっ……これ、太平洋戦争……？ 杉並も、空襲があったの……？」

チユリの震え声に、ハルユキも強く手すりを握り締めながら頷く。

「うん……萩窪には、戦闘機を生産してた工場があったから、真っ先に狙われたんだ……」

「詳しいな、ハルユキ君」

風になびくロングヘアを片手で押さえ、黒雪姫が静かに言った。

「私は、この展示を作るために資料を集めるまで、まったく知らなかったよ。たった百年前の出来事なのにな……」

「あ、いえ……僕も、自分の住んでる街と結びつけて考えたりとか、ぜんぜんしてなかったですから……」

そんなやり取りをしていると、再び頭上でエンジン音が轟く。今度の空襲は大規模だ。無数の爆撃機から焼夷弾が投下され、高円寺の街は炎に包まれる。

「あっ……！」

輪が、か細い声を上げた。高円寺の駅舎が、猛火の中で崩れ落ちたのだ。周囲の商店や住宅も次々と焼け落ち、夜空が真っ赤に染まる。

杉並だけではない。東京都心のあちこちが赤々と燃え上がっている。解説音声が、この夜を含む百回以上の空襲で、東京二十三区の面積の三分の一が焼失したことを教える。

ハルユキが小学六年生だった二〇四五年の夏、終戦百年の式典が東京でも大々的に開催された。自宅で一人暇をもてあましていたハルユキは式典の中継映像を観てみたが、百年前に戦争があったという知識以上の何かを感じることはできなかった。

それはきつと、ハルユキが、昔の戦争をどこか別の世界、別の時間での出来事だと思っていたせいらう。でも、そうではなかった。ハルユキが暮らす高円寺の街で、わずか百年前に起きたことだったのだ。

立ち尽くすハルユキの眼前で、時は途切れることなく流れ続ける。

戦争で焼け野原となった杉並が、みるみるうちに再建されていく。高円寺駅舎も建て直され、銀色に輝く線路を真新しい一〇一系電車が走り始める。やがて高度成長期が訪れ、建物はどんどん高くなり、青梅街道の交通量も増加し続ける。

五十年前。

四十年前。

三十年前。

街並みは、少しずつハルユキの記憶にある姿に近づいていく。ガソリンエンジンはハイブリッドカーを経て電気自動車や燃料電池車に変わり、歩道を行き交う人々は手に携帯端末を握っている。

「あ……ソーシャル・カメラ」

チュリの声に眼を凝らすと、街並みのあちこちに、いつの間にか黒い球体——ソーシャル・カメラが出現している。実際のカメラ導入も、こんなふうにはひっそりと行われたらしい。

外見的には目立たないが大きな意味を持つ変化が、すぐにもう一つ起こった。人々の手から端末が消え、代わりにウェアラブル通信端末、すなわちニューロリンカーが首に装着され始めたのだ。

視界下側のカウンターが、【10015】を表示する。

高円寺駅の向こう側に、ショッピングモール併設の大型高層マンションが姿を現す。

ハルユキの両親は、あのマンションの二三〇五号室を新規分譲で購入し、翌年にはハルユキが生まれた。再現映像と解っていてなお、ハルユキは自宅の位置にある窓をじっと見詰めてしまう。

柔らかな光を灯すガラスの向こうに、まだ仲が良かった頃の母親と父親、そして赤ん坊の自分が幸せに暮らしている様子を想像する。しかしカウンターはたちまち、両親が離婚した年を通り過ぎる。

八千年前の縄文時代から始まった展示が、この時代まで到達するのにかかった時間はわずか二十分。ざっと計算すれば、加速倍率はおよそ二億倍か。現代に近づくにつれ展示は減速しているようだが、それでもハルユキが生まれてからの十四年など、長い歴史の中では小さな火花の閃きにも等しい。そこに意味など見いだせないほどに短い、微々たる時間。

けれど、『時』と題されたこの展示が訴えているのは、そういうことではないだろう。

歴史とは人の営みの連なりだ。もしかしたら、時そのもののさえも。

長大な時の流れの中に、いま、生きていること。全ての人の生きた時間が、糸に紡がれ、布に織られて、歴史という長大な絵巻を作っていること。そしてその流れは、これからも続いていくこと。いつまでも。どこまでも。展示はハルユキたちにそれを教えている。

『長い歴史の旅も、そろそろ終わりに近づいています』

展示を締めくくめるアナウンスが、静かに流れた。

『最後に、どうぞ空をご覧ください』

ハルユキは、仲間たちと一緒に真上の空を仰ぎ見た。実際の時刻はまだ二時半にもなっていないはずだが、空は真っ赤な夕焼けに染まっている。

タイムカウンターがついに『0000』に到達し、しかし右端の数字がもう少しだけ進んで、『+0005』で停止する。

夕空の彼方から、さらに瞬間光の連なりが近づいてくる。垂直にどこまでも伸びる、銀色の糸。天空へと続く梯子。あれは――

「ヘルメス・コード……!」

叫びながら、思い切り体を仰け反らせたハルユキは、バランスを崩して後ろに倒れ込みそうになった。すかさず右手を黒雪姫、左手をチユリが掴んで引き留めてくれる。

誰も、何も言わぬまま、黒雪姫の右手を楓子が、チユリの左手をタクムが握った。輪が、あきらが、謡が、同じように手を繋ぐ。最後にニコとパドさんが加わり、十人は屋上で大きな輪を描く。

宇宙エレベータ《ヘルメス・コード》は、低軌道型という分類にはなるが、地上百五十キロメートルの超高空をマッハ10の極超音速で飛行しているので、肉眼では小さな光の点にしか見えない。だが、AR映像として再現された《飛神の絃》は、ボトムステーションの細部までよく見えるほどの低空をゆっくり近づいてくると、梅郷中の真上で停止する。カーボン・ナノチューブを主材料とする長さ四千キロのエレベータの先端は、空を染める茜色と藍色の境界あたりに溶け込んで見えない。

ステーションから、何かの荷物を積んだ銀色の運搬カーゴが上昇していく。再び、解説音声 が流れる。

「五年後の二〇五二年、世界初の有人火星探査のための国際プロジェクトが始動します。宇宙船の部品はヘルメス・コードのトップステーションまで運ばれ、軌道上で組み立てが行われる予定です。縄文時代、石槍を片手に草原を走っていた人類の足が、八千年という時を経て火星の土を踏むのです。しかしそこで歩みが止まるわけではありません。人はこれからも、何百年、何千年と前に進み続けるでしょう。その歩みに、私たちの親の世代も、私たちの子の世代も参加しているのです」

空の果てに達した運搬カーゴが、きらりと光って消える。ヘルメス・コードが再び動き出し、大きな夕陽に吸い込まれるように遠ざかっていく。

「これで、生徒会執行部による展示企画《時》の上演を終了します。長らくのお付き合い、ありがとうございました」

恵のアナウンスとともにカウンタースが消え、夕焼けの赤色も薄れてもとの曇り空へと戻った。だが、視界に起きた変化はそれだけだった。なぜなら、梅郷中の外部に広がる街並みは、すでにAR映像と現実の光景が一致していたからだ。

展示終了からわずかな間を置いて、学校中から盛大な拍手が湧き上がった。ハルユキも黒雪姫の手を離すと、懸命に両手を打ち合わせた。すぐに、他の八人も続く。

一度は泣き止んだはずのニコの両眼には、再び光るものが浮かんでいた。それを隠そうともせず、二代目赤の王は言った。

「……今日、来てよかったよ。あたしが生まれた意味とか、パーストリンカーになった意味、あんたらとダチになった意味……色々感じられたから……」

ぐいっと目許を拳で擦り、おどけるように続ける。

「しっかし黒雪、あんたいちおう受験生だろ？ よくまああんなスゲーの作ってるヒマがあったなあ！」

「い、今それを言わなくてもいいだろう」

洗面を作って黒雪姫が言い返すと、皆があははと笑う。すぐに黒雪姫も笑顔を作ると、軽く肩をすくめた。

「それに、私ひとりで作ったわけじゃないさ。会長くんが案外こういうの得意でな……まあ、私もポイントが30ばかり消費してしまったが」

「あ、先輩ずるーい！」

チュリの突っ込みに、

「ずるくない！ パーストポイントのこれ以上正しい使い方もなからう！」

と黒雪姫がすかさず反論すると、もう一度皆から笑い声がかかる。

仲間たちの朗らかなやり取りを見守りながら、ハルユキは内心で、一つの辛い決断を下していた。

無制限フィールドで、ライム・ベルが災禍の鎧マークⅡを還元している時、ハルユキは考えた。シトロン・コールならば、メタトロンの消滅をも巻き戻せるのではないだろうか、と。

その希望——あるいは未練は、今も消えていない。可能性が〇・一パーセントでもあるのなら、試して欲しいという気持ちが強く存在する。

けれど。

世田谷エリアで出会った、ショコラ・パペッターは言っていた。

仮にいちど死んだエネミーが復活しても、それはあくまで同じ種類のエネミーというだけで、

まったく同じ個体が再生するわけではない。長い時間をかけて育んだ絆は、二度と甦（よみがえ）ることはない……。

仮にメタトロンを復活させられたとして。それが、ハルユキと戦い、ハルユキを助け、ハルユキと語らい、ハルユキを守って消滅したあの誇（ほ）り高い大天使であるという保証はないのだ。まったく新しい、神獣級エネミー《大天使メタトロン》として再生すれば、その個体は即座にハルユキとチユリを殺すだろう。

いや、攻撃されるのを恐れているわけではない。メタトロンの本質は、無制限中立フィールドで八千年という膨大な——人類史で言えば縄文時代から現代にまで達するほどの時を生き、知性を磨（みが）き、思索を深めた《魂》だ。その魂なきエネミーとして蘇（そ）生させるのは、メタトロンの対する冒瀆（ぼうとく）に他ならない。何より、彼女自身がそれを……望むまい。

「……どうしたんです……か、有田さん」

いつの間にか隣にいた輪（りん）に、シャツの袖（そで）をくいと引っ張られ、ハルユキは我（われ）に返ると慌（あわ）てかぶりを振った。

「う、ううん、なんでもない。ただ、その、色々考えてたんだ……」

「私も、たくさん、考えました。こうして、有田さんと過ごせる時間を……いままで以上に、大切にしなきゃ、って……」

「あ、う、うん、そうだね」

こくりと頷こうとしたハルユキの襟首を、黒雪姫が。綸の襟を、楓子がむんずと掴んだ。

「ハルユキ君、生徒会の展示を見て色々考えてくれるのは嬉しいが、特定の女子との交流を深めるべしなどというメッセージを込めたつもりはないからな」

「そうですね、鴉さんと過ごす時間と同じくらい、わたしとの特調も大切にしてくださいませんか」

「は……はい」

ハルユキと綸が異口同音に答えると、パドさんが冷静にコメントした。

「私が受け取ったメッセージは、無駄にしている時間はない、ということ。午後三時の文化祭終了まで、あと三十分ある」

「おつ、そうだな。まだ見てないトコで、何かオススメねーのか？」

完全に涙を振り切ったニコにそう問われ、シャツの後ろ襟を摘まれたまま考える。

自分のクラスの展示にはもう案内してしまっただけ、そもそも生徒会の超中学生級A R 展示に度肝を抜かれたあとでは、ハルユキの一晚やつつけ仕事など恥ずかしくて見せられない。他のクラスで、何か面白くてためになる展示をやっていないかったらうか――。

とあれこれ思い悩んでいると、今後は更なるせっかちライフを送ることにしたらしいパドさんが、もう待てぬとばかりに言った。

「なら、黒雪とチユとハカセ君にもハルのクラスの展示を見て貰えばいい」

どうやら、赤のレギオンの二人は、現実世界では黒雪姫を黒雪、チユリをチユ、タクムをハカセ、ハルユキはハルユキもしくはハルと呼ぶことにしたらしい。

通常そういう渾名はいつの間にか自然発生的に成立するもので、いままでずっと「クロウ」で通していたパドさんに突然「ハル」と呼ばれば少しばかりドキンとせざるを得ないが、咳払いで誤魔化して答える。

「で、でも、生徒会の展示に比べたらぜんぜん大したことないし……」

「何を言っている、私はすごく楽しみにしていたんだぞ。タクム君とチユリ君だってそうだろう」

ハルユキの襟から手を離れた黒雪姫がそう言うのと、チユタクコンビも勢いよく言い添えた。

「もっちりろん！ ウチのクラスの展示だし、時間なかったら一般開放が終わったあとに見せてもらおうつもりだったもん」

「ぼくもだよ。なかなか評判になってるみたいだし」

「……じゃ、じゃあ、ちよつとだけ……」

黒雪姫たちにそう言って貰えればやはり嬉しさが先に立ち、ハルユキは微妙な角度で頷いた。すると、楓子が両手をぼんと打ち合わせ、にっこり笑いながら――。

「そうだ、せっかくですから、その後でもういちど《どうぶつ王国》に行きましょう。サツちゃんたち、あそこも未経験のはずですし」

「へっ……」

途端、ハルユキは全身を硬直させ、パドさん、ニコ、あきら、謡、輪の五人が実に微妙な表情を浮かべる。しかし、笑顔のままの楓子にばかりんとウインクまでされてしまえば、もはや否とは言えないハルユキだ。

怪訝な様子の黒雪姫、チユリ、タクムに向き直り、言う。

「え、えーと……そんじゃまず、二年C組に移動するということ……」

文化祭のラスト三十分は、実に盛り沢山な展開を辿った。

ハルユキが苦心した——と言っても黒雪姫の労力に比べれば数百分の一であろうが——クラス展示、《三十年前の高円寺》は、幸い未見の三人にも楽しんで貰えたようだった。生徒会の展示ではあつという間に通り返してしまった時代だが、二〇一七年という近しい過去も、じっくり見れば色々と考えさせられるな……というのが黒雪姫のコメントだ。

続いて、問題の二年B組の模擬店、《CAFEどうぶつ王国》へ。

企画プロデューサーにして飼育委員会の同僚でもある井関玲那に「また来たのイインチョ」とニヤニヤされつつテーブルへ。前回と同様、動物の名前が入ったドリンクをオーダーする。初来店のチユリが選んだのは「仔猫のいたずら」、同じく黒雪姫は「夕焼けカラス」。

飲み終わったら教室後方のステージに移動し、まず女性陣八名全員で正規のARきぐるみに

よる記念撮影。そこで楓子の指示により、黒雪姫とチユリ以外の六人がステージから降りる。すかさずハルユキを見た《本当は怖いレイカー先生》は、再びのウィンクとともに、「さあどうぞ、鴉さん」とひと言――。

これは命令なのだ、師匠の命令に逆らうわけにはいかないのだ。と己に言い聞かせたハルユキは、着せ替えプログラムのメニュー深くに潜り、選択されている《アニマル・ファースーツ》を、ままよと《アニマル・ファースーツS》に変更。

ステージに並ぶチユリと黒雪姫は、二秒ほどきょとんとしていたが、体を覆う毛皮の面積が九割減少していることに気付いた瞬間、かつて聞いたことがない種類の悲鳴を上げた。

「……それで、ハル」

どうぶつ王国から出て昇降口に向かう一行の最後尾で、タクムが眼鏡のブリッジを押し上げながら、隣を歩くハルユキに問うた。

「写真は撮影できたのかい？」

「ああ。でも、強制直結で消去されたよ……」

「そうか……。――データのリカバリーは？」

「可能性は低い。でも……トライしてみるつもりだ」

「……ぼくに手伝えることがあったら言ってくれ」

「解った。あとで連絡する」

小声でやり取りしていると、前のチユリが振り向き、じっとりした視線を向けてきた。

「何コソコソしてるのよ」

「別になんでも」

ネガ・ネビュラスの男メンバー二人は、完璧に同期した動きでかぶりを振った。

十五時。

文化祭終了のアナウンスを、ハルユキたちは前庭の片隅で聞いた。

学校中から再びの拍手が湧き上がり、潮が引くようにフエードアウトする。主に生徒の家族や友人である一般招待客が、笑顔で感想を語りながらサインゲートを潜って帰っていく。

明日の月曜が片付け日で、明後日の火曜は振り替え休日、それが過ぎれば文化祭の非日常は跡形もなく消え去る。一年生の時も経験したことが、今年は簡単には日常生活に戻れそうにない。

「あーあ、終わっちゃったなー」

両手で大きく伸びをしながらそう言ったニコは、ふと思いついたように付け加えた。

「このあとハルユキんちで二次会とかねーの？」

えええ!? とハルユキが叫ぶより早く、黒雪姫がコメントした。

「それはいい考えた……と言いたところだが、残念ながら私が事後手続きでしばらく帰れないので不可だ」

「別にあんたが来なくなつて……」

「不、可、だ！ だいたい、今日はみんな疲れただろう。帰ってしつかり休まないと、明日が辛いぞ」

「チツ、しゃーねーな」

とニコは不満そうな顔をしたものの、続けて大あくびを一つ。決まり悪そうに瞬きするレギオンマスターを、パドさんが後ろから両手で抱きかかえる。

「今日は、これで練馬に戻る。THX、色々あったけど楽しかった」

「パド、改めて、レベル8到達おめでとう」

長年のライバルである楓子がパドさんのレベルアップを祝福し、続けて訊ねた。

「それで、わたしはあなたをリアルでどう呼べばいいのかしら」

「《ミャア》でいい、フー」

「……了解。じゃあ、ミャアとの対戦、楽しみにしておくわね」

「K」

パドさんが頷くと、ニコも「んじやな、今度はこっちに来いよ！」と手を振り、プロミネンスの二人はゲートを通る人並みに紛れて去って行った。

続いて楓子が、繪の手を引きながら前出る。

「もう一度、お礼を言うわね。鶯さん、繪とアツシュを助けてくれて、ありがとう」

深々と頭を下げられ、ハルユキは慌てて答えた。

「そ、そんな、僕だけじゃなくて、みんなで頑張った結果ですから……ていうか、《本体》を破壊したのは先輩や師匠たちですし……」

「でも、それも全て鶯さんの、繪を助けたいっていう気持ちから始まったことだわ」

楓子が微笑むと、繪も両手を体の前に揃え、深々とお辞儀をした。

「あの、私も、それに兄も、有田さんにはとつてもとつても、とつても感謝して……います。お気持ちに報いるために、私にできることは、なんでもしようと思つてます。まずは、師匠に言われたこと、なるべく早く実現したい……です」

——なんだっけ？

と内心途惑うが、繪が両眼を潤ませながらももう一度頭を下げるので、ひとまず答える。

「……僕も、日下部さんと、それにもちろんアツシュさんが戻ってきてくれてすごく嬉しいよ

……お兄さんに、次の朝対戦、楽しみにしてるって伝えておいて」

「はい、もちろん、です！」

繪が頷くと、今度はあきららが前に出て、ハルユキたちに向き直った。

「私も、お礼を言わなきゃなの」

赤いフレームの眼鏡の奥で、いつもクールな瞳を和ませ、続ける。

「私を帝城から解放してくれて、ありがとう。もういちどあの世界で、みんなと一緒に戦えるなんて夢のようなの。まだまだ謎や問題は残されているけれど……でも、一つずつ解決していけばいい。みんなとなら、なんだってできるから」

最後にもう一度、楓子、繪、あきらは揃ってお辞儀をすると、サインゲートへと向かった。きつと楓子が自動車で送っていくのだろう。三人の姿が見えなくなると、今度は謡が両手の指を閃かせる。

「UIV それでは私も、ホウさんにごはんをあげてから帰宅するのです。今日はお招き頂き、ありがとうございました」

「あ、それなら僕も手伝うよ」

飼育委員長として、ハルユキは当然そう申し出たのだが。

「UIV いえ、今日は私ひとりだけで大丈夫です。有田さんは、ご自分で思っている以上に消耗しているはずなのです。早く帰宅して、たっぷりご飯を食べて、ゆっくりお風呂に入って、ぐっすり寝ないとダメなのです」

ずっと年下の謡にまるでお姉さんのように諭され、「で、でも」と食い下がろうとするが、止めのひと言が視界に流れる。

「UIV これは超委員長としての命令なのです！」

にこつ、と微笑みつつ謡が打ち込んだオーダーを、黒雪姫も微笑で追認した。

「そうだぞ、ハルユキ君。今日はこれで帰って休め。さもないと明日の片付けと掃除がキツイぞ」

すかさずチユリとタクムにも「そうよ、ハル!」「そうだよ、ハル」と促され、やむを得ずこつくり頷く。

そういう二人も同じくらい疲れているはずだ、と思いながら一緒に帰れるのか訊ねたが、チユリは陸上部の、タクムも剣道部のミーティングがあるらしい。待っているとも言い出せず、締めめ挨拶を口にする。

「えと……じゃあ、四埜宮さん、ホウよろしくね」

【UIV 伝えておくのです!】

「あと、先輩、展示ほんとに感動しました。チユンとこのクレープも美味しかったし、タクの侍ダンスも凄かった。みんな、文化祭、お疲れさまでした」

ハルユキの言葉に、黒雪姫たちも揃って「お疲れさま!」と——謡はもちろんチャットでだが——唱和した。

この瞬間、今年の文化祭が終わったことを、ハルユキははっきりと感じた。

まだ後片付けは残っているが、二年C組に限って言えばパネルボードを撤去して机と椅子を並べ直すだけだ。恐らく明日の午前中だけで完了してしまうだろう。

そう、長かった六月も今日で終わり、明日からは七月が始まる。期末テストに終業式、そして夏休みが訪れる。流れ続ける時間を止めることはできない。絶え間なく押し寄せる未来が、現在を過去へと変えていく。

せめて、一日一日を……できることなら一分一秒を、悔いなく過ごしたい。いままで自分を導いてくれた人たちに報いるために。

そんなことを考えながら、ハルユキは仲間たちに大きく手を振り、時計の形のゲートを通り抜けて学校の外に出た。

7

でも、本心では、ひとりで家に帰りたくなかった。

強制帰宅時間ぎりぎりまで学校に留まって、誰かと他愛もない話でもしていたかった。あるいは、ニコの言うとおりで自宅で二次会をやってもよかった。できることならチエリやタクムに泊まってもらって、レトロゲームで遊び疲れてそのまま眠ってしまったかった。

そんなふうにして明日を迎えれば、少しは薄れているはずだったのだ。胸の深いところに刺さったまま抜けない棘の、重く切ない疼きも。

十五年前の新築当初からすれば外壁もそれなりに色褪せた高層マンションのエントランスを通り、住民専用エレベータで二十三階へ。共用廊下を歩き、自宅のロックを解除して、ドアを開ける。

「……たたいま」

ぼそりと呟くが、家の中は暗く静まり返ったまま。母親は海外出張中で深夜まで帰らないし、今日ばかりはニコの予告なし突撃もあるまい。のろのろと靴を脱ぎ、洗面所で手と顔を洗ってから、自室で制服をTシャツに着替える。

ちらりと時刻を確認するが、まだ四時にもなっていない。昨夜泊まっていたニコと一緒に家を出たのが朝の八時半だったので、あれからたった七時間と三十分しか経っていないことになる。

無制限フィールドでのロング・ミッションを計算に入れば、体感ではその三倍近い時間を過ごしているわけだが、それにしても状況に心が追いつかない。こうして一人、自分の部屋に立っている現実こそが、誰かに作られた疑似体験のようにも思える。

日頃帰宅してからするのと同じことをしているうちに、この奇妙な感覚も消えるだろう。そう考え、仮想デスクトップにTODORISTを開いてみるが、なんとタスクが一件も登録されていない。さすがに文化祭当日に宿題は出ないし、提出すべきファイルもない。ならば部屋の大掃除でもするかと思ったが、そこまでの元気は出てこない。

ないない尽くしの思考を巡らせていると体がどんどん重くなってきた、ハルユキはどきりとベッドに倒れ込んだ。

体を反転させ、天井を見上げる。いつそそのまま寝てしまえと思うものの、疲れているはずなのに眠気すら湧いてこない。両手を頭の後ろで組み合わせ、とりとめもない想念を彷徨わせる。

黒雪姫、楓子、あきら、謡の奮闘で、ISSキット本体は破壊された。

全ての端末、すなわちアッシュ・ローラーやマゼンタ・シザー、その他何十人ものキット・

ユーザーたちに寄生していた黒い眼球は、これで完全に消滅したはずだ。もう対戦でダーク・ショットとダーク・プロウが猛威を振るうことも、キットの感染が拡大することもない。

いっぽうで、新たな問題も生まれてしまった。

残りバーストポイントがわずか10という瀕死状態で、回線強制切断により姿を消したウルフラム・サーベラス。

そして、彼の所有状態となったままの、「インピンシブル」のスラスター。

ニコは焦らないと言ってくれたが、奪われたスラスターは一刻も早く回収、浄化する必要がある。強化外装には恐らく災禍の鎧マークⅡの因子が残留しているはずで、加速研究会ならばそれを新たな悪巧みに利用しようとするだろう。サーベラスが……ハルユキのライバルであり友達でもある彼が、これ以上アルゴン・アレイたちに弄ばれる前に、禍根を完全に断たねばならない。

また、ISSキットが消えたからといって、キットを使っていた者たちの記憶までが消えたわけではない。精神干渉が進み、それまでの親友やレギオンメンバーをキットの力で叩きのめしてしまった者もいるだろう。あるいは、強引にキットを周りのバーストリンカーに感染させてしまった者も。

マゼンタ・シザーやオリブ・グラブは、これからどうするのだろう。帰るべき場所はまた残っているだろうか。憎むべきはISSキットとそれを拡散させた加速研究会で、元ユーザー

たちの非はこれ以上問わない、そんなコンセンサスができればいいと思うが、今は王たちの決定を待たねばならない。

王と言え、突如ローカルネット対戦に姿を現した、白の王ホワイト・コスモス――。

黒雪姫の《親》であり実の姉でもある彼女が、加速研究会の会長だったという衝撃の事実が明らかにになったわけだが、その情報をどう扱えばいいのかもハルユキには判断できない。

物的証拠が何一つ存在しない以上、おいそれと糾弾すれば逆にネガ・ネビュラス排斥の口実にされる恐れもある。結局、こちらも黒雪姫や楓子に任せるしかないだろう。

つまるところ、現状では、いますぐハルユキにできることは何もないのだ。

スラストを回収することも、サーベラスを研究会から離反させることも、白の王を断罪することも、ハルユキひとりの意思でどうこうなる問題ではない。災禍の鎧マークⅡをどうにか撃破できたのも、ニコやパドさん、タクム、チユリ、そして……メタトロンが、助けてくれたからだ。

とうとう思考がそこに至り、ハルユキは両眼をぎゅっと瞑った。

ハルユキを何度も何度も助けてくれた大天使メタトロンは、もういない。改めてその事実を噛み締めると、眼の奥がじわりと熱くなる。

体感時間でもほんの三、四時間前に初めて言葉を交わし、何度が共闘しただけですぐに消えた、それだけの存在だ。しかも、相手はパーストリンカーですらないのだ。

なのにどうして、これほど強い喪失感を感じるのか。

己に言い聞かせるような問いかけに、ハルユキは自分で答えてしまう。

——きつと、僕は、嬉しかったんだ。

——いままでずっと、倒すべき敵でしかなかったエネミーと……その中でも最強クラスの神獣級で、しかもミッドタウン・タワーを絶対不可侵の要塞に変えていた恐ろしい番人と、言葉を交わして、友達になれて、すごく嬉しかったんだ。

——いや、そんなのも、きつと後付けの理由だ。

——僕は、ただ、メタトロンが、好きだったんだ……。

臉を持ち上げると、いつの間にか溢れんばかりに溜まっていた涙が、窓から差し込む黄色い光を吸い込んできらきらと揺れた。

メタトロンは、加速世界が作られた理由と、自分が生きた八千年の意味を追い求めていた。世界の最果てが見られるのなら、それで自分が消滅しても構わないとさえ言っていた。

そんな彼女に、ハルユキは伝えることができなかった。加速世界の外側に存在する現実世界の広大さを。現実世界でいままで流れてきた、そしてこれからも続いていくであろう時間の、無限にも等しいスケールを。

高機能ガラスを通して、環七通りの交通音がごくかすかに聞こえる。

いまごろ、地上のショッピングモールは、日曜午後の買い物を楽しむ家族連れでごった返し

ているだろう。八千年前に縄文人の子供が走り回り、一千年前に荒くれ武者たちが馬を駆り、百年前には焼夷弾で焼け野原になって、十年前にハルユキがチユリやタクムとかくれんぼをして遊んだ、その場所だ。

時は流れ続ける。現実世界でも……加速世界でも。

……お別れを、言いにいこう。

ふと、そう思った。

謡や黒雪姫にはちゃんと休めと言われたけれど、少しだけ……三十分か、一時間くらいなら、きつと許して貰えるだろう。それに、10ポイントを使うことも。メタトロンは、黒雪姫たちにとっても、仲間だったはずだから。

瞼を閉じると、溜まっていた涙が両頬に転がり落ちた。

それを拭うことなく、ハルユキはそっと呟いた。

「《アンリミテッド・パースト》」

現実時間で三時間半ぶりに訪れた無制限中立フィールドは、純白に染まっていた。

灰色の空から音もなく落ちてくる雪の結晶が、差し出した掌に触れ、たちまち溶けて消える。ハルユキの足許にそびえる高層マンションは、巨大な氷の塊に変わっている。

《氷雪》ステージだ。建物内侵入不可属性ゆえに、マンションの屋上に出現したのだ。

「……変遷が、あったんだ」

ぼつりと眩くが、それは当然のことだ。現実の三時間半は、加速世界では約百四十六日にも相当するのだから。

二十センチほど雪が積もった氷の上に、ゆっくりと腰を下ろす。メタルカラー・アバターは凍結属性ダメージへの耐性を持つが、だからといって冷たさを感じないわけではない。しかし今は、ちくちくと神経系を突き刺すような冷気すらも愛おしく感じる。

「地獄ステージは嫌いだって言ってたけど……氷雪ステージは、どうだったのかな」

両手で雪の塊をすくい取りながら独りごちる。

答える声はないが、全身純白だったメタトロンのことだ。この真っ白い世界を、きつと気に入っていただろう。

屋上の縁近くに座ったまま、南西の方角に眼を凝らす。

降りしきる雪が邪魔をして新宿都庁すらも見えない。だがこの方向に、メタトロン第一形態と激闘を繰り広げた東京ミッドタウンが……そして更に先には、旧東京タワーと芝公園があるはずだ。

「きみのお城、どんな所なのか、見てみたかったな……」

思えば、楓子が庵を構える旧東京タワーには何度も行ったのに、そのすぐ近くにあるはずの芝公園地下大迷宮は入り口さえ見たことがない。でも、たぶん、もう訪れることはないだろう。主のいない城では、きつと寂しさが募るだけだ……。

と、そこまで考えた時、ハルユキはふと気付いた。

もしかしたら、チュリにシトロン・コールを使ってもらうまでもなかったのではないだろうか？

エネミーは、倒されても、《変遷》が起きれば復活する。メタトロンの本体、すなわち第二形態は八千年間一度も倒されていないが、同じルールが彼女にも適用されるのではないか。

つまり、今頃、芝公園ダンジョンの最深部に主が復活している可能性はある。

「……………」

一瞬高まりかけた希望を、ため息と一緒に冷たい空気へと拡散させる。

仮に復活していたとしても、それは間違いなく《新しいメタトロン》だ。己の運命に抗い、

世界の最果てを望むビーイングではなく、訪れるバーストリンカーを攻撃せよという命令を忠実に遂行するだけのエネミーだ。

「……………なんで」

かすかな声で、ハルユキは呟いた。

「なんで……………あなたは……………」

呼びかけた相手は、メタトロンではない。

加速世界を——《ブレイン・バースト2039》、そして《アクセル・アサルト2038》《コスモス・コラプト2040》を生み出した、正体不明の製作者。

「……………あなたは、どうして、メタトロンに心を与えたんだ。考える力を……………悩んだり、苦しんだり、希望を抱いたりする力を、何のために与えたんだ。自分を犠牲にしてまで、ちっぽけな僕を助けるような勇気を……………魂を……………愛を、なんで、与えたんだ!!」

握り締めた拳を、目の前の氷に叩き付ける。高い耐久力を持つ氷雪ステージの大型建築物は、この程度の打撃ではびくともしない。

二度、三度と繰り返すと拳に鋭い痛みが走るが、構わずに殴り続ける。

「なんで……………なんで……………なんで!!」

絶叫とともに振り下ろした右拳の装甲に、細かいクラックが走った。氷の針で突き刺されるような苦痛が仮想の神経を駆け巡る。しかし、こんなものではまったく足りない。

あの瞬間——。

メタトロンが、自分の存在そのものをエネルギーに変えて《トリスアギオン》を放ったあの瞬間、ハルユキはただそれを見ただけだった。メタトロンの献身と消滅を、すぐ近くで感じていただけだった。

本当は、ハルユキにも何かができたのではないのか。

太陽光が足りないのなら、心意エネルギーを。イマジネーションが尽きたのなら、自分の魂そのものを。たとえ脳神経が幾らか焼き切れようとも、メタトロンに守られるだけではなく、共に戦うすがすがしきものではなにか。

「なのに……なのに、僕は……!!」

振り上げた両の拳を、ありつたけの力で氷に叩き付ける。

青い氷の塊に放射状の亀裂が走り、ハルユキの銀甲も微細な破片を散らす。

体力ゲージが減少し、激痛が頭の真ん中を貫く。

もう一度。

更にもう一度。

両手の装甲が傷く砕け、ダークグレーのアバター素体が露出した。これ以上氷を殴れば、腕そのものが砕け散るだろう。

でも、構わない。そうやって、自分自身が無くなるまで、この痛みを味わい続ける。

ハルユキの感情に呼応するように強い風が吹き始め、ステージの天候を吹雪へと変えた。渦巻く白片に包まれながら、剥き出しの両手を思い切り氷に打ち付けようとした——
その時。

……まだ……ります。

どこかずっと遠くから、誰かの声が聞こえた、気がした。
呼吸が止まった。両手を振り上げたまま、耳を澄ませる。こうこうと荒れ狂う吹雪の中に、
必死に声を探す。

……おまえの……に、まだ……あります。

落ち着いた、絹のように滑らかなメゾソプラノ。女性の声だが……しかし、メタトロン、
甘くクリアなソプラノとは違う。黒雪姫の声でも、櫛子でも、ハルユキの知っている誰の声で
もない。

ゆっくり両手を下ろしながら、掠れた声で問いかける。

「きみは……誰？ 何が、あるの……？」

……たしは……テラス。メタト……の、盟友。

あたかも、旧式のラジオ受信機をチューニングするように、少しずつ声がクリアに、大きくなる。ハルユキは両手の痛みも忘れて、懸命に意識を集中させる。

……メタ……のコアとのリンクは、まだ……まえの中に残存して……す。

……コアを修復できるかどうかは、おまえ次第。おまえたちが心意と呼ぶ力の強さ次第。

……残された時間は少ない。コアが消滅する前に……

……手を、伸ばしなさい。そうす……ば、きっと……どく……

急激に声が遠ざかり、消えた。

どんなに聴覚を研ぎ澄ませても、聞こえるのは吹雪の唸り声ばかり。いつそ、尽きせぬ未練が生み出した幻聴かとも思えるが、そんなはずはない。メタトロンとのリンクは、まだハルユキの中にある。まったく思いも寄らぬことを、謎の声は告げたのだ。

「……僕の……中に……」

呆然と眩いてから、両手を強く握る。

心意の力次第で、メタトロンのコアを修復できる。声はそう言っていた。そして、時間がな
い、とも。

可能性があるのならば、やらねばならない。だが、何をどうすればいいのか解らない。

心意システムを発動させるには、明確なイメージが必要だ。なのに、イメージの形
も、その対象も、まったく思いつかない……。

教えてくれる誰かを捜そうと、周囲を見回しかけた寸前で、ぐっと堪える。

——ここには僕しかない。メタトロンの手を差し伸べられるのは僕だけだ。ひとりで考
えて、ひとりで努力して、ひとりで果たさなきゃならない時なんだ。メタトロンの約束を……
一緒に世界の果てを見ろという約束を、今度こそ。

メタロンとの繋がりが残っているというのなら、その鍵は、翼だ。

大天使に貸し与えられ、マークⅡとの戦いの終わりに間隙でハルユキを墜落死から守ってくれ
た、強化外装（メタロン・ウイング）。

氷の上に跳き、両手を顔の前で握り合わせて、イメージする。

肩甲骨の少し上から伸びる、優美で鋭利な純白の翼。メタロンは、翼を通して何度も危険
を警告してくれた。あの感覚を……あの繋がりを、もういちど。

眼を閉じる。荒れ狂う吹雪も、両手の痛みも、全身を包み込む冷気も遠ざかる。

暗闇の中、かりそめの翼を伸ばすイメージ。高く高く浮き上がり、この世界の外側まで到達

するイメージ。

無制限中立フィールドを抜けて……ハイエスト・レベルへと羽はたくイメージ……。

——メタトロン。

——聞こえるかい、メタトロン。

——僕は、ここにいます。きみがくれた翼をいっばいに広げて、きみが愛した世界の空を飛んでいる。

——そして、いま、きみへと、手を伸ばす。

ちかつ。

無限の暗闇の彼方に、小さな星が瞬く。

あまりにも儚く、弱々しく、いまにも消えてしまいそうな……しかし仄かな温もりを伝えてくる、白い光。

翼を思い切り羽ばたかせ、いっばいに手を伸ばす。ちか、ちかと瞬く星はあまりにも遠く、ハルエキの手はあまりにも短い。

でも、距離は問題じゃない。届くと信じれば……心が生み出すエネルギーの全てを信じる力に変えて、もう少し、もう少し手を伸ばせば……ほら。

そっと、優しく、掌に星を包み込む。

同時に、両の眼を開ける。

舞い散る雪片。砕けた氷の床。そして、握り合わされたまま固く凍り付き、つららが垂れ下がる両手。

ゆっくり、左右の手を解く。落ちたつららが床に当たって砕ける。少しずつ、少しずつ、両手を広げていく。

だが、掌の中には、何もない。たちまち雪がこびりつき、灰色の掌を白く染めていく。

全部、幻……？ 極寒の吹雪のなかで見た、短い夢……？

いや。

極小の……氷の結晶ひとつぶよりもお小さい光点が一つ、掌の中央で淡く瞬いている。

ちか、ちか、と確かな周期で、あたかも吹雪に彷徨う旅人を導くビーコンのように。

あるいは、心臓の拍動のように。

ハルユキは、掌を丸めて周囲の冷気から光点を守りながら、そっと息を吐きかけた。

光の点滅が、少しずつ早くなる。秒間一回の周期が、三回に……そして十回に。やがてその

振幅はハルユキの眼でも捉えられなくなり、連続点灯状態で安定する。

ふわり、と光が広がり、直径二センチほどのリングとなる。輪の下に、細長い紡錘が出現す

る。更に、紡錘の両側から、二枚の小さな羽根が伸びる。全体が、乳白色の光を帯びる。

見間違えるはずもない。これは、加速研究会の本拠地でハルユキを先導してくれた、メタトロンの立体アイコンだ。

本物なのだろうか？ それとも、ハルユキがイメージーションで作り出した、一瞬の幻なのか……？

恐る恐る右手を動かし、人差し指で紡錘部分をそっと撫でる。

触れる。実体がある。それに、体の芯まで染み込むような、仄かな熱も。

「……………メタ、トロン……………」

震え声で呼びかけながら、もう一度アイコンに触れようとした――

その瞬間。

「この……………無礼者!!」

強烈な叱声に頭の芯を強打され、ハルユキは仰け反って尻餅をついた。

その際にアイコンは掌から抜け出し、ハルユキの頭上十センチで羽根をばたばた震わせてホバリングしながら、続けて叫ぶ。

「しもべの身でありながら、私にそのような触れ方をして許されるとでも思っているのですか、

シルバー・クロウ！　いまの不埒な行いに対する罰として、私に仕える期間を五百年間延長します！！」

「……………」

しばし呆然と立体アイコンを見上げていると。

不意に、視界が歪んだ。

ゴーグルの下で、アイレンズから熱い液体が零れるのを感じる。それはフェイスマスクの下側から零れ落ち、アパターの装甲に降り積もった雪をたちまち溶かす。あとからあとから、熱い涙は止めどなく湧き出す。

幻ではない。

謎の声が教えてくれたとおり、消えてはいなかったのだ。ロジックの詳細は不明なれど、ハルユキとの繋がりが残っていて、その回路が活性化することによってメタトロンの魂も消滅の際から甦ったのだ。

声を出すこともできず、ただただ涙を零し続けていると、メタトロンは少しかげ語気を緩めて言った。

「たいたい、私が完全なる消滅を免れたことは、リンクが断たれても貸し与えた翼が残存した時点で推測可能でしょう。そもそもあの程度の敵との戦いで、この私が消えるなど有り得ないことです。お前もしもべなら主の力量くらい理解しておきなさい。しかしともあれ、こうして



私とのリンクを再構築できたことは評価しましょう。残念ながらいまの私には褒美らしい褒美を与えることは……」

そこまでで、限界だった。

溢れ出そうとする感情を抑えきれず、ハルユキは両手を伸ばすと、立体アイコンをしつかりと包み込んで胸に抱き締めた。

「あつ、こら、何をするのです！」

小さな羽根の振動や、仄かな光の温もりを愛おしく感じながら、囁く。

「……おかえり、メタトロン。きみが生きて……僕は……ぼくは……」

どうにかそこまで語りかけたが、あとは込み上げる嗚咽に紛れて言葉にならなかった。

弱まり始めた吹雪の中、氷の上に小さく体を丸めて、ハルユキは泣いた。幼い子供のように、声を上げて泣きじやくった。

掌の中の振動が、まるで呆れるように――それとも宥めるように穏やかな拍動へと変わり、少しかだけ熱量が増した。傷ついた両手の痛みを、優しい温度が癒していく。

いつの間にか雪が止み、厚い雲の隙間から金色の日差しが射し込んでいることにも気付かず、ハルユキはいつまでも、いつまでも泣き続けた。

あとがき

『アクセル・ワールド16 白雪姫の微睡』をお読み下さり、ありがとうございます。

この巻の《白雪姫》が登場するシーンは、1巻『黒雪姫の帰還』を書いた頃からぼんやりと頭の中にありました。1巻は二〇〇九年二月に出版されましたが、前年の四月に締め切られた第十五回電撃小説大賞の応募作だったので、実際に執筆を始めたのは二〇〇七年の秋頃だったと記憶しています。つまり……（指折り計算中）このあとがきを書いている二〇一三年十二月の時点で、もう六年以上も昔のことなわけですね。

1巻部分の原稿を書いていた頃は、物語の行き着く先を想像はすれどそこまで書き続けようという意志も覚悟もありませんでしたから、身に余る賞を頂き、電撃文庫として出版され、多くの読者さまに支えられて、六年十六冊にわたってお話を書き綴った果てに《このシーン》に辿り着いたことには深い感慨があります。「アクセル・ワールド」は本当に幸運な作品でした。応援して下さった皆様にはどれほど感謝してもしきれません。

……などと書くと最終回みたいですが、ぜんぜんまったくそういうことはなく……（汗）。とうとう白雪姫サマが登場したといっても顔見せだけで速攻帰っちゃいましたし……。いろんな謎の問題だのも山ほど積み重なったままですし……。

ほんとに、シミジミしてる場合じゃないですね。この巻でようやく一区切りとなった『IS Sキット編』が始まったのは二〇一二年四月に出た11巻なので、皆様にはまるまる一年半もあの黒メダマにお付き合い頂いてしまったわけです。恐ろしいことに、作中のカレンダーでは11巻が二〇四七年の六月二十三日、16巻が六月三十日なので、六冊かけて一週間しか時間が進まなかったという……。というかその前の『災禍の鎧櫃』が始まった6巻も、同月十六日のお話なんですけどネ！ 道理で雨が降ってばかりだと思いました！

ともあれ、14巻のあとがきで「次で一区切り！」と宣言しておきながらサッパリ区切れなかったこと、15巻のあとがきでまさかのアクセル弁当二本立てになってしまったことを深くお詫び申し上げます。やっと一段落となりましたが、お話はまだまだ続きます。17巻は『鎧』も『眼球』も出てこない明るめの話になる……予定です。少なくとも梅雨は明けると思います！

スケジュール遅延が常態化してご迷惑おかけしまくってしまったイラストのHIMAさん、担当の三木さんと土屋さん、ありがとうございます！そして読者の皆様、六年目も宜しくお願ひいたします！

二〇一三年十二月某日

川原 礫

「遊びではない」 天才プログラマー・茅場晶彦

個人ウェブサイトながらも、
閲覧数650万PVオーバーを記録した伝説の小説！

・オンライン

イラスト / abec

電撃コミックス「ソードアート・オンライン アインクラッド」①②巻 (作画 / 中村野子)

電撃コミックス「ソードアート・オンライン フェアリー・ダンス」①②巻 (作画 / 荒月 真)

電撃コミックスEX「ソードアートと☆おんらいん。」①巻 (作画 / 南十字星)

原作 / 川原 礫 キャラクターデザイン / abec

※「ソードアート・オンライン フェアリー・ダンス」と「ソードアートと☆おんらいん。」は、「電撃文庫 MAGAZINE」(隔月刊10号)にて連載中！

発売中!!

さらに2つのコミカライズも展開中!!!!

「ソードアート・オンライン ガールズ・オブス」(作画 / 宮藤 雄)「電撃文庫 MAGAZINE」にて連載中!

「ソードアート・オンライン プログレッシブ」(作画 / 比村奇石)「電撃 G's マガジン」(毎月27日発売)にて連載中!

「これは、ゲームであっても

『キリト……あとは、頼んだ、ぞ……。』

世界を……人々を……守っ……て……」

《公理教会》の象徴である白亜の塔
《セントラル・カセドラル》。

隔離された大図書館の賢者《カーディナル》の助けを借り、
ユー・ジォは聖王騎士となっていたアリスを《本当の妻》に戻すため、
キリトはこのアンダーワールドの消滅を回避するため、
最高司教《アドミニストレータ》の待つカセドラル最上階、一〇〇階を目指す。

しかし予期せぬアクシデントが重なり、
登塔中にキリトとユー・ジォは離ればなれになってしまう。
キリトは塔の外壁に投げ出されながらも、
整合騎士アリスと一時的に共闘を約し戦線に復帰、
塔の内部を遡っているであろうユー・ジォの後を追う。
そして到達した九十九階。

キリトとアリスの前に現れたのは、
整合騎士の鎧に身を包み、瞳に冷たい光を浮かべたユー・ジォだった。
躊躇いなく剣を抜くユー・ジォを、やむなく迎え撃つキリト。
旅立ちの日、遠い雷鳴に感じた戦いと別離の予兆は真実となってしまうのか、
キリトの必死の呼びかけは、記憶を封じられたユー・ジォに届くのか。

電撃文庫

ソードアート

最新第14巻『アリシゼーション・ユナイティング』は、
電撃文庫にて2014年4月10日発売——！

特報!!! 川原礫による新展開を
111次ページにて発表!!!

「絶対的な『孤独』を
求める……」

だから、僕のコードネームは
『アイスレータ』です」



二〇XX年 五月

月の裏側に建設された宇宙電波望遠鏡「ドライデン」が、
異常な強度と反復を持つ電波を受信した。
あまたの専門家が電波の分析を行ったが、
地球外文明からの有意信号であるという確証を得られた者すら一人としていなかった。
——その信号が、ある異域に対する警告であったことが判明したのは、
全てが始まり、そして終わったあとのことだった。

翌月、

地球上の、いくつかの高密度エネルギー地域に、
人類が初めて接触する地球外有機生命体が複数落下した。
ともに《サードアイ》と呼ばれることになるその球体は小さく、
知性と呼べるものも持っていなかったが、
接触した人間たちに、現代科学では解明できない《力》を与えた。
ある者には、音さえ追いつく《速さ》を。
ある者には、測さぬ断ち切る《刃》を。
そしてある者には、万物を噛み千切る《歯》を。

十七歳の少年、空木(うつぎ)ミナルもその中の一人だった。
ミナルがただ一つ望み、そして得た能力、それは《孤独》。

絶対的な孤独を実現する力は、しかしミナルを望まぬ戦いに巻き込んでいく。
深紅(ルビー)と漆黒(ジェット)のサードアイを宿す者たちの、
果てしなき闘争の渦に——。

『AW』『SAO』の川原礫によって描かれたウェブ小説、
その最後の作品がついに登場！

電撃文庫

絶対ナル孤独

第一章 咀嚼者-The Biter-

(仮)

2014年夏頃発売予定——！

●川原 礫著作リスト

- 「アクセル・ワールド1―黒雪姫の帰還―」(電撃文庫)
「アクセル・ワールド2―紅の暴風姫―」(同)
「アクセル・ワールド3―夕闇の暗殺者―」(同)
「アクセル・ワールド4―蒼空への飛翔―」(同)
「アクセル・ワールド5―星影の浮き輪―」(同)
「アクセル・ワールド6―浄火の神子―」(同)
「アクセル・ワールド7―災禍の鐘―」(同)
「アクセル・ワールド8―運命の流星―」(同)
「アクセル・ワールド9―七千年の祈り―」(同)
「アクセル・ワールド10―Elements―」(同)
「アクセル・ワールド11―超硬の鎧―」(同)
「アクセル・ワールド12―赤の紋章―」(同)
「アクセル・ワールド13―水際の号火―」(同)

「アクセル・ワールド14―激光の太天使―」(同)

「アクセル・ワールド15―終わりと始まり―」(同)

「アクセル・ワールド16―白雪姫の機嫌―」(同)

「ソードアート・オンライン1 アインクラフト」(同)

「ソードアート・オンライン2 アインクラフト」(同)

「ソードアート・オンライン3 フェアリーダンス」(同)

「ソードアート・オンライン4 フェアリーダンス」(同)

「ソードアート・オンライン5 ファントム・バレット」(同)

「ソードアート・オンライン6 ファントム・バレット」(同)

「ソードアート・オンライン7 マザーズ・ロザリオ」(同)

「ソードアート・オンライン8 アーリー・アンド・レイト」(同)

「ソードアート・オンライン9 アリシゼーション・ピギニング」(同)

「ソードアート・オンライン10 アリシゼーション・ランニング」(同)

「ソードアート・オンライン11 アリシゼーション・ターニング」(同)

「ソードアート・オンライン12 アリシゼーション・ライジング」(同)

「ソードアート・オンライン13 アリシゼーション・ディバイディング」(同)

「ソードアート・オンライン プログレッシブ1」(同)

「ソードアート・オンライン プログレッシブ2」(同)

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

電撃文庫公式ホームページ 読者アンケートフォーム

<http://dengekibunko.dengeki.com/>

※メニューの「読者アンケート」よりお進みください。

ファンレターあて先

〒102-8584 東京都千代田区富士見1-8-19

アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部

「川原 礫先生」係

「HIMA 先生」係

本書は書き下ろしです。

 電撃文庫

アクセル・ワールド16

しろきひめ まとろみ
—白雪姫の微睡—

かわはら れき
川原 礫

発行 2014年2月8日 初版発行

発行者 塚田正晃
発行所 株式会社KADOKAWA
〒102-8177 東京都千代田区富士見 2-13-3
03-3238-8521 (営業)

プロデュース アスキー・メディアワークス
〒102-8584 東京都千代田区富士見 1-8-19
03-5216-8399 (編集)

装丁者 装束裕司 (META+MANIERA)

印刷・製本 旭印刷株式会社

※本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者などの第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

※落丁・乱丁本はお取り替えいたします。購入された書店名を明記して、アスキー・メディアワークス お問い合わせ窓口までにお送りください。

送料不付負担にてお取り替えいたします。

但し、古書店で本書を購入されている場合はお取り替えできません。

※定価はカバーに表示してあります。

©2014 REKI KAWAHARA

ISBN978-4-04-866320-5 C0193 Printed in Japan

電撃文庫 <http://dengekibunko.dengeki.com/>

株式会社KADOKAWA <http://www.kadokawa.co.jp/>

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで「小さな巨人」としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の思い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、(Changing Times, Changing Publishing)時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦

アクセル・ワールド1 ―黒雪姫の帰還―

川原礫
イラスト／HIMA

《黒雪姫》と呼ばれる少女との出会いが、デブでいじめられっ子の未来を変える。ウェブ上でカリスマの人気を誇る作家が、ついに電撃大賞（大賞）受賞――

か16-1 1716

アクセル・ワールド2 ―紅の暴風姫―

川原礫
イラスト／HIMA

デブでいじめられっ子の少年・ハルユキの人生は、黒雪姫との出会いによって一変した。そんな彼のもとに、「お兄ちゃん」と呼ぶ見知らずの少女が現れて!?

か16-3 1775

アクセル・ワールド3 ―夕闇の略奪者―

川原礫
イラスト／HIMA

「ゲームオーバーです、有田先輩……いえ、シルバークロウ」黒雪姫不在の中、スクールカーストの頂点に立った新入生。圧倒的な彼の力の前に、ハルユキは倒れ……!!

か16-5 1834

アクセル・ワールド4 ―蒼空への飛翔―

川原礫
イラスト／HIMA

「ここから、もう一度這い登ってみせる。僕はもう、下だけ向いて歩くのはやめたんだ」翼をもがれたシルバークロウハルユキが、ついに復活する――

か16-7 1899

アクセル・ワールド5 ―星影の浮き橋―

川原礫
イラスト／HIMA

とある日、ハルユキは新たなゲーム・ステージ出現の気配を察知する。《宇宙》ステージ。そこに迫り着いたハルユキは、歴史的なゲームイベントを体験する――

か16-9 1953



電撃文庫

アクセル・ワールド6 ―浄火の神子―

川原礫
イラスト／HIMA

《災禍の鎧》に侵されていたハルユキは、黒雪姫以外の六王から、《浄化》の命令を下される。その鍵を握るアバターは、意外な場所に幽閉されていて……。

アクセル・ワールド7 ―災禍の鎧―

川原礫
イラスト／HIMA

《帝城》に閉じ込められた《シルバー・クロウ》。脱出不可能と思われるそこで、ハルユキは不思議な《夢》を見る。それは、《災禍》にまつわる二人の物語……。

アクセル・ワールド8 ―運命の連星―

川原礫
イラスト／HIMA

思まわしき強化外装（「SSキット」）に触まれ、親友同士で戦うことになったタクムとハルユキ。人の心意が強く共鳴し合い、激突する……その勝者は？

アクセル・ワールド9 ―七千年の祈り―

川原礫
イラスト／HIMA

再び《クロム・ディザスター》となったハルユキ。滅ぼすべき敵を求めて《加速世界》を飛翔する。そして、その眼前に《緑》のアバターの姿が立ちふさがり……。

アクセル・ワールド10 ―Elements―

川原礫
イラスト／HIMA

ハルユキが新入生の陰謀に巻き込まれていたころ。黒雪姫は修学旅行先の沖縄で、不思議なアバターから対戦を仕掛けられていた……。書き下ろし含む三編収録。

| | | | | | | | | | |
|---------|------|---------|------|---------|------|---------|------|---------|------|
| か-16-18 | 2238 | か-16-17 | 2202 | か-16-15 | 2135 | か-16-13 | 2082 | か-16-11 | 2018 |
|---------|------|---------|------|---------|------|---------|------|---------|------|

アクセル・ワールド11

超硬の狼

川原礫
イラスト/HIMA

打倒(加速研究会)で導き出された秘策とは、シルバー・クロウの新アビリティ(理論絵画)獲得作戦だった。謎の最強(レベリ)アバターも登場、いったいどうなる?

か-16-20 2307

アクセル・ワールド12

赤の紋章

川原礫
イラスト/HIMA

神獣級エネミー・大天使メタトロン攻略アビリティの習得ミッションに挑むハルユキ。そこに立ちふさがる強敵アバター・サベラスとの戦いは意外な結末を迎え――

か-16-22 2376

アクセル・ワールド13

水際の号火

川原礫
イラスト/HIMA

《メタトロン》打倒を目指すハルユキたちの戦いの舞台は、リアルワールド/梅郷中学文化祭へ! 加速世界に混沌を広めんとする《マゼンタ・シザー》の魔手が迫り――

か-16-25 2487

アクセル・ワールド14

激光の天使

川原礫
イラスト/HIMA

《アクア・カレント》救出に挑むハルユキたち。しかし、帝城東門で待ち受けていた《四神セイリウ》最大最強の攻撃《レベルドレイン》の恐怖がハルユキに迫る――

か-16-27 2549

アクセル・ワールド15

終わりと始まり

川原礫
イラスト/HIMA

覆われたニコを救うため、単身でブラック・バイスを追うハルユキ。大天使メタトロンの加護を受け、ついにその《影》に手を届かせるが――

か-16-29 2620

アクセル・ワールド16

—白雪姫の微睡—

川原礫
イラスト／HIMA

〈加速研究会〉VSハルキキ 事態はサイベラスに宿る人格〈ダスクテイカー〉が覚醒、さらに〈災禍の鎧〉マークⅡまで誕生してしまう。この激戦の勝者は——？

か16-31 2691

ソードアート・オンライン1 アイנקラッド

川原礫
イラスト／abec

クリアするまで脱出不可能、ゲームオーバーは「死」を意味する。この仮想空間は、ゲームであっても遊びではない。第15回電撃大賞〈大賞〉受賞者が描く大作！

か16-2 1746

ソードアート・オンライン2 アイנקラッド

川原礫
イラスト／abec

アイנקラッドでは珍しい〈ピーストイマー〉の少女・シリカが窮地に陥ったとき、彼女を助けたのは、素性も分からぬ謎の〈黒い剣士〉キリトだった。

か16-4 1804

ソードアート・オンライン3 フェアリー・ダンス

川原礫
イラスト／abec

謎のデスゲームSAOをクリア、現実世界に戻ってきたキリト。しかし、攻略パートナーであり、永遠の誓いをたてた想い人アスナは、いまだ帰還しておらず……。

か16-6 1862

ソードアート・オンライン4 フェアリー・ダンス

川原礫
イラスト／abec

MMO〈ALO〉内へ、アスナを救うためログインしたキリトは、ついに〈世界樹〉までたどり着く。しかし彼の秘密を、族と共にした少女・リーファが知ってしまい……。

か16-8 1924

ソードアート・オンライン5
ファンタム・バレット

川原礫
イラスト／abeecc

〈SAO〉事件から一年。次にキリトを待ち受けるのは、銃と鋼鉄のVRMMO〈ガンゲイル・オンライン〉。突如発生した謎の殺人事件を巡るが…… 新章突入！

か16-10 1985

ソードアート・オンライン6
ファンタム・バレット

川原礫
イラスト／abeecc

〈GGO〉にログインしたキリトは、銃が支配するこのゲームで唯一〈光刻〉を駆使し、〈BoB〉を勝ち進む。そして決闘。ついに〈死闘〉が姿を現して……

か16-12 2046

ソードアート・オンライン7
マザーズ・ロザリオ

川原礫
イラスト／abeecc

次世代飛行系VRMMO〈アルヴヘイム・オンライン〉にてアスナが遭遇した、とあるアバターとの大切な思い出とは？ 〈マザーズ・ロザリオ〉編 登場！

か16-14 2107

ソードアート・オンライン8
アーリー・アンド・レイト

川原礫
イラスト／abeecc

〈SAO〉で起こった奇怪な殺人の謎を追う「園内事件」、〈ALO〉伝説の聖剣獲得クエストを描く「キャリバー」、キリトが〈SAO〉初日に体験したエピソード「はじまりの日」を収録！

か16-16 2170

ソードアート・オンライン9
アリンゼーション・ピギニング

川原礫
イラスト／abeecc

気づけばキリトは、直前の記憶を無くし、謎の仮想世界に入り込んでいた……。『SAO』史上最も支持を得たエピソード、壮大なる〈アリンゼーション〉編 開幕！

か16-19 2278

ソードアート・オンライン10

川原礫
イラスト／abec

謎のファンタジー世界に入り込んでしまったキリトは、そこで出会った少年ユージオと共に、帝都（セントリア）に向かう。そして、二年が過ぎた――。

ソードアート・オンライン11

川原礫
イラスト／abec

その《悪意》は突然やってきた。キリトとユージオの世話役少女二人が、下劣な貴族の腹に嵌められた。凄惨な二人の姿を見たユージオの怒りは、極限に達し……。

ソードアート・オンライン12

川原礫
イラスト／abec

アリスの記憶の謎を解くため、《塔》の頂点を目指すキリト。しかし彼の前に、《シンセサイズの秘儀》により生まれた最強の《整合騎士》たちが立ちちはたかる――

ソードアート・オンライン13

川原礫
イラスト／abec

キリトと離ればなれとなったユージオは、単身で塔を上り続ける。彼の前に、最強の整合騎士ヘルクォーリが立ちふさがる。その決戦の結末は、意外な展開で幕を閉じ……。

ゼロから始める魔法の書

虎走かける
イラスト／しずまよしのり

『魔術』から『魔法』への大転換期――。禁断の魔法書をめぐって契りを交わす、魔女と獣人のグリモアファンタジー…… 第20回電撃小説大賞（大賞）受賞作！